赤松中学

# 緋弾のアリアXV

Aria the Scarlet Ammo

祁答院慧（コンステラシオン）と銀氷

MF文庫J

# 緋弾のアリアXV

Aria the Scarlet Ammo

コンステラシオン

帚と銀氷

赤松中学

ＭＦ文庫Ｊ

# 緋弾のアリアXV
## 哿と銀氷（コンステラシオン）

赤松中学

口絵・本文イラスト●こぶいち

Contents

1弾 真空爆弾（シーマ・ハリ）
2弾 帑と銀氷（コンステラシオン）
3弾 仮面舞踏会（マスカレード）
4弾 高く危険な道（クラーフ・ツエッペリン）
5弾 歌う鉄十字の虎（パンツァー・リート）
Go For The NEXT!!! オペラ座の妖姦（ファントム）



# 1弾　真空爆弾（シーマ・ハリ）

――今日は、クリスマス。

普通なら……どんちゃん騒ぎのテレビを見て、ケーキを食べる日なんだ。

ところが5俺（おれ）は、薄暗いタンカーの上で銃撃戦。

辺りを囲むのは、イヌ頭（アヌビス）、トリ頭（ホルス）、ワニ頭（セベク）――エジプトの神々を模（も）した砂人（ゴレム）形ときてる。

一体どこで人生のボタンを掛け間違えたかね、俺。

「藍幇（ランパン）との決着がついたと思ったら、すぐこれとはね。お互い生きて帰れるかな？」

「バカにしないでよ。まあ、背中ぐらいは守ってあげるわ」

その掛け間違えボタンことアリアは、ぽむ。

俺の背中にそのちっちゃな背をくっつけてきた。

――背中合わせ（バック・ツー・バック）。

包囲された際、お互いの死角を守り合うフォーメーションだ。

俺たちは古い拳銃（けんじゅう）や斧（おの）を携えたゴレムたちを撃ち崩しつつ、甲板上（アッパーデッキ）を進む。

洋上の強い夜風に煽られながら、剥き出しの配管を注意深く乗り越えていく。

ゴレム兵の数は、多い。40体や50体じゃきかない数だ。

だが……弱い。

動きも単調で、昆虫程度の知性しかないように思える。材料もただの砂だ。

これなら、昔カジノで戦った砂鉄のゴレムたちの方が強かった。

砂人形としての造形も、雑だ。全身を覆うナチスの野戦服を着ているのは、その造りの甘さを隠すためなのかもしれないな。

「――アリア、コイツらはきっと時間稼ぎだ。早く切り抜けよう」

この大規模2種石油タンカー、シーマ・ハリ号はシージャックされている。

船尾楼にはためく逆鉤十字旗――ナチス・ドイツ軍の残党、魔女連隊のカツエに。

『厄水の魔女』の異名を取るカツェは、このタンカーを利用したテロ攻撃を目論んでいる。港湾内で15万トンもの原油を流出・燃焼させて、この香港中から酸素を奪うつもりなのだ。

それはナチスが開発していた大量破壊兵器、『真空爆弾』のアレンジ版ともいえる戦術。



俺たちはそれを止めるため、切り込み隊長としてこの船に乗り込んだ。

タンカーは香港を南北に分けるヴィクトリア湾、その西端へセットされようとしている。航行速度から見て、タイムリミットは20分ってとこだ。

「キンジ、あの建物を目指すわよ。カツェとパトラはあのてっぺんにいる」

アリアが、タンカー後部にある小さなビルのような建物を銃口で指す。

「どうしてそう思うんだ」

「カンよ。強いていうなら、コイツらの動き。一定程度は自律的に動いてるみたいだけど、パイプラインとかの死角から来すぎてる。まるであたしたちを俯瞰して見てるみたいに」

「……俯瞰して見てる何者かの指示を受けてる、って事か」

「そう。それが言いたかったのよ」

理屈が後からついてきてる感じの、アリアの優れた直観は――

「多分、アタリだね。確かに建物周辺はゴレムの守備が微妙に厚い」

そしてアリアと2人、船尾側へ駆けていく。

視界の左右には、九龍半島と香港島のカラフルな夜景が煌めいている。もう

湾内深くに入り込んだこの暴走タンカーを、往来していた無数の船たちが慌てて避けていく。

左舷側を横目で見ると、

（あの、作りかけの高速道路は――見覚えがあるぞ）

俺たちと孫がカーチェイスを繰り広げた、東區走廊だ。早くもタンカーは北角の辺りを通過しつつあるんだ。あの気の良い下町のみんなの、そしてユアンの家がある北角を。

タンカーは、ただの船じゃない。ヘタな空母よりもデカい、人工浮島みたいな巨大船だ。

このシーマ・ハリ号も町の一角ぐらいあり、甲板の最後部には5階建てのビルが悠々と建っていた。

そのビルの入口付近では――

2体のゴレムが土嚢の陰から、ナチス時代の汎用機関銃MG42を撃ってきたぞ。

だが、距離も遠いし集弾もバラバラだ。

「ちゃんと狙えないんなら、そんなもん使うんじゃないわよッ」



呆れ顔のアリアが2丁拳銃で2体を撃ち、俺たちは砂に還ったアヌビス兵を跳び越えて棟内に侵入する。

建物の、内部は……簡素なビジネスホテルみたいな感じだな。

ここは原油を運ぶ長旅の間、船員たちが寝泊まりする居住棟なのだろう。

荒れていた棟内には、ゴレムの気配はない。階段にもだ。

使役者の視界外でも自律して動けるほど高性能なゴレムは、今は使ってないって事か。

以前ジャンヌが言ってたが、香港は対魔性の強い都市。そこではカツェの仲間――このゴレムの使役者と思われる砂礫の魔女・パトラも、魔術が使いにくいのかもしれない。

最上階（5th deck）に上がり、操舵室らしきドアをアリアが蹴り開けると――

高精度GPS（EDIS AIS）装置、電子海図、識別装置などが並んだ広い室内の奥に――いたぞ。

肌も露わな古代エジプトの衣装を着て立つ、パトラと……

逆に全身を覆うようなナチスの黒制服を着た、カツェ＝グラッセが。

「――海は、良いものぢゃの。イ・ウーの頃を思い出す」

俺たちが向ける拳銃に眉一つ動かさず、パトラは水晶玉を指先でクルクル回す。

「そのイ・ウーで理子やココにゃ『ジャックしたら自分も乗り込め』って教えたからな。それを聞いてノコノコ来ると思ったぜ。すぐ全員は来れねーって読みもビンゴだ」

こっちを向けた船長席にふんぞり返るカツェは、黒い魔女帽の下で笑っている。

「カツェ、パトラ。誰に聞いたの。あんたら、動きが速すぎたわ」

白銀と漆黒のガバメントをそれぞれに向けながら放った、アリアの第一声に――ニヤリ、とカツェが眼帯で隠していない方の片目を細めた。

敵を前にしているにも拘わらず……俺は今のアリアの発言に驚き、振り向いてしまう。

俺たちの中に――内通者がいる、と言っているのか。アリア。

「あんたら西ヨーロッパにいたんでしょ。藍幇から連絡があるより早く移動してこなきゃ、ここまで大掛かりな攻撃は準備できなかったハズよ」

アリアの発言と同時に、俺はヒステリアモードの頭でカツェの攻撃準備に必要な日数を概算してみるが――確かに、少し速い。

加えて、カツェは攻撃方法について上と揉めたような事も言っていた。バスカービルが香港に進撃することを事前に誰かから聞いてないと、到底間に合わなかっただろう。

「理子に聞いたけど、パトラ。あんたの星占いは精度が67%だったっけ？」

「……71%ぢゃ。妾とて日々精進しておる」

アリアに言われて、語るに落ちているパトラだが……眷属も、7割程度の予測をもとにわざわざ敵将クラス2人を香港まで動かすような事はしないだろう。

つまり――漏れていたのだ。

俺たちが香港に仕掛けるという、もっと確かな情報が。

「で、アリアちゃんよォ。あたしらが『この人に聞きました』ってペラペラ喋ると思ってんのか？」

「思ってないわよナチ。だから喋らせる。キンジ、あんたはカツェを。あたしはパトラをやる。あんたたち、破壊活動防止法違反、艦船損壊・器物損壊罪の他、暴力行為等処罰に関する法律および航海法違反……あと、えっと……その他あれこれで風穴逮捕よっ！」

話し合いの余地、もう少し残そうよアリア……
とも思うが、俺も、ここはやむを得ないという気分だ。時間も無いしな。
そして――俺とアリアは同時に右を向き、
――バッ！　ババッ！
室内の側面、ベランダに続く窓のカーテンを撃つ。
ガシャガシャッ！　と窓が割れる音が上がり――カーテンの向こう、簡素なベランダで左右に分かれて銃撃を躱した、気配は――2つ。
本物の、カツェとパトラだ。
ヒステリアモードの洞察力で気づいたが、前方にいた2人は精巧な砂人形と厄水形。
さっきカツェは白黒の厄水形を俺たちに見せていたが、白黒しかできないと見せかけてカラー版も出来たって事だ。狡猾な女め。
パトラはパトラで、こっちの砂人形をしっかり作るのに集中していたせいもあって……ゴレム兵がお粗末だったんだろうな。
前のめりに崩れた、砂のパトラは――ざざっ。
星砂で出来ていたらしく、その一部が小さな砂嵐になってアリアに飛びかかる。



「――ッ？」
アリアは目を潰されないよう屈み、砂を背で受け――連射した.45ACP弾でカーテンを吹っ飛ばす。だが、その先で――ビシビシビシッ。
ベランダにいた本物のパトラが、自分の周囲を衛星のように飛ぶ砂の小盾で弾を止めた。
「ほほほっ。さすがシャーロック卿の血族ぢゃ。しかしもう、砂に呪われておるぞ」
紅を引いた口元に手の甲を寄せ、パトラは愉快そうに笑う。
「……？」
さっき砂を受けた、アリアの背中……いや、体全体から煙のようなものが上がっている。
あれは――アンベリール号で見た。
人体から水分を抜く、パトラの呪術……！
「……うっ……？　はぁ……はぁっ、はっ……！」
「アリアっ！」

イヌのように舌を出し、荒い息をしながら倒れたアリアを俺が助けようとした時。

ベランダ、パトラの隣で――ミネラルウォーターのペットボトルに口をつけるカツェの姿が見えた。

（……あれは！）

カツェがボトルから口を外した瞬間、俺はその場で体を回すように跳ね――

――バシュッッッ！

カツェが口から俺の心臓めがけて撃ってきた、水鉄砲のような攻撃をスレスレで避けた。

防弾制服を掠めて引き裂いた水の矢は、背後の壁に風穴を開ける。壁の中の鉄骨すら、チーズのように削いでいったぞ。

今のは昔シャーロックが俺を撃った、ウォーターガン――超高圧で水を発射する術だ。射程距離は短いようだが、質量が大きい分、貫通力はライフル弾よりも高い。離れた物を切断もできるだろう。どちらかといえば、レーザーに近い攻撃だ。

それを躱したものの、大きくバランスを崩した俤は……



転倒こそ免れたが、銃の構えを解き、片膝をついて着地せざるを得ない。

「なーんだ。知ってたか」

ボヤいたカツェはペットボトルを捨て、金メッキのルガーP08を抜いている。

そして銃口をこっちに向けつつ、パトラと共に室内に攻め込んできた。

「……イ・ウーで、『予習』した事があるんでね」

と、俺は強がるが――

アリアの救出が間に合わない。

ぐい、とパトラがアリアのツインテールの片方を引っぱり、ムリヤリ立たせる中……

「アリア……っ！」

女子の安全を優先するヒステリアモードの性で、そっちに気を取られたのも悪かった。

カツェは隙だらけの俺に駆け寄り、ゴツッ。

片膝立ちの俺の頭部、額の少し上に銃口を突きつけてきた。

「なー？　あたしの言った通りだろ？　パトラ。砂人形をザコく設定しときゃ、いい気になって突っ込んでくるハズだって」

「んむ。妾たちとて璃璃粒子の濃い夜にはあまり戦いとうなかったが、正解ぢゃったの」

俺とアリアを追い詰めた2人の魔女が、そんな事を語り合う。

アリアは体から湯気を上げ、歯を食いしばりながらも……

意地でも、両手の銃を放さずにいる。

「おーいアリア。いいかげん銃を捨てろよ。お前、こいつが好きなんだろ？」

からかうようなカツェのセリフに、アリアは苦しげに細目を開け……

「バッ……バカッ……そ…んな…んじゃ……」

何か言おうとしたが、それもままならない状態だ。

「よーし。こいつ処刑するぞー？　処刑しちゃうぞー？」

続けてそう言われたアリアは指を震わせ、拳銃を捨てそうな動きを見せ始めた。

――ダメだ、アリア。

銃を放してはいけない。

お前が武装解除したって、どうせコイツは俺を撃つ。

俺が撃たれたら撃たれたで、その後もお前は戦い続けなければならないんだ。



「――アリア」

銃を頭に突きつけられたまま、俺はアリアをまっすぐ見つめる。

「大丈夫。俺は死なない。俺は武偵を……もう辞めないけど、いつか普通の武偵になってみせる。アリアもお母さんを、かなえさんを救う。2人とも、まだやるべき事を終えてない。だからまだ死ねない。死ぬハズがないんだ」

つい口をついて出たが、懐かしいな――この破綻した理屈。

忘れもしない4月、理子にハイジャックされたＡＮＡ６００便。あの機内で、あきらめかけた俺はアリアにこうやって励まされた。

だから今度は、俺が励ます番だ。銃を捨てるな。アリア。
俺の言葉に、カツェとパトラは顔を見合わせたが――
ハイジャックの時を思い出したらしいアリアは、ぐっ、と銃を握り直してくれた。
よし、アリア。それでいい。
銃を持ち上げられずにいるが、それでもいいんだ。
戦う意志がある限り、勝利の可能性はなくならないのだから。
「――パトラ。君にアリアは渡さない」
俺の言葉に、アリアは顔を赤らめ……パトラはキョトンとし……カツェは眉を寄せて、銃口を頭により強く押しつけてきた。
「ケッ。『アリアは渡さない』？　お熱いこって。ごちそうさまだぜ。お礼にクリスマスプレゼント――弾丸をくれてやる。ノロケるカップルは収容所送り！」
だが今のはそれをスッ飛ばして即銃殺確定のセリフだぜッ！」
眉をツリ上げたカツェが、引き金に掛けた指に力を込めていく。
「うーん。頭を撃たれたぐらいで死ぬかのう。遠山キンジが」
パトラは、しゃらん。少し首を傾げて、黄金のネックレスを鳴らしている。

「コイツは弾を素手で止めるとかウワサで聞いたけどな。でも、ゼロ距離なら掴みようもねーだろ？」

ニィ、と頬を引きつらせるようにほくそ笑んだカツェが――銃を持っていない方の腕で、手をまっすぐナナメ上に突き出すナチス式敬礼をする。

そして、

「勝利万歳（ジーク・ハイル）！」

――引いたッ。

引き金を。

その瞬間――

（ゼロ距離？　違うな）

俺の世界が、ほぼ静止したようになる。

これは、ヒステリアモードが見せる『スーパースロー』――

自分の体感時間を一気に伸ばし、世界を超高感度カメラで撮影したような光景に変える……今までは行き当たりばったりで出来ていた技だ。

さっき、孫（ソン）のレーザーを『矛盾（むじゅん）』で防いだ時に――

俺は、それを意識的に用いるコツを掴んでいる。



さて、カツェ。

君はこれをゼロ距離射撃と呼んだが、それは違うよ。

銃口が頭にくっついていようと、弾と俺の距離はゼロじゃない。

その銃の中、発砲される弾丸が籠められた薬室（チェンバー）から銃口までには僅（わず）かな距離がある。

弾が銃身（バレル）内を飛ぶ、刹那（せつな）の時で――

（橘花（きっか）、秋水（しゅうすい）――絶牢（ぜつろう）――桜花（おうか）、桜花！）

俺は頸椎（けいつい）から尾骶骨（びてい）までの26の骨、それらを包む脊柱起立筋（せきちゅうきりつきん）、頭板状筋（とうばんじょうきん）、大小菱形筋（しょうりょうけいきん）を全く同時に連動させた。弾丸と同じ方向に、頭を動かすために。

その速度は、およそ時速１１００㎞。

全筋骨連動技・桜花の逆回しによる減速防御（ぼうぎょ）技、それを静止状態（ノーモーション）から行う橘花＋秋水だ。

衝撃波による自損防止のため、速度を亜音速に留（とど）め――時速１２５㎞分の着弾を敢（あ）えて受けた石頭から血を散らしつつも、頭蓋骨（ずがいこつ）を貫通はさせない。

これで終わりじゃないぞ、カツェ。

俺は片膝（かたひざ）の姿勢から車輪のようにその場でバック宙し、敵の攻撃を回転力で

返す絶牢を放つ。頭から速度を渡された右脚は、桜花――上半身とは逆向きに連動させて、亜音速の蹴り上げで――バツッッッ――！

カツェの黄金銃をキックする。

そのまま360度の宙返りをした俺は――ダンッッッ――

自分の脳が頭蓋骨の内側に激突する寸前、左足でもう一発放った桜花で床を踏みつける。

その衝撃で、頭蓋の位置を脳の動きと揃えて――脳震盪も起こさせない。

そして次の瞬間、俺の体感時間の流れが戻る。

バツッッッダンッッッ！

カツェの手元と床から上がった衝撃音がほぼ同時に俺の耳まで届き、バラバラになったルガーP08が天井にバチバチッとメリ込み、俺の足下にはコンクリートの床を砕いたクレーターのような跡が広がった。

俺の頭を掠めた弾は、背後の窓ガラスを割って虚空に消える。

ハタ目には――

俺は撃たれて、真後ろに倒れた――かのように、見えただろう。この技の前半は。



だが後半は、なぜか弾丸が俺の頭に弾かれて背後の窓に当たり、なぜかカツェの拳銃がバラバラになって天井に激突し、なぜか俺は倒れずバック宙を切って着地した……という、不可思議な出来事が一気に起きたのだ。この一瞬で。

「……!?」

腕が跳ね上がって両手で敬礼してるような姿勢になったカツェも、

「……ほらの？」

ため息をついたパトラも、

「……！」

そして囚われのアリアも、何が起きたのか分からない顔をしている。

それはそうだろう。

やったはいいけど、正直、俺にもよく分からん。今のは。

「あー……カツェ。お互いさまだけど、タンカーで拳銃はやめようよ」

頭から鼻の両脇へと血の川を作りつつ、苦笑いで立ち上がった俺の頭蓋骨は……

よし、割れていないな。ヒビも入ってないだろう。石頭でよかったよ。

流血はヒドイが、頭皮は切れると激しく出血する部位。見た目ほどのダメー

ジはない。
右手を押さえる丸腰のカツェは、パトラの所まで後ずさり、
「ケッ。やっぱりかよ」
「思った通りぢゃの」
あのー……そうやって俺の超人性能を前提に戦うの、やめてくれませんか？
少しは驚いてくれないと、芸のやりがいもないし。
と、そこに――バサササッ！
「!?」
アリアを掴むパトラの手元めがけて、窓から何かが飛んできた。
それで手を離されたアリアの体からは、上がっていた水蒸気がピタッと止まる。
超能力に疎い俺だが、視覚的に分かった。飛来したあの何かが、呪いを打ち消したんだ。
室内を旋回して窓から抜け出ていった、その黒い物体は……
（コウモリ――？）
ごろごろっ、と転がるようにして俺の横に立ったアリアは――すーっ、はー



っ。呼吸を整えている。髪がパサついてツインテールがちょっと広がっており、ひどくノドが渇いているみたいだが……命に別状はなさそうだ。
対し、ベランダ側へ退いたカツェとパトラは――
俺たちの方よりも、窓の外に対して警戒している。
なので、俺とアリアもそっちを見ると……
「……っ……」
黒いコウモリの群が、夜空に紛れてこっちに迫ってきていた。まるで黒雲のように、集団で飛んでいる。
目立つのは、そのコウモリたちが力を合わせて垂らしている……
「――キンちゃん！　助太刀に来ましたよ！」
ブランコに乗った、白雪だ。
昭和の魔法少女アニメにあったような、今見ると逆に新しい飛び方だね。ていうか白雪、それで藍幇城から来たのか。恥ずかしくなかったか。
そのまま突進してきたコウモリの群と共に、白雪は――バッ。
スカートを押さえつつ、窓から室内へと飛び込んでくる。
そして回転受け身を取ると、俺たちを守るようにカツェとパトラへと立ちは

だかった。

「――キンちゃんをケガさせたのは、どっち」

怒りに声を震わせる白雪は、シャンッ。制服の背から、イロカネアヤメを抜いたぞ。

その隣にはコウモリたちがどんどん集まっていき……

「じゃあ、そうじゃない方を串刺しにしようかしら」

見る間に、三叉槍を持ったヒルダへと姿を変えていく。

藍幇城に残っていたみんなが、まずは超能力者の2人を優先して送り込んできたんだ。

焔の魔女、紫電の魔女――対――厄水の魔女、砂礫の魔女。

シーマ・ハリ号の船長室に魔女4人が揃い踏みし、映画みたいなオカルト大戦が始まりそうな光景になった。が……

その時もう既に、室内には霧と砂が舞い始めていた。

「煙幕……？　逃げるつもり？」

絞り出すようなアリアの声に、

「バーカ。これは戦略的転進ってんだ。あたしも酸欠でオダブツはイヤだから



な」

「ホホホッ。もう時間もあまりないからの」

カツェとパトラは、どんどん濃くなる霧と砂の向こうへ見えなくなっていく。

とうとう、室内の全てが見えなくなって――バサッ！　バサッバサッ！

ヒルダが、すっかり復活した翼で霧と砂を吹き飛ばすと――

もう、カツェとパトラはベランダから脱出した後だった。砂で作った紙飛行機のようなグライダーで、100mほど離れた甲板上・右舷の縁へ降りている。

そこで待機していたアヌビス兵たちが、神輿のように2つ担いでいる物体は……

（……魚雷……!?）

いや、あれは見覚えがある。イ・ウー時代のジャンヌが乗っていたのと同じ、オルクス――海水気化魚雷を改造して作った、高速潜航艇だ。それが2機ある。

あれで脱出するつもりか。このタンカーから――これから真空地獄に変わる、香港から。

「逃げ足の速いヤツらねッ！」

じゃきじゃきっ！　と2丁拳銃に弾倉を再装填しながらベランダへ飛び出し

たアリアが、バリバリリィッ！
思いっきり射程圏外にもかかわらず、.45ACP弾を斉射する。
2色のガバメントから放たれた14発の弾は——ギギギギギギンッ！
激しい金属音を連ね、1機のオルクスのスクリューを破壊した。
それを見たカツェとパトラは慌てた様子になったが、事態にすぐ対応する。
アヌビス兵に持ち上げられたパトラがもう1機のオルクスに乗り込み、続けてカツェも同じオルクスに入り……ぼんっ。アヌビス兵を何体か犠牲にして、砂の煙幕を巻き上げた。
そして——ざぶんっ。
砂塵の向こうから、ヤツらが死守したオルクスが海に入る音がした。
「ッ……！」
歯ぎしりするアリアは知らなかったみたいだが、オルクスは2人でも乗れない事はないのだ。俺と白雪が乗った時のように、ギュウギュウ詰めにはなるが。
「あーもうっ。爆雷！　誰か爆雷持ってきなさいよっ！」
だんっ、だだんっ！　アリアはUボートに苛立つイギリス艦長みたいな事を言いながら、ベランダを踏み抜きかねない勢いでオリジナル地団駄を踏んでる。



（……もう、追えないな。捕り逃した）
俺が頭を振って、ベレッタをホルスターにしまっていると……
上空に、プロペラ音が聞こえてきた。
ベランダに出て見上げると、水上機だ。藍幇城方向から飛んできている。
タンカーから上がるベントガスを避けるためか、かなりの高空で——パッ、パパパッ。夜空に、パラシュートが開いた。数は、4つ。
ヒステリアモードの視力で見えたが、理子、レキ、猴、それとメガネを掛けたココ——機嬢だ。
（……こうなると逆に、敵の時間の使い方の上手さが際立つな）
援軍には感謝するが、白雪たちが来てくれたのは——アリアが倒れて、俺が撃たれた後。
理子たちが来たのは、カツェとパトラが逃亡した後。
俺たちは、敵より1手ずつ遅いのだ。俺たちより戦い慣れてるぞ、カツェとパトラは。
まだゴレム兵のいる甲板を避け、理子たちは居住棟ビルの上に降りてきた。

頭の傷を白雪に手当てしてもらいつつ、援軍と操舵室で合流すると――
「途中まで潮に逆らってボートで来たんだけどね。藍塘海峡で水上機に乗り換えてきたよ。5分は早く着いたつもりだけど、ちょーっと遅かったかな。キーくん大丈夫？」
船と俺たちの様子を見た理子が、悔しそうに言ってきた。
「俺は大丈夫だ……猴はどうした？　姿が見えないが」
理子・レキ・機嬢を見回して俺が訊ねると、
「猴、甲板に降りたヨ。砂人形たち、この建物に入ろうしてた。それを止めるつもりネ」
そう言う機嬢に促されて、窓から甲板を見れば――
居住棟前で、猴が青龍偃月刀を振り回してゴレム兵たちを次々と薙ぎ倒していた。
今はパトラが遠隔から集中して操作できているのか、砂人形たちはかなりしっかりした動きをしている。組織的な動きで、この居住棟へ押しかけてきているのだ。
「猴……！」



心配した俺をよそに、うわぁああぁっ！　と――
カットオフ・セーラーを翻して戦う猴の勇ましい声が、聞こえてくる。
この居住棟を守り、むしろ押し返していくような勢いだ。
「カンチガイ良くないヨ。猴と曹操が戦うは、お前たちのためだけ違う。香港のためネ。こっちはまず、操舵を試すよろし！」
機嬢が叫び、俺たちは――
まずは居住棟の守りを猴に任せ、手分けして操舵機器の状態を調べて回った。
――猴。
いつも自信なさげにオドオドしていた君だったが、やればできるじゃないか。
まるで、孫みたいな強さだ。
それもそのハズ。さっきまでの俺の強敵、孫は……君と、一心同体なんだからな。孫にできる事は猴にもできる。必要なのは、勇気だけだったんだ。そして――みんなのためになら、勇気を振り絞れる子だったんだね。猴は。
操舵機器はほぼ壊されていたが、それでも何とかできないか機嬢が試みる中

俺たちは甲板に打って出て、猴と共にゴレム兵たちを全滅させた。
今や敵は砂に戻り、着ていたナチス・ドイツの軍服と共に辺りを舞っている。
髑髏の徽章もあちこちに落ちていて、タンカーは今や幽霊船といった風情だな。
息切れする猴に白雪と理子が肩を貸す中、
「――止めること、そう簡単に出来なさそうある。あちこち上手く壊されてたヨ」
操舵室だけでなく甲板の下5階――エンジンルームも調べてきた機嬢が、俺たちに苦々しく告げてきた。
タンカーは、ヴィクトリア湾の真ん中を過ぎた辺りだ。
タイムリミットまでは、あと10分を切っている。
「まあ、そう簡単に止められないとは思っていたけどね。でも、逃げるって道は無いわ。香港中の人を避難させるワケにもいかないし。誰か、案は？」
拳銃を収めたアリアが、額に汗を浮かべながら皆に訊ねる。
すると理子が、広大な甲板を見渡しながら――
「イ・ウーでカツェに習った。原油の流出は、爆薬で起こす。原油タンクの底に爆発物を仕掛けて、数mの亀裂を入れて――タンカーの自重と下からの水圧で、船を割るんだよ。生卵を割るみたいに、真っ二つにね」
「そんな事したら、タンカーが爆発しちゃうんじゃない？」
訊ねたアリアに、理子は首を横に振る。
「そうならないように、専用の指向炸薬筒を使うんだよ。うんと長い対人地雷を下向きに仕掛けるような感じ。そいつで、カーゴタンクの底から下に――船底とバラストタンクを突き破った海水側にだけ、必要最小限の炸裂を起こす。それだと起爆しても海水で即座に消火されるから、大爆発はしないんだよ」
テロリストっていう連中は、そういう所――
工夫、するんだよな。かなり巧みに。
これは……詰んでるな。ヒステリアモードの頭でも、どうしようもない事が分かる。
「だけど、あと10分じゃ――このでかいタンカーのどっかに仕掛けられた炸薬筒を探して、原油タンクの底から拾い上げるなんて……ムリゲーだよ」
そう言って唇を噛む理子に、爆弾戦術のベテラン――機嬢が、向き直る。
機嬢は黒いツインテールの片方を自分で口元に持っていき、何か中国語で話

している。

どうやら、テールの中に通信機を装備しているようだ。

そして、

「――炸薬筒は、タンカーが岸に衝突した反動を感知して起爆するものである。それまでの時間は、藍幇が延ばすヨ」

洋上を見つめ、またインカムに何か喋った。

機嬢の視線の先――タンカー後方の海上には……灯りが、見える。

闇を突いて、1隻の高速艇がタンカーを追ってきているのだ。

いや、1隻だけじゃない。

波の向こうから、光が2つ、3つ……見る間に、10、20と増えていく。

全て、船だ。無数の船が、この暴走タンカーを目指して海を駆けている。

ヴィクトリア湾の東方から、藍幇の船団が追ってきたのだ。カツェが逃げたおかげで、海流が元に戻ったらしい。

高そうなクルーザー、水上警察の警備艇、小型フェリー、積み荷を捨てながらの荷船、漁船……スピードを出せる順に、次々と追いついてきた。

最初にタンカーと併走するところまで来た、高速艇の甲板からは――



「――遠山さん！　私たちもお力添えしますよ！」

諸葛……！

諸葛静幻が、メガホンで叫んできている。

宮廷衣を風に暴れさせつつ、俺たちに一礼した諸葛は船団に向き直る。

そして中国語で、指揮を執り始めた。

タンカーに肉薄してきた船たちは1隻、また1隻と、形も大きさもバラバラな手作りのロープつきフックを投げつけてくる。そして、それぞれ何度か失敗しながらもタンカーと自分の船を次々と繋ぎ――減速して、後ろに下がっていく。

そのロープが、びんっ、ばしっ、と伸びる音が連なる。

……引っぱって、いるんだ。

数トン～数百トン程しか無い船たちが束になって、この15万トンの巨大タンカーを――ヴィクトリア湾の西岸に激突させまいと、後ろに引っぱっているのだ。

1隻ずつの力は弱いが、船はどんどん増える。2分もしない内に、50隻を超えたぞ。

見れば、それぞれ別のモーターボートに分乗した残り3人のココたちも――
扇を広げて、船たちの指揮を執っている。
「――蚂蚁击败大象！」
檄を飛ばした諸葛に――数多の船から、ウオオオォッ！――という鬨の声が上がった。
諸葛の力で……何百人もの人々が、一気に動いている。
失礼ながら1つ1つの船は小さく、操舵の練度もバラバラだ。当然こんな綱引きなんかやった事もないらしく、転覆している船さえある。
だが、それが百人、千人と集まって――大きな力を作り出しているのだ。
その千を動かしているのは、あの諸葛。
彼の言葉で、彼のために動くのだ。千の力が。あれこそ、カリスマのお手本だな。
「――何て叫んでたんだ、諸葛は」
「『蟻は象に勝てる』ヨ」
ははっ。なるほど。蟻も大軍になれば象をも斃すものだからな。それなら俺たちも――



巨象の背に、噛みつかせてもらうぜ。切り込み隊長の、鋭い牙を持つ蟻として。
藍幇の人海戦術により、タンカーは減速したが……桁違いの巨体を止める事はできない。タンカーはなおも、西岸へ向けて進んでいる。
「目測、21ノット。あと19分ネ、キンチ。それで、ヴィクトリア湾北西の端――ICCのふもと辺りにぶつかるヨ」
タイムリミットまでの時間を再計算した機嬢が、タタタッ……と、甲板を中央側へ走る。俺もついていくと、白雪がヒルダと両手を繋ぎ、額に汗を浮かべてウロウロ歩いていた。
その姿を、アリア、理子、レキ、猴が見ていて……
「――探知してるのか。超能力で……炸薬筒の位置を」
訊ねた俺に、こくり。レキが頷く。
白雪とヒルダの手が、くいっ。同じ方向に動き――2人がそっちに何歩か歩く。
なんとなく分かったが、これは……『こっくりさん』みたいな術なんだろう。

「――ここ。この下だよ。だいたい、なんだけど……」

とても集中していたのか、目を開けた白雪はフラついてレキに支えられている。

「第4カーゴ、センタータンクだね」

理子はそう言って、同じくクラクラしてるらしいヒルダに肩を貸す。

機嬢曰く、このタンカーには格子状に第1から第7までの原油タンクがあり、それぞれ右舷、中央、左舷の3つに分かれてる。仕切りはカツェたちに開放されていて、どこかの船底が折れれば全ての原油が漏出するらしかったのだが……

……

炸薬筒は、そのド真ん中に仕掛けられてたって事か。

「ありがとう、白雪、ヒルダ――だが、原油の中に沈んだ物をどうやって探す」

腕時計を見ながら言う俺に、皆が顔を見合わせる。

精製されたガソリンでも透明度は低いが、原油はもっとドス黒い泥水のようなものだ。

その油面からでは底どころか、すぐ下さえ見えないだろう。

「ダイビングスーツか何かで潜るです、潜って探すです」



と、猴が言うものの――

「不是。酸素ボンベのレギュレーターが、原油の分解作用ですぐダメになるネ」

機嬢が首を横に振る。

「じゃあどうやって潜るのよ。さすがに素潜りはキンジでも多分できないわ」

アリア、『多分』を外してくれ。絶対できん。皮膚が溶けちまうよ。

と、俺がジト目をアリアに向けていると……

「――あれを使うネ」

機嬢は、そのアリアがさっきスクリューを破壊したオルクスを指した。

元々、オルクスはイ・ウーに出入りしていた頃の機嬢が開発したもの――なので機嬢はその構造を当然熟知しており、原油で痛むパッキン等がほとんど無い事も把握していた。

オルクスの後尾には、タンカーに据えられていたジブクレーンの吊上フックが接続され……それで、オルクスを上げ下げする事になった。

ハッチを開けたオルクスに乗り込む機嬢は、電子機器が生きている事を確認しつつ――

「オルクスには、小さい作業用アームがあるネ。それで炸薬筒を掴み上げるヨ」
聞くだに難しそうな事を言っているが、迷ってるヒマはなさそうだ。
この準備で、もう10分近く時間を使ってしまっているんだしな。
「一言もの申すけど。炸薬筒の正確な位置は、私たちにも分かっていないのよ。
私たちが探知できたのは『なんとなくこの下の辺り』って事だけだわ。どう探すつもり」
皆が不安視していた事を、ヒルダが機嫌にズバリ聞くと――
「……アームでの手探りある。それしかないヨ。だから急ぐよろし」
への字口で、機嫌が答えている。
「そんな……」
アリアが絶望的な声で呻く。
……不可能だ。そんな事は。
『多分この辺』程度の情報を元に、砂漠で針を探すようなものじゃないか。
ここまでみんなで力を合わせて切り開いてきた、生還への道――
それが、あと一歩の所で繋がっていないのだ。
――だが……皆に頼られるまでもない。

その道を繋げるのは、不可能を可能にする男――
「俺も乗るぞ、機嫌。俺がなんとかする。考えがあるんだ」
――俺の役目だろう。
時間が無い。腕時計を見れば、もうあと8分だ。
俺はオルクスのハッチに手をかけ、有無を言わさず足から機内へ入っていく。
バイクで言えば、機嫌の後ろに2人乗りするような体勢だ。
中には……ドイツ語の本や鉤十字マークの懐中時計など、カツェの私物と思われる物があったが、こっちはカツェのだったんだな。
狭くて俺の上半身がハミ出し気味だったので、機嫌の背を押させてもらおうと思ったら――ひょいっ。
ハッチを閉めようとした機嫌が俺の前で立ち上がってしまい、むにゅ。
「……！」
つ、掴んじゃった。
機嫌の、小ぶりなオシリを。
左右の手で、片尻ずつ……！　や、柔らかっ……！
「ど、ど、どこ掴んでるネこんな時に！　掴むは炸薬筒、ココのシリ違うよ！」

がしィッ！　と後ろ蹴りで俺の下腹部を蹴り上げてくる機嬢は――袴みたいなズボンをはいていたので、大事には至らなかった。よかった。蹴られて痛いものの。

「何やってんのよバカキンジ！　時間が無いってのに！」

「キン、ちゃん……？」

「おおおー！　さすがキーくん！　どんな時でもラッキースケベはこなしますかぁ！」

「……」

アリアが二刀流の峰打ちでごっすん俺の頭を叩き、トドメにドラグノフの銃床らしき物に脳天をポカッとモグラ叩きされ、結果、俺は機内に入れた。

い、今のハプニングで、ヒステリアモードは強化されたが……

頭は叩かないでくれよ。白雪が応急手当してくれたものの、さっき撃たれてるんだから。

タンカージャック、最後の作戦は――炸薬筒の解除。



それに向かうオルクスには、バスカービルの俺と藍幇の機嬢が乗り込んでいる。

香港の人々を守るため、名実ともに敵も味方も無くなった瞬間だな。

……がこんっ……

オルクスのハッチが閉ざされ、一瞬暗くなった機内の内壁には外部カメラの映像が映し出された。感覚的には、前面の一部がガラス張りになったように見える。

外にはもう、ヴィクトリア湾の西端で天を衝くICCビルがハッキリと見えている。

あの下に激突したら、一巻の終わりだ。

機嬢が、起爆までの残り時間をディスプレイに表示させた――あと、6分52秒。

「半天周モニター、機能よろし。原油取出口、開口願うある」

ちょっと（俺に対して）怒った声のままの機嬢が機内マイクに告げ、

『了解。開けるわよッ！』

機嬢が外したインカムを引き継いだ、アリアのアニメ声が返ってきた。

モニターでは、アリア、白雪、レキ、猴、ヒルダが力を合わせてバルブを回し――

大きなマンホールみたいな、第4センタータンクの原油取出口を開けていく。

そして巨大なフタを立てるようにして開くと、皆、すぐそこから離れる。タンク内には、有毒な石油の揮発ガスと不活性ガスが満たされているからだ。

「ここからは、外でも火気厳禁だぞ」

『分かってるわよこのスケベ』

なんでこの期に及んで俺をスケベ呼ばわりするかね、アリアも。

『理子！　吊上ウインチを回して！』

――

そのアリアが叫ぶと、ちょうど先端を真上に来させているクレーンが――

ぐ、ぐぐぐ、と……理子の操縦でオルクスを持ち上げていった。

俺と機嬢はシートについたまま、真下を向く形になる。

そして取出口のフチにぶつけないよう、クレーンは慎重に……ゆっくりと、

オルクスをタンク内に下ろしていく。

塗装があるとはいえ、オルクスは金属だ。万一ぶつけて、火花を散らしたら

――



フラッ――ガツンッ！

「――！」

俺と機嬢、そしてその場の全員が息を呑んだ。

風に煽られて、開いた原油取出口のフタにオルクスがぶつかったのだ。かなり強烈に。

しかし……だ、大丈夫だったようだ。火花は出なかったらしい。

だが……機嬢がモニターの一部を見て、舌打ちしている。

そこに映るメーターの数値が1つ、どんどん下がっている。

「何か不調が起きたか」

「起きたが何ネ。進むしかないヨ」

「ごもっとも」

そんな話をしながら……オルクスの中の俺と機嬢は、真っ暗な原油タンクの中、生身で入れば一呼吸で昏倒する毒ガスの渦に侵入した。

『機嬢、大丈夫？　今ので気密が破れてたりしない？』

アリアの声に、機嬢は……答えない。ので、

「空気の味は上々だよ」

代わりに俺が答えておいた。この、厄水の底へ。
どうあれ、俺たちは行くしかないんだ。その先端から油面に着油した。
……ヌルっ……と、オルクスはその独特の圧力が外殻越しに感じられ
粘性を持った液体に沈み込んでいく、る。
「随分……粘り気があるな。ちゃんと底まで行けるかな」
「シーマ・ハリ号が積んでいたは、インドネシア産のミナス原油ヨ。パラフィ
ン基原油で粘度は高いけど、比重は軽いある。抵抗力は差し引きゼロってとこ
ネ。心配無用ある」
機嬢が説明してくれる中、ロープのコントロールでオルクスは沈んでいく。
ライトを灯すが、やはり視界は30cmもあるかどうかだ。
そして、原油の中は……暑い。
おそらく、採油された土地の熱を貯め込んだままなんだ。25度ぐらいはあり
そうだよ。
ミシッ……と妙な音を立てた外殻に、俺が眉を寄せると――
「――オルクスは速度出すため、耐圧性を犠牲にした乗り物ネ。本来は海水を



蒸発させた気泡で機体を包んで、海のう、設計されてない」
「設計上は……何気圧まで耐えられるんだ」
「2気圧ある」
「今は」
「……2・3気圧ヨ。普通、タンカーは原油の密度を保つの事するけど、この
タンカーはきっと原油を撒き散らすため調圧器を止めてるネ。潜れば潜るほど、
油圧は上がるある」
オルクスは、ごつん……ごつん、と、タンク内の補強梁に何度かぶつかる。
そのたびにいつ圧壊するかと肝が冷えたが、なんとか最後に……ごろ……ん
っ……下を向かされていた俺たちが、乗り込んでいた時と同じ角度に戻る。船
底に着いたのだ。
「……」
だが、何も見えない。少なくとも見える範囲には、炸薬筒は無い。
起爆までの時間は、あと5分と少し。
オルクスの先端付近から出した作業用アームを機嬢が操作し、暗がりの向こ

うを探るが……手応えは、なさそうだ。
「キンチ、どうする……ネ」
それに答えようとした所で、俺は妙な――息苦しさを覚える。
暑さのせいかとも思ったが、そうではなさそうだ。目も眩んできた。
俺が目を擦り、深く呼吸したのを聞いて……機嬢は、
「……オルクスの中、今、酸素の供給が……無い状態ヨ。最初にぶつけた時……そこが、ハァ、壊れた、ハァ、あるヨ」
この息苦しさは……そのせいか。オルクス。高性能な代わりに、脆い乗り物だ。
俺は――朦朧とする意識をそれでも集中させて、右肩を右耳につけ、右手をオルクスの内壁につけた。
そして、左手で……コン、コン、コン……
潜水艦がソナーを鳴らすように、規則正しく壁を叩く。
（集中するんだ、反響音に……）
感じるんだ。ヒステリアモードの全神経を、聴覚に注ぎ込め。
アリア、白雪、ヒルダ、理子、レキ、猴、諸葛、藍幇のみんな――生還への



リレーを、せっかくここまでみんなで繋いできたんだ。
そのアンカーを……俺が、務めるんだ……！
「……キン、チ……」
酸欠で、機嬢が朦朧としている。
ぽたり、ぽたり、と、暑さで俺の額から汗が垂れる。
炸薬筒は――あるハズなんだ。
必ず、この辺にあるんだ。白雪とヒルダを信じろ。
反響音は……判然としない。だが、おそらく……
「右後方……機嬢、5時の方向に……アームを伸ばしてくれ。の、伸ばせるだけ……！」
息を継ぎながら、俺は機嬢の耳元に伝える。
機嬢は……とぎれとぎれの意識で、もうモニターを見る事もできず……
アームを動かし、原油を掴むような操作をしている。最後の力を振り絞るようにして。
だがアームの先端は、何もない所を空振るばかりだ。起爆まで、あと3分……！

ダメだ。もう戻らないと、引き上げている間に爆発しかねない。

（……こ、ここまでか……！）

と、俺が目を強く閉じた瞬間。

ぐいっ、と――ほぼ限界まで伸ばしていたアームが目一杯に引き寄せられるような動きがあり、続けて、カツ……ン……接触、した。

原油タンクの底にある、何かに。見えない力で。

（……今のは、磁力……？）

磁力だ。炸薬筒は、きっと船底に磁石で付けられていたんだ。

その磁力に、作業用アームは引き寄せられた。

「つ、掴めッ、機嬢」

絞り出すように言うが、機嬢は――もう、失神している。

俺は見様見真似で、機嬢の手の上からアームの操縦桿を掴み――

「……ッ……！」

炸薬筒を掴めた、のだろうか。確証はない。だがもう確認はできない。

「上げ、ろォ……！」

マイクに伝える発声で吐いた、その吐気を最後に――俺の意識が、途切れた。



――

誰かに、抱きかかえられているような……感覚……

何だか、とてもいい香りがする。俺には似合わない言葉だが、愛しい、香り。

クチナシの、花のような――

「……ア……アリア……？」

「気がついたわね。はい深呼吸して」

目を開くと、俺はいつの間にか仰向けになってアリアに膝枕されていた。

口にはレキが、スプレー式の酸素吸入器をあててくれている。

オルクスの中では感じられなかった、風――

いま俺は夜空の下、タンカーの甲板上にいる。

そして、俺たちのそばに立っている大男は……

「タンカーっていいなぁ、キンジよォ。俺は船ん中じゃ一番好きだよ」

……む、武藤……？

修学旅行Ⅱで俺たちと同じ香港に来ていた、車輌科の武藤剛気が――

武偵高のブレザーを肩に引っ掛け、嬉しそうにタンカーの甲板を見渡している。

「……ッ」

慌てて上半身を起こすと、甲板上には機嬢の姿もあった。

機嬢はバッタリ倒れて目を回しつつ、猴に酸素吸入器をあててもらってる。

だが、俺が起き上がったのに気づいたか、袂から『曹』と書かれた扇を出して弱々しく広げて見せた。

すでにフタが閉ざされた、原油取出口の上では――

2本つながって垂らされたソーセージみたいに、オルクスと炸薬筒がクレーンからブラ下がっていた。予想以上に怪力だったらしいオルクスの作業アームが、先端をひん曲げる勢いで掴んでいた炸薬筒は――洗浄されたらしく、原油ではなく水で濡れている。

竹で組まれた簡易な足場に座り、細長い炸薬筒からたった今取り外した起爆装置らしきものを片手にピースしてくるのは――装備科の、平賀さん……！

「き、来てくれたのか……武藤」

「お前が呼んだんだろ。メシ食ってたら峰から電話がかかってきて、5分もしねーうちに香港のヤクザみてーなのに車に乗せられてよ。あれよあれよでこのタンカーだ。焼売返せ。ああ、エンジンストップは安齋と鹿取がやってくれたよ。つっても一歩遅かったな。惰性航行中だ。チョット、ぶつかるぜ」

連絡用に使っていたらしい携帯を手に、武藤は苦笑いしてくる。

もう岸は目の前だ。118階建てのICCビルは、窓の1つ1つが見えるほどに近い。

シーマ・ハリ号は、確かに……減速していたものの、まだ1～2ノットで前進している。

岸への衝突は免れないだろう。

「そんな顔すんなよ。最近のタンカーは軍艦並に頑丈だからな。先端がヘコむぐらいだ。沈んだりしねーって」

と言う武藤のセリフに続き、メキメキ……バキバキッ……！

という音が、船首側から聞こえてきた。

船首側で弾けて空を舞う木々は、藍幇の構成員たちが緩衝材にしようと衝突予想地点の海に投げ込んだ材木の破片だろう。海洋ブイのようなものも飛び上がってる。

「――接岸。軽く揺れるぞ」

言った武藤が、その場に片膝をつき――

……ゴゥ……ンンン……！

鈍重な音と振動が、船体に轟く。しかし……微震だ。アリアたちも緊張した面持ちではいたが、転ぶほどの揺れはなかった。

衝突しても、船体を破壊するほどの衝撃にはならなかったんだ。タンカーは――

――最後は、香港がその身で受け止めたんだな。

接岸したタンカーには、ハシゴが渡され……

ワラワラと、香港警務処（HKPF）の署員が乗り移ってきた。

誤解されて逮捕されるかなとも思ったが、ハシゴへ向かうバスカービルはむしろ敬礼で送られた。香港警察にも、諸葛から連絡が行ってたんだな。警察内にも藍幇のメンバーはいるみたいだし。

何十人もの警官たちに敬礼されつつ、バスカービルの5人で降り立った九龍では――



勝ち鬨を上げながら、香港の人々が俺たちに喝采を送ってきてくれた。

タンカーは、もう完全に停止している。

後は……武藤たち、警察、それと港湾関係者たちに任せよう。

武藤は喜んでたけど……俺は二度と乗りたくないね。タンカー。

ああ、安心したら腹が減った。考えたら昼から何も食べてなかったし。

「――遠山さん。カッコ良かったですよ」

声に振り向くと、そこには同じく上陸していた諸葛の姿があった。ココたちもだ。

「ありがとうな、諸葛。お前があの船団を指揮して、引っぱってくれたお陰だよ」

「いやぁ、私は何も。それにしても、本当に只者じゃないですね。遠山さんは」

目をキラキラさせて誉めてくる諸葛のセリフに、俺の横で白雪がうんうん深く頷き、

「……北角の高速道路でも言っただろ。ただの高校生だよ、俺は」

俺のセリフに、理子が吹き出す。街灯りが作った理子の影……ヒルダの形をした影も、手を口元に寄せて笑ってるよ。

――さっ、ささささっ。

バスカービルの前に、どれがどれかよく分からなくなったココたちが横一列に並び――

揃って、その場に片膝をついた。

そして、立てた片手のひらに反対の拳を当てる中国式の敬礼をし、

「謝謝――謝謝。ありがとう、キンチ。ありがとう、アリア」

機嬢と思われる涙ぐんだココが、俺とアリアに頭を下げる。

猛妹は白雪に、炮娘は理子に、狙姐はレキに――それぞれ、深く頭を下げている。

それぞれがそれぞれのココと語る中、アリアが……

「キンジ」

皆の注意が俺から逸れた隙をついたつもりか、背伸びして耳打ちしてきた。

「……ありがとうね。タンカーで、背中を守ってくれて」

背中合わせ。あの体勢で戦う事から始まったタンカージャックも、これで解決だ。

よし。ここは一つ、金持ちのアリアに豪華なメシでも奢らせよう。



ヒステリアモードは……どうだろう。残ってるかな。

感覚的には……ちょっと残ってる。搾れば出せるかもしれない。口説き文句も。

「お礼には及ばないよ。俺という存在は――アリアを守るために、あるんだ。これからも君を守らせてほしい。ずっと……」

「……きゃぁー……」

俺を横から見上げるアリアは、そんなアニメ声をノドから漏らす。

よし。押せたぞ。アリア赤面スイッチ。ここからは少し、強引に――

「――というわけでここから、俺とデートだ」

「は、はぁ!?」

「約束したろ？　ＩＣＣで一緒に食事しようって。３日ほど遅刻しちゃったけどね」

と、ウインクされた俺に――赤紫色の瞳をまん丸にして、アリアは……こくこくこく。

いつもの、俺の言いなりモードになってる。

これで食事の予約も取れた。

（これにて、一件落着――か）

ふぅ、と息をつきながら胸に呟く、けど……はは っ。

ちょっと、海外には似合わなかったかな？　このセリフ。

（なんでまたお相撲さんと一緒なんだよ……！）

たまたま帰国便が一緒だったらしい力士と並んだ座席で、俺は体を寄せ木細工みたいに曲げてのフライト中だ。オルクスより狭いぞ、このエコノミー席。

あの後、ＩＣＣの最上階にあるバーレストラン・ＯＺＯＮＥでは――

アリアと２人で優雅にディナーをしようと思ったんだが、そうはいかなかった。

まず当然ついてきたバスカービル一味。それから藍幇の幹部……どころか、構成員たちまでウジャウジャやってきた。あとキャリアＧＡの４人。なんでお前らもいる。

暴走タンカーのウワサは香港のあちこちに行き渡っていたらしく、気前のいいリッツ・カールトンのおごりで飲み食いさせてもらえたんだが――タダと聞いたら、みんな食うわ食うわ。気がついたら、どんちゃん騒ぎのパーティーになってた。クリスマスパーティーなんて、生まれて初めてだったよ。

白雪は真横の席からしなだれかかってきつつエンドレスで俺を誉めちぎるし、アリアはそれを見て怒るし、理子とココはＡＫＢのダンスを舞い踊っての大騒ぎ。伴奏はピアノの心得があるらしい諸葛。静かだったのは、テラスに体育座りして星空を眺めてたレキだけだったよ。

紹興酒をしこたま呑んでオリジナル裸踊り『轢いてやる音頭』をやり日本の恥をさらす武藤は、平賀さんと鹿取一美にバカウケしてた。その横で安齋は平らげた料理の皿を回転寿司みたいなノリで積み重ねて、ウェイターさんをビックリさせてたよ。

だが、まあ……香港らしい、賑やかな最後の夜だった。そこは良しとしよう。

その後、俺は狭く蒸し暑いビジネスホテルに帰り……爆睡から目覚めて、空港へ向かうバスの中で気づいた。最後の最後まで、本場のラーメンを食べれなかった事に。

でも、まあいいか。父さんが俺に１００万ドルの夜景を託したように――いずれ俺に子供ができたら、託そう。香港のラーメンは。

「きゃっはは！　ほらアリアもお食べ！　月餅食べ放題だよー！」

今、前方のファーストクラスでうるさいのは……理子だ。
理子はあの後、徹夜でマカオまで足を伸ばし……朝までカジノで荒稼ぎしてたそうだ。ギリギリまで遊んでたらしく飛行機に遅刻しそうだったから、こっちがハラハラしたぜ。
で、空港のゲートでそのカジノのパンフレットを見せられたんだが、イメージキャラは和服の女の子。誰かに似てると思ったら、こないだ俺が出入りした暴力団・今は解散した鏡高組の元組長・鏡高菊代ちゃんだったよ。そういや菊代はマカオのカジノに出資したと言ってた。世界は広いようで狭いね。
藍幇の力で、あのタンカージャックについての報道は一部隠蔽されていて……タンカー暴走事故という事になっていた。新聞が中国語なんでよく読めなかったが、漢字を拾うと『日本人武偵大活躍』的な事が書いてあったよ。なんか武藤の手柄っぽく書かれてたのは納得いかんけどな。
（眷属の一大勢力、藍幇を攻略して……倒す所まではいかなかったが、カツェとパトラも撃退して……）
俺の初の海外遠征は成功のうちに幕を下ろした。と、言ってもいいんじゃないかな。



だが――既に問題は起きていたんだ。
俺たちの、内部に。この時。

# 2弾　咨と銀氷

12月26日の朝、厳寒の日本に帰国すると――

年末年始に神事がある白雪は羽田から青森の星伽神社へ、連城弁護上との打ち合わせがあるアリアは新橋から虎ノ門へ、コミケとやらの参加準備がある理子は台場で、それぞれ三々五々解散していった。

（みんな、体力あるなー……）

そして後輩に預けていたハイマキを回収したレキと俺だけが、武偵高での日常に戻る。

というか俺はその後、疲れ果ててグッタリ寝てたよ。

翌日、午前中――もう通常授業は無いものの、俺はレキと連れだって教務科へ向かう。

学期末には、教務科の掲示板にあれこれ重要な情報が張り出されているからな。

特に、生徒呼出・単位不足者一覧のリストは要注目ポイントだ。1学期には単位不足で呼び出しを受けた俺なので、念のため確認すると……よかった。俺の名前は無い。東池袋高校で多めにもらえた単位の効果が出たな。

（あれ……？）

ふと気づくが、呼出生徒リストに『2年B組　Jeanne d'Arc　専門科目（情報科）』……ジャンヌの名前があるぞ。呼び出しくらってやんの。何やらかしたんだアイツ？

だがまあ、人の事はどうでもいいや。

と、俺は修学旅行Ⅱの前に受けた期末試験結果（一般教科）の成績ランキングを見やる。

（2年……遠山……遠山……）

名前を探すと、あった。126位……平均点のチョイ上か。

ハイジャック事件を解決し、原潜とタイマンを張り、米軍の人間兵器をボコり、日本や香港のヤクザを調伏した俺だが――お勉強の成績は、平均点がやっとなのである。

とはいえ、これは快挙だ。今までは平均点以下が定位置だったからな。武偵高生的にはハイレベルだった東池袋高校での授業が、ある種の予習になってたんだろう。特に数学は確実に上がってるぞ。

しかし気は抜けない。学力的に底辺高の武偵高で平均ということは、一般社会では下の中なんだからな。特に保体。赤点スレスレだよ。問題文を読むのもイヤなんで恒例の鉛筆転がしで答えを決めてたんだが、今回は鉛筆が今ひとつ頑張れなかったらしい。

後は……勉強を教えてもらう人選のため、上位者だけは確認しておこう。

バカの巣窟こと武偵高でも、通信学部や衛生学部には頭がいいのがポロポロいる。が、その辺には友達が少ないので強襲科のトップを探す——と、いたぞ。全体11位、不知火亮。さらに上位、ベスト10にも知り合いがいる。ワトソン君ちゃんが9位。ベスト3の常連・星伽白雪さんが今回は2位だ。

で、煌めく今学期の1位は——？

と、興味本位で名前を見ると。

『1位　望月萌（救護科）』……！

（今のは見なかった、事に、するッ……！）

俺は現実逃避のため、レキを連れてゲーセンにでもしけ込もうかと教務科の門を出た。



すると、教務科の向かいのちょっと広場になっている所で——

模擬手榴弾と、使用済ＲＰＧ—7の発射筒で三角ベースをやってる女子どもがいた。

（アホどもめ……）

武偵高の短いスカートで、アクティブな事やるんじゃねーよ。病人が迷惑するだろ。

しかも教務科前でやるとは命知らずな。ホームランで窓を割ったら、球の代わりに弾が返ってくるんだぞ。最低でもマグナム弾、悪けりゃそれこそ対戦車ロケット弾が。

と、俺が生まれつき悪い目つきをより悪くしていると……

かきんっ！　と、アホ女子が打ったファールボールがこっちに飛んできた。

（——ッ）

それが……校門のそばに立っていた、別の女子にぶつかりそうになる。

武偵高生なら——たいていは1年次の殺人的な特訓で飛来物を躱すクセがつくものだが、この女子は避けない。受け止める様子も無く、手を口に寄せて息で温めている。気づいてないんだ。

模擬手榴弾の中身は砂だし、球威も大したことはないが……どうあれ、金属だ。ピンもついてる。ヘタに当たったり刺さったりしたら、大ケガするぞ。

俺は――少し走って、パシッ。その鉄球を掴み取る。

「あー、ごっめーん！」

と、ソフトボール部らしきアホ女子どもは遠くから謝ってきたが……

俺が怒るべきは、あいつらじゃない。そもそも武偵になんかアホしかならないんだから、あいつらがアホなのは自明の理だしな。アホなのは許す。

だが、不注意なのはダメだ。

それじゃ命を落とすのが、武偵だから。

と、俺はこっちのボケーっとしてた女子に、

「おい、お前。武偵にしちゃ注意力がなさすぎるぞ」

そうお小言すると……くる。

何に注意されたのか理解できてない素振りで、ボブカットのふんわりヘアを少し広げて振り返った――その女子は――

「……遠山君！」

穏やかで大きな、ふたえの目をまん丸に見開き……ぱあぁあぁ。顔を明るく



した。

その女子は、それはそれはきっちりと武偵高のセーラー服を着た――

「……も……望月、萌……！」

俺はこの突きつけられた現実にテンパって、ついその子をフルネームで呼んでしまう。

「嬉しい！　覚えててくれたんだね！」

レキの事はなぜか無視気味の、萌は……

ここで、俺を待ち伏せしてたのか。やられた。不注意なのは俺の方だったな。

さらにその場には――キキッ……

教務科にもう1つある通用門の側から、車道をトヨタ・センチュリーが走ってきた。

水たまりから萌に少し水を跳ねつつ停車したセンチュリーからは、

「――ゴメンよ、お嬢ちゃん」

と、どこかで見覚えのあるスキンヘッドの大男が降りてきた。紫の丸首シャツに18金のぶっといネックレスをして、黒いジャケットを羽織り、首元にはタトゥー……というか、刺青が見えている。ヤクザだ。

（コイツは……！）

今は潰れた鏡高組の、幹部だった男だぞ。本家での舎弟クーデター時にはいなかった、元プロレスラーの。戦力になりそうなのに不在だった事から、純粋に元組長・鏡高菊代の忠臣だったんだろうとは思っていたが――

センチュリーの後部座席からは、

「お疲れ様、遠山」

その……鏡高菊代が……

出てきちゃったよ。これまた武偵高のセーラー服をしっかりとお召しになって。

げえっ、菊代……っ!?　という顔で俺が後ずさると、

「アンタ、アタシと萌とで反応に差があるんじゃない？」

菊代はブルガリのマフラーを首に巻き直しつつ、ちょっと斜に構えて語りかけてくる。

一方、俺を真っ正面から直視して、両手で俺の右手に固い握手をしてくるのは――

「香港でのお勤め、ご苦労様でした。遠山の兄さん……お嬢を、どうか……どうか」



うか」

『やっと頼れる人物に巡り会えた』的な涙目で、深々とツルツル頭を下げてくるヤクザだ。

どうか、と言われましても。

どでかい両手を振り払い、仕方なしに菊代に振り向いた俺は――

「……専門科は」

これまた仕方なしに、そう訊く。探偵科でない事を祈りながら。

俺に話しかけられた菊代は、視線を逸らしたままどこか嬉しそうな表情になる。

「――諜報科と尋問科の掛け持ちやってるから。ちょっと、頑張ろうと思ってね。仕事があったら呼んで」

菊代……綴の生徒になったのか。うわぁ。ピッタリすぎて末恐ろしいよ。

武偵高にはありえないほど良い子な萌と、元・ヤクザの組長の悪い子な菊代。

変人だらけの武偵高に、新たな変わり者が増えてしまった。多分、俺のせいで。

俺が菊代の方を向いていると、萌が柔らかそうなほっぺたを膨らませて――

「遠山君！　私は救護科（アンビュラス）ってとこに入ったの！　部活はブラスバンド部！」

元気よく、武偵に生まれ変わった自分をアピールしてくる。

「も、元から武偵高附属中にいた菊代はともかく……完全に一般人の萌が何で来たんだッ、よりによってこんなヤクザな学校に……！」

萌の身を案じる俺が、苦い顔をすると――

「そうだよねぇ。アタシも、萌みたいな女はここじゃ生きてけないって言ったんだけど」

萌には意地悪そうな視線をちゃんと向けた菊代が、俺と武偵仲間ぶる。

「だ、だって！　菊代ちゃんだけ行かせるとまた遠山君にエッチな事するかもしれないし、私だって遠山君と一緒にいたかったし、パパとママも『萌がやりたい事を頑張りなさい』って応援してくれたし、咲（さき）も喜んでたし……！」

萌は上目遣（うわめづか）いで自分の正当性をひとしきり列挙してから、

「菊代（きくよ）ちゃんこそ、こんな所まで追ってくるなんてストーカーだよ！　遠山君の事が好きだからって！」

「バッ、バカッ、そんなんじゃないよ！　あたしはカタギのアンタに負けるのが嫌だから来ただけなんだっ」



何やら、言い争ってる。

ていうか、萌（もえ）……ヤクザの元親分を、ちゃん付けって……

そして今の、自分の問題を素早く棚上げして話を逸（そ）らし、別の話に菊代を引っ張りこむ口の上手（うま）さ。その辺は武偵（ぶてい）向きかもって気がしてきた。

「ふーんだ。私、遠山君の第2ボタン持ってるんだからね」

俺（おれ）に喋（しゃべ）る時よりワントーン低い声で、萌が菊代に挑発的な態度を取ると……

「あっそう」

ぶちっ。何の前置きもなく、菊代が俺の制服から第2防弾ボタンをもぎ取った。

「おや、アタシも持ってるよ」

「ズルイ！　菊代ちゃんズルイ！」

「諜報学部（レザド）じゃ誉（ほ）め言葉だよそれ。萌、今からでも遅くないから巣に帰りな。遠山もああ言ってるんだし。言っとくけど、アタシは狙（ねら）った獲物は必ず手に入れるタチだからね」

「へー。実は私もなんですー」

「……やっぱり、気が合うねぇ。そういうとこ」
「そうみたいですねー」
2人は膨れっ面で睨み合いながらも、妙な連帯感のあるショートコントを披露している。
なんなのこれ。もうホントに、なんなの、これ……！

帰国後すぐの女難で軽く鬱状態になった俺に、さらなる追撃のメールが来た。
ワトソンからの、リハビリのお誘いだ。
メールには、爆弾とフォークの絵文字が入っていた。『爆弾フォーク』とは、断ったら手榴弾を食べさせるぞという意味の脅し。行かねばならん。
ていうかあのバカ、今度は正式に強襲科別館のΣ部屋を借りたとの事だ。
Σ部屋とは、キュートでポップな女の子の部屋っぽい実物大模型ルーム。美術準備室でかなめや不知火に見られたからって、わざわざ女子っぽい部屋を借りる神経が分からん。ワトソンは、いまだに周囲には男子って事で通ってる。
つまりこれは男2人で女子部屋で模擬訓練やってるって事になるんだぞ分かってんのか。しかも、お前はセーラー服に女装してるってオマケつきだ。ハタか

ら見たらド変態の2人じゃねーか。
で、俺は、きゃりーぱみゅぱみゅでも住んでそうな可愛いお部屋で……
これまた可愛いショートカットの女の子に化けた（元々女子だが）ワトソンと、お茶を飲んだり浅草のデートコースを探るガイドブックを見たりのキッツイ時間を過ごす。
「トオヤマ。ごめんね、ボクの部屋……散らかってて」
相変わらずボクっ子のワトソンだが、最近はずいぶん女子っぽい仕草が板についてきた。
目つきとかにも俺に甘えるような感じが出てきて、ドキッとさせられる事もしばしばだ。
「散らかってないだろ。借りてる部屋だし」
「リハビリが分かってないなトオヤマ。今のは女子が言いそうな謙遜なんだよ」
ちょっと突っ込むだけでワトソンはキュッと拳を作るから、俺は怖くて言葉少なだよ。
ワトソン、ボクシングのアマチュアライセンス持ってるらしいし。
「まあ……リハビリはこのぐらいにしてくれよ。もう十分やったろ。疲れた」



「いいよ。最近はキミの方が早くヘバるようになってきたね」
ニッコリ、と、またカワイイ顔をするし……
なんでこいつこんなに可愛いの。男子として育てられたくせに。
気恥ずかしい俺は、2人で並んで座っていたソファーから勉強机のイスに逃げつつ――
「あー……ワトソン、ちょっと聞いてもいいか？　イギリス関連の話なんだが」
帰国前から気になっていた事を、さりげなく聞いてみる事にする。
「イギリスの話？　いいよ、キミも国際感覚を身につけようとしてるのかな？」
「そんな大それた話じゃない。ヨタ話だよ。えーっとだな……イ・ウーでシャーロックが持っていた刀剣で、スクラマ・サクスってのがあっただろ。なんかあれ、シャーロックが『大英帝国の至宝』とか言ってたんだが……お前、あれの銘とか知ってるか？」
「知ってるよ。キミがシャーロックから奪った剣だろう？　銘は『イクスカリヴァーン』。日本では『エクスカリバー』と訛って呼ばれる、イギリスの国宝、宝剣の1つだよ」
「……」

「目下、シャーロックの行方と共にMI6――イギリス情報局秘密情報部が捜索してる」

「……」

「ただ、ボクは……秘密情報部はキライなんだ。特に00シリーズは諜報活動が乱暴で、イギリス人以外だと気に入らない相手は気軽に殺してしまうからね」

「……」

「だから、イ・ウー崩壊後のイクスカリヴァーンの行方についてはボクにも問い合わせがきたけど、無視してやったよ。彼らへの厭がらせにね。だから君は見つからないよう隠しながら使うといい。ただし、壊したり折ったりはしないようにね。もしそれがバレたら、ジェームス・ボンドがキミを殺しにくる」

……やっべー……

クリスマスツリーにしちゃったよ。あれ。

今、スクラマさん改めエクスカリバーは藍幇城の屋根にちょこーんと立ってるんですよ。

もしくは風に吹かれて落っこちて、海の中だ。

バレたらヤバイぞ。00シリーズは世界最強クラスのエージェントなんだ。



日本の公安0課・武装検事でも手に負えないってウワサの。ヒステリアモードでも勝てっこない。

しかしもう、やっちまった事は取り消せん。

この件については一生シラを切ろう。生涯、知らぬ存ぜぬで進め、キンジ。

「どうした、顔が青いよトオヤマ」

「青は進めだ」

「？」

「そ……そろそろ帰る。もう夕方だし。女の子の部屋に遅くまでいちゃいけないだろ」

語るに落ちる前に逃げようとアドリブを炸裂させて、席を立とうとすると――

「トオヤマ、帰る前に1つ言いたい事がある」

「スクラマ・サクスの事なら知らんぞ」

「その話じゃないよ、カツェの話だ」

ベッドの上から、ワトソンがその人名で俺を足止めしてきた。

カツェ＝グラッセ。

香港で俺たちに仕掛けてきた、眷属の魔女――ナチス＝ドイツ残党の女。

「アリアから聞いたけど……カツェは藍幇が負けてからの攻撃が早かった。早すぎたかもしれないよ。あのタイミングでのあの規模の攻撃は、その準備が早い段階で行われていたことを証明している」

「……何が言いたいんだ」

「言いたくはないんだけど。何者かから、情報が漏れていたのかもしれない」

アリアも――そんな事を言ってたな。シーマ・ハリ号で。

その疑惑について、ホームズとワトソンの意見が一致したって事か。

「カツェたち魔女連隊は、その前身がバチカンや玉藻と同じで戦役のリピーターだ。ただ戦って勝つという方法だけにこだわらない。搦め手で来るかもしれない」

「……俺は仲間を疑うのは好きじゃないぜ」

「好き嫌いの問題じゃないんだ。君は連戦連勝してきた。しかし勝利は慢心を生む。敵がそこにつけ込む最もシンプルで有効な方法が『スパイ』なんだよ」

西洋忍者の異名を取り、自身もリバティー・メイソンから諜報員として勲章を授かった経験のあるワトソンが――目つきを鋭くする。



「極東戦役は武力抗争。抗争とは、そのパワーバランスが崩れてからが危険な時間帯だよ。暗殺、裏切り、スパイ、こういった事に気をつけなければならない」

「そんなセコい手で来るようなヤツは、しまいにゃ負ける。それが世の常だ」

仲間を疑いたくなくて問答無用の空気を流した俺に、ワトソンはムッとした顔になる。

そして、きしっ……とソファーを鳴らして立ち上がった。

「よし。君にも分かるように、ゲームに喩えて教えてあげよう」

そして、俺がついていた女の子用の勉強机に歩み寄ってくる。

シナモンみたいないい香りのする頭を、俺の顔のすぐそばに寄せてきたワトソンは……机から紙と文房具を取り出し、何やら札みたいなものを作り始めた。

「これは兵力を示したカードだ」

ハサミとフェルトペンで作られたのは、アリアや白雪、理子……カツェやパトラなどの人の顔と、強さを表すらしい数字が書かれた札だ。かなり簡略化されてるが、誰が誰だかちゃんと分かるぞ。ワトソンお前、絵心あるな。

師団側・眷属側、それと本拠地ごとに向きや場所を分けて並べられたデッキ

は……

「かなり有利だな、師団が」

「でも、このカードのどれかの向きが反対になったらどうなるかな？　たとえば、分かりやすいのは理子だ」

と、理子のカードの向きを眷属側に寝返らせた。ひでえな。

しかし……さらなるワトソンのカード操作で、その危険性が伝わってくる。理子が寝返ると、かなり強いヒルダも寝返る。俺たちはアジアの中枢に、いきなり強敵2人を抱え込む事になった。それと再進撃してきたパトラ・カツェに挟み撃ちにされたら……マズい。

「キミやアリアは、魔術には弱いだろう」

味方の数値が、低く書き換えられた。さらに――

「ジャンヌも、理子とイ・ウーにいた頃に技を知られている。アンラッキーだ」

もっと下がる。たった1人の裏切りで、東京が総崩れ気味になってきたぞ。

「裏切り者は最初、無条件で敵を1人は討てる。奇襲になるからね」

理子に突かれて、白雪のカードが裏返る。死亡あるいは戦闘不能という意味だろう。

「これで東京はほぼ全滅だ。となると東京にはココや猴が移動してくる必要が出てくる」

香港の戦力が……分散せざるを得なくなる。

「ここにハビや、敵か味方か分からないＬＯＯが攻めてきたらどうなる。戦力が『？』と書かれているものは、誰よりも強い可能性もあるんだ。魔女連隊だって――1人じゃない。彼女たちは皆『戦魔女』。戦う事を専門とする魔女たちだ。極東戦役に参戦できる頭数は不明だが、カツェ以外の戦魔女と接敵する事もあるだろう。敵のカードを増やそうか？」

「……」

「キミの慢心を諫めるために敢えて最悪のケースを話したが、これは来月、もしかしたら来週、現実になるかもしれない出来事なんだよ」

仲間割れや裏切りは……大なり小なり、過去、何度もあった。

理子とは2度。白雪はアリア、理子、かなめにも、イ・ウーでガチの仲間割れを経験済みだ。かく言うワトソンだって元々は敵だった。ヒルダや藍幇は言うに及ばず。それが全員、絶対結束しきっていると考えるのは……浅はか、かもしれないな。

俺が黙っていると、ワトソンはその女の子丸出しの香りを吐息からさせつつ

「様子のおかしい者がいたら、疑ってかかれ」

小声で、耳打ちしてくる。

俺は――それでも頷きたくはないが、心の中では頷かされた気分だ。

しかし、様子のおかしい者……って。そもそも全員いつも様子がおかしい変人ばかりだからなぁ。アリアに至ってはももまんを「あんなもん形が違うだけのあんまんだろ」ってディスっただけで発砲してくるし。アイツが一番敵っぽいぞ。俺の日常的には。

――裏切り者――

胸クソの悪い話で2学期の終わりを迎えたものの……

年越しに向けて巣鴨の実家へ向かうとなると、少し気が晴れてくる。

バスカービルは皆それぞれ忙しそうにしていたので、俺は唯一ヒマそうにしていたレキこと矢田ミントちゃんを連れてJR巣鴨駅に着いた。

レキを連れて帰るのは――年末年始もあのひんやりしたコンクリート剥き出



しの部屋で過ごすのかと想像したらかわいそうになったのと、祖父ちゃん祖母ちゃんに気に入られていたからだ。「来い」って言ったら「はい」でついてきたから楽だったよ。

正月飾りを始めた住宅街を2人で歩いていくと、路地でサッカーボールを追い回してる子供たちの向こう……

「……ッ……？」

コインパーキングに、なんかとんでもない車が停まってるぞ。

近未来から来たような流線型の、どこぞのスーパーカーだ。

その駐車場の料金メーター に100円玉を入れてる、特攻服の背中は……

（ジ、ジーサード……！）

年末に実家へ帰ってきたらしい我が弟との遭遇、およびそのデーモン小暮閣下みたいな髪型に絶句していると、

「お、にーいー、ちゃーん！」

はしっ、むにゅんっ！

声と共に、後ろから抱きつかれた。

背中に押しつけられた、このハリと弾力のある胸の感触は――

「かっ、かなめ……!?」
「こーんなに簡単に後ろを取らせるなんて、甘いなぁ」
太陽みたいな笑顔で俺を見上げてくる、かなめだ。遠山家の帰省ラッシュだなこりゃ。
「おう兄貴。こないだは手間ァかけたな」
それで俺に気付き、のしのしとコインパーキングからやってきたジーサードは……ポン、と俺の肩に手を置いてくる。そして嬉しそうに笑いつつ、
「孫をブチ殺したみてぇだな。ありがとよ」
いきなり物騒なお礼。巣鴨にいる時ぐらい、そういう話やめてくれよ……
「殺しちゃいないんだが……まあ、アイツはもう無害だ。レーザーも破って、お前の仇は取ってやったよ」
ちょっとゲンナリしつつ言った俺に、ジーサードは、にやぁー。心底嬉しそうに笑ってるよ。コイツ、兄貴に何かしてもらうのがそんなに嬉しいのかな。まあ、その『何か』が『孫悟空をリアルにぶちのめす』なあたりがとっても遠山家なんだけど。
「ていうか金三、お前、あの車なんだよ」



「ケーニッグゼグ・アゲーラ。来年3月のジュネーブ・モーターショウで発表になる車だ。試作車を買ってきた」
「こんな車……億単位だろ。電信柱にでもぶつけたらどうすんだよ」
「そしたらもう1台買えばいいだろ」
うわぁ。高級車をチャリンコ感覚。
神は何故、この兄弟にここまで貧富の差を与え給うたか。
遠山家では年末準備を少し早めにやって、大晦日は何もしないで過ごすのが習わしだ。年末年始は事件が起きやすいので用心していた初代・遠山金四郎がそうしてたとかで。
で、すでに俺より実家に馴染んでるジーサードとかなめは、爺ちゃん主導の年末仕事をまぁテキパキこなすことこなすこと。
かなめはチャリで何往復か買い出しに行って、質の高い食材を次々きっちり揃えるし。魚の善し悪しまで判別できるとか、テラナはどこまで高性能なんだよ。
トイレ掃除とかフロ掃除とか、意外と水回り関係の仕事が得意なのは金三で

ある。コイツはトマトさえ食わせておけば無限に働けるタフな男なので便利だ。
また、居候のレキは畳のホウキがけがデジタル的で上手い。ハイマキまで庭の草むしりやってるぞ。口で。この犬もたいがい便利キャラだな。
……で、俺は金魚のエサやりとかフトン叩きなど、楽な仕事を敢えて時間をかけてやるという省エネ手法で大掃除を手伝う。今年は楽だ！
などとやってたらバチが当たったらしく、夜――
年末年始に食うモチをつくということで、婆ちゃんが蒸した餅米をセットした臼を……ジーサードが杵の一撃で叩き割った。
このバカ力野郎。ガタは来てたが、これは百年前から使ってる由緒正しい臼なんだぞ。それを割りやがって。
その際、臼でモチをこねる臼係は俺だった。で、カビの生えた巻物に書かれていた昔の遠山家法度（ファミリールール）に従い、本件は臼係の責任ということにされた。
ベレッタ社からの奨学金の件は玉藻（たまも）→かなめ経由で家族にバレており、臼は理不尽にも俺が買い直すことになった。ていうか臼なんかどこで売ってるのか分からん。と思ったら楽天で売ってた。ちゃんとしたのは、それなりに高かったぞ。しかしまさかベレッタ社も俺が奨学金で臼を買ってるとは夢にも思わね



ーだろうな。チクショウ。

そんな大掃除の後、
「極楽、極楽……」
じじむさいセリフを吐きつつ、遠山家自慢の檜風呂で疲れを癒していたら――

……がらら……
脱衣所の、スライド扉の開く音。字あまり。
曇りガラスの向こうに現れた誰かが、武偵高のセーラー服を脱いでるぞ。
来たかッ……女子闖入イベント。
だがそこは、女難の相ランプが常時点灯している俺。慣れてるから慌てないのだ。
武偵憲章5条、先手必勝を旨とすべし。というわけで即脱出するッ！
と、背後にあるフロ場の窓に手を掛けるが……あ、あれ？　開かないぞ。
窓に外からX字形の布みたいなものがへばりついて、窓を塞いでる。
（こ、これはっ……かなめの科学剣の1つ、磁気推進繊盾（P・ファイバー）……！）

やられた！　後手必敗……！
がらりら。
「おにーちゃーん」
き、来た！　入ってきた！　ニコニコ笑顔の、かなめちゃんが！
このパターンには白雪やレキで一定程度の慣れがあるとはいえ、相手が妹となると――喩えようのない緊迫感がある。
しかもかなめはアメリカ育ち。
胸もその他も手で隠したりせず、オープンにディスクロージャーしてくれちゃってるよ。
「――なッ、何しに来たんだよ！」
ぴたぴたとスノコを踏んでやってくるかなめは……言うまでもなく、すっぽんぽん。
幼いながらも、その身体は子供から女に変わる貴重な時期の序盤にある。
発育途上とはいえ、丸みを帯びた胸やオシリの辺りはハッキリと女子女子してる。

あどけなくて、清々しいほど無垢で、それでも肉体的には明確に女体。というだけでも背徳的なのに、あまつさえ妹……まさに、背徳の特盛り……！

湯気のおかげで要所要所が隠れてなかったら、ヒスって拳銃自殺コースだったよ。でも俺、頭撃っても死なないんだよな。それはこないだカツェに撃たれて実証しちゃってる。

「えっとね、お兄ちゃんの体から女のニオイがするんだよね」

「は、はぁ？」

「だからお風呂で洗い流してあげて、かわりにあたしのニオイをすりこんであげるの」

前半後半ともにツッコミ所だらけのかなめ発言はスルーして、俺は――ざぶんっ。

とりあえずこっちの要所を隠すため、かつ、チャンスを見て逃げられるようにあたしの要所を隠すため、かつ、チャンスを見て逃げられるようにんだ。

……湯船に片膝をついて半身浴の構えだ。

「それに、家族で仲良くお風呂に入るのはいい事でしょ？　でしょ？」

かなめは既に、剣道の達人がやるような巧みな歩法で浴槽の真ん前まで詰め寄ってきている。前門の妹、後門の科学剣だ。



ほんと、うちの妹はこんな美少女なのに、なぜこうも残念な脳みそをしてるのか……！

「それはそうかもしれんが、高校生の兄と中学生の妹は一緒に入らないんだよ基本！」

「じゃあその基本外ってことで。はいお兄ちゃん、ぎゅってして？」

かなめは両手を差し出し、湯船に入ってこようとしてる。

はいじゃねーだろ、ぎゅっじゃねーだろ、胸隠せ！

と言いたい俺だが言葉による説得合戦では人工天才に勝てないので、自然凡人らしく……ぎゅっされる前に、「わーわー！」とか叫んでからの、ぱんっ！　ネコ騙し。

左右には完璧に隙の無かったかなめだが、浴槽のフチに片足を掛けるモーションで足を開いていたので――ちょっと甘ヒスっていた俺はその空間に活路を見いだし、

（――潜林ッ！）

敵の足下を蛇のように抜ける遠山家の秘技で、抜けたッ、かなめの背後に。

『体を捻りつつ浴槽のフチを這い、妹の股をくぐる』という、我ながらありえ

ん挙動ではあったが。
そして後は服を手に、新幹線の如く――フロ場・脱衣所・廊下を通過し、自室へGoだ。
かなめ的にはネコ騙しでマバタキしていた事と、未見の技だった事もあり…
…
目の前から、パッと俺が消えたように見えただろう。
かなめよ。遠山家の技は基本、手取り足取り教えてはもらえないものだ。
だから、見様見真似で覚えるしかない。そいつを見逃すとは――
お前もまだまだ、遠山家の一員としての自覚が足りないな。

などとアホな日常を送っているうちに、フライパンとおたまを耳元でカンカンやられる不愉快な『妹目覚まし』で起こされた大晦日。今日は、休日だ。
なので俺は久しぶりに切った張ったもなく、平穏な一日を過ごせて……
コタツでレキと婆ちゃんと茶を飲んだり、温室で金三と爺ちゃんと芋を掘ったり、庭でかなめと磁気推進繊盾にハイマキを乗せて飛ばしてみたりした。
そんな遠山家での大晦日も、暮れゆき……



第60回・紅白歌合戦を見ながら、年越し蕎麦を食べる時間となった。
「今年は賑やかな年越しじゃの」
「そうですねぇ」
などと、爺ちゃん婆ちゃんはノンビリ語らってる。
だが……相変わらず、みんなが揃って食事するこの光景。アレだな。
元大統領警護官が、人間兵器が、Sランク狙撃手が、ちゃぶ台囲んで天ぷら蕎麦食って紅白見てるよ。巣鴨の平屋の、畳の居間で。
（兄さんは、どうしてるのかな……）
などと温かい蕎麦をフーフー吹きつつ考える俺の横では、
「おお……ッ……」
テレビに映る巨大ロボみたいな小林幸子の衣装に、ジーサードが感動してる。
コイツはちょっとブッ飛んだ美的センスの持ち主なんだが、美術・芸術に対する感動を元にヒステリアモードになれるという特異体質中の特異体質の持ち主だ。今も、なにやらヒスれてる感じだな。小林幸子でヒスるとは、パネェな。
キンゾー。
「おっいしー！　お兄ちゃんエビ食べないんならちょうだい！」

「あっこらッ！」

俺が後々の楽しみのためにとっておいたエビの天ぷらを無慈悲に奪って食べるかなめは、婆ちゃんの手作り和食が大のお気に入り。レキもちゅるちゅると、例の間断無い食べ方で一本ずつ蕎麦を食べていく。

その後、行く年来る年が始まるが……ヒマをもてあましたかなめがベッタリくっついて甘えてきて、悩ましい。レキも何やら、ちょっと視線を鋭めにして監視してくるし。

ジーサードは、ぞぶっ、とトマトを食べながら——

「かなめはそんなにお兄ちゃん子で、兄貴にカノジョでも出来たらどうすんだよ。ハハ」

親戚のオジサンみたいな事を、笑い混じりに言ってくる。

あー、そういう話題は危なっかしいんじゃないかな……と俺が思うやいなや、やっぱりかなめは1秒で目を据わらせて、

「あ？　カノジョ？　お兄ちゃんには妹さえいればいいでしょ」

背筋の凍るようなマジ声で答えてるよ。

するとレキが、



「でも、キンジさんの周囲には萌さんや菊代さんも増えましたよ」

レキ、てめぇ……！　ここへ来てから一言も喋ってねーくせに、何でこのタイミングでそんな事をチクるんだよ！

「やっぱり望月萌、鏡高菊代かぁ！　最初の日からニオイでなんとなく分かってたけど、やるねぇお兄ちゃん！」

ぐさっ！　かなめは笑顔で、俺の肋骨にヒビが入るレベルの肘鉄を入れてくる。

しかもフルネームで呼んだところを見るに、2人の事はもう内偵済みってカンジだ。

「チッ、アイツら、あたしからお兄ちゃんを横取りしに来たか……」

「仰る意味が分かりかねますが……」

あまりの怖さで妹に敬語を使ってしまいつつ、こんな残念な感じで送るのは不本意だが——時は来た。さらばだ。

天国と地獄……いや、地獄と地獄を行き来するようだった、波乱の一年よ。

高岩寺だろうか。除夜の鐘が聞こえる。

元日の0時を回ったら『あけましておめでとう』の挨拶をして、それぞれ就寝するのが我が家の習わしだ。だが爺ちゃんはグラビア写真の1人鑑賞会を開催するつもりらしく、婆ちゃんが寝たのを見計らって離れの物置に入っていった。エロ本抱えて。

俺はパジャマに着替え、一緒に寝たいというかなめから逃げ回っていたところ……

年明け早々、ジーサードが居間で戦闘服――特攻服に組み合わせた、マットブラックのプロテクターを装着しているのに出くわした。

「……金三。真夜中だぞ、どこ行くんだ」

「CIAから気になる連絡があってな。エリア51――エドワーズ空軍基地に行ってくる」

「どこだよそれ」

「ネバダ州南部だ」

「ネバダってどこだよ」

俺に聞かれたジーサードは激しくイラッとした顔になって、

「50州と米軍基地の位置ぐらい暗記しとけよッ！　幼稚園からやり直せッ！」



怒鳴ってくるが、そんな事を教える幼稚園は我が国には存在しないぞ。多分。

「俺は兄貴と違って、あちこちに仕事がある人気者なんだ。それに将来この件は兄貴にも関係してくるかもしれねぇしな。まずは様子を見てくる」

「……よく分からんが、米軍は何しでかすか分からんからな。気をつけろよ」

「兄貴もだぜ？　ナチの残党と戦ってんだろ、今」

「ああ。魔女連隊ってのだよ。俺もあちこちに敵がいる人気者なんだ。香港で奇襲されはしたが、いま敵さんは雲隠れ中。ただ、今回お前は手を貸してくれなくていい。あの程度、俺の敵じゃないんでな」

――というのはウソで、手こずりそうだとは思うんだが……

ジーサードは俺とタッグで戦うとなると、俺にいい所を見せようとしてヘマをやらかすリスクがある。孫の時はそれでいっぺん死にかけてるワケだし、一度大きなヘタを打ったペアはあまり安易にすぐまた組まないようにするのが武偵の鉄則だ。

「……ナチの継承結社はヨーロッパはもちろん、南米・中東・アフリカ、世界各地にいる。ただ、全体的な連携は微妙なところだ。とっくの昔に国家社会主義ドイツ労働者党は解党、ヒトラーは不在になってるワケだからな。各結社、

バラバラ気味なのさ」

俺と同じ鉄則が念頭にあるのか、ジーサードは情報だけを手短に伝えてくる。

そして、俺と似た仕草で後ろ頭を小さく掻きつつ……

「ただ、どのナチ残党と戦うにしても、小さくて古ぼけてるからってナメてかかると――足下を掬われて、返り討ちに遭うもんだぜ。アルカイダと同じさ。その落とし穴もあって、米軍の特殊部隊でも強襲成功率は50%ってとこだ。気をつけろよ？」

警戒を促すように、左の義手で俺の肩をポンと叩いてくるのだった。

元旦の朝、起きるとジーサードはいなくなっていたが……

かなめはジーサードを迎えにきた部下がくれたらしい晴れ着で、婆ちゃんに髪をセットしてもらっていた。新春らしい椿と桜の柄を白と薄桃色で子供っぽくまとめた、振袖だ。雪待ち文様に鶯――予備もあったらしく、それはレキがちゃっかり着てる。

年末から予定していた初詣には……物置で徹夜してカゼをひいた爺ちゃんに合わせて、婆ちゃんも日延べして行くという。



ので、俺がかなめとレキを引率していく事になった。新しく下ろした制服姿で。

武偵御用達の緋川神社がある上野へ、山手線で行くと……駅で、レキが用事があるとか言ってちょっといなくなる。

夏祭りの日にはアリアとの待ち合わせ場所となったジャイアントパンダの辺りで、俺とかなめはしばらくレキを待つ。

元日、午前中の凛とした空気の中――

キラキラの振袖を着て姿勢正しく立ってるかなめは、我が妹ながらキレイだ。見ていてほれぼれする程の美少女オーラを放ちつつも、愛嬌のある顔立ちだからトゲが無い。栗色の髪や深海色の瞳も、なかなかどうして和服に合う。

そんなかなめが、横から、くるっ。俺の視線には気づいてた顔で振り向いてくる。

「日本の冬も寒いねぇ、お兄ちゃん」

そして、きゅ。くっついてきて、笑顔で腕に抱きついてきた。

ふにゃん、と腕に伝わってくるかなめの胸の水マクラみたいな感触は――

下着をつけなくてもよいという和服ならではの、ヒステリア的危険要素だ。

やばいぞ。

「お、お前なぁ。放せよ。兄妹で腕組みなんて、おかしいだろ」

通行人たちは、この兄妹をカップルと誤解してニヤニヤしてくるので……恥ずかしくもあった俺は、かなめを振り払う。しかしめげないかなめはキラキラした笑顔のままで、

「お兄ちゃん非合理的ぃ。兄妹っていうのは、コミュニティの最小単位。血を分け、かつ男女であり、結びつく事に最も適している間柄なんだよ。そもそも歴史的には――」

――かくかくしかじか。ペラペラ。

ぴしっと指を立てて、理路整然と『兄妹は愛し合うべき』的な話をしてくる。

それを何分か聞かされてたら……

なんだか、確かに、それが合理的な気がしてきたぞ？

俺、かなめと今すぐ入籍するべきなんじゃなかろうか。

だが、すんでの所で気がついた――これはアレだな。教唆話術ってやつだ。

要は洗脳、マインドコントロールだぞ。かなめめ、実の兄になんて術を掛けやがる。油断も隙もねえな、人工天才。

と、俺がドン引きしている所に――

「Happy New Year. キンジ」

「あけましておめでとうございます、キンちゃん。今年もよろしくお願いします」

「やっほーキーくーん！　あけおめのことよろで！」

「……」

アリア、白雪、理子、レキが、いつの間にかやってきていた。

レキは元より、4人とも晴れ着の和服で。

どうやらレキが事前に、みんなと初詣の待ち合わせをしてくれていたらしいな。

「白雪ったら、ジェットヘリで星伽から帰ってきたんだって。蒔江田さんも大変よね」

やれやれ、と、首を横に振るアリアの着物は、桜とそのつぼみを花丸紋にした紅・白・ピンクのモダン柄。

和服とは意外と欧米人にも似合うのだが、クォーターのアリアもその例に漏れない事は夏祭りで実証済みだ。パッと見、七五三みたいだけどね。

「だって、キンちゃんと初詣したかったんだもん……会えて、嬉しいです」
ぽーっと赤くなって俺の隣に来た白雪の振袖は、雪の結晶、鶴、七宝・小槌・丁子等をあしらった宝づくしの古典柄。吉祥文様だ。
さすが大和撫子。和服で現れると断トツで色っぽくて……こっちも赤くなっちまうよ。
しかし、アリア、白雪。2人とも偉いな。
神社での初詣にふさわしい、完璧な着付けをしてきているよ。
「ねー見て見てキーくん！　今年は寅年だから、ほら！　タイガー！」
だが理子。テメーはダメだ。何だそのロリヰタ和服は。ポンと叩いた帯はとらのあなのキャラが刺繍された痛帯。裾はミニスカートで縁にはフリルだし、しかもそれをパニエで膨らませてるし、シマシマのタイツと厚底シューズをはいてるし。
だが……防弾制服の俺が人の服をとやかく言えた義理もないか。許そう。似合ってるし。
緋川神社は割と穴場で、ロケーションの割にはすいている。



その拝殿に5分ほど並びつつ……
「ここは二拝二拍手一拝の手順だよ。でも本当に大事なのは作法より心だからね」
などと先生モードの白雪に教わりつつ、バスカービル＋かなめの6人は横並びになって参拝を始める。
鈴を鳴らして大きな賽銭箱にコインを投げた女子たちは……みんな目を閉じて、真剣にお願い事をしてるよ。何を祈ってるのかは知らんが、カワイイ光景だな。
じゃあ、俺も祈るか。
（武偵にとって、運は大事だからな……よし。賽銭は奮発していこう）
と、俺は思い切って500円玉をサイフから取り出す。
しかし……賽銭箱までが、ちょっと遠い。並んでる内に、俺は自己中なバスカービルの女子どもに列の右端まで押しやられてしまっていたからな。
500円もの大金を入れ損じたら、取り返しがつかない。角度的にも、箱の桟に弾かれそうな感じだ。困ったな。

と思ったら、メインの賽銭箱の右横、手前の方に……輪っかみたいな紅白のヒモが2つついた、ちっこい賽銭箱がある。こっちなら入れやすそうだ。よし、これに入れとくか。

端っこの鈴をなんとか鳴らし、賽銭を入れ、柏手を打って――

（……えーっと、女難の相をなんとかしてください。あとあんたのご親戚の玉藻とかいうキツネに憑かれてるんで、あれを祓ってください）

白雪の言うとおり心から祈って、皆で拝殿の脇に少し出ると……

「はい、じゃあそろそろちょうだいキンジ」

「……？」

アリアが、カラの両手を突き出してきた。白雪もおずおずと、理子は元気よく、レキはいつの間にか、かなめも笑顔で手を出してきたぞ。俺に。『ちょうだい』のポーズだ。

「何をだよ」

「オトシダマ、だっけ？　日本にはお正月にプレゼントくれる風習があるんでしょ？」

って、お前ら……！　よく見たら事前に示し合わせたらしく、晴れ着の袂か

ら拳銃やら狙撃銃やらの一部をチラつかせてるし。
キレた俺が先制の撃ちぞめを披露してやろうかと思ったところ、その不遜な企みは――
「あのね、私もキンちゃんのお年玉を……たま？　玉藻様!?」
セリフの途中から声を裏返した白雪によって、妨げられる。
白雪が目をまん丸にして見る方へ、皆で振り向くと――拝殿の中から、巫女姿の玉藻が御簾を上げて出てきていた。
あのキツネ女、シッポは緋袴の中に、耳は簪みたいな髪飾りの裏に隠してやがるぞ。
「――声がすると思ったら、やはりお主らじゃったか。おお遠山の。ひさしゅう」
「なんでここにいるんだよ……お前まで……」
さっき祓ってくれって祈ったのに、もう遭遇しちゃったよ。ご利益ねえなあ。
「レキから、皆で初詣に行くと聞いての。ついでに、あるばいとじゃ。おうおう、だいぶ信心が貯まったの」
と、玉藻は……さっき俺が５００円を入れた方の、小さい賽銭箱を……じゃ



りっ。
紅白のヒモをランドセルのバンドのようにして、背負った。それ玉藻のだったのかよ！
「玉藻、俺はここの神社にお参りに来たんだッ。お前にはビタ一文払わん。金返せ！」
俺は玉藻に駆け寄り、また足首を掴んで玉藻ごと賽銭箱をひっくり返そうとすると――
「喝ァーツッ！」
ぴょーん！　ごすっ！　――痛ッ！　飛び上がった玉藻に、賽銭箱で脳天を殴られた！
これがカツェに撃たれた傷あとを直撃し、なまら痛い。ていうかかなり重量あるぞそれ。
堂々やってるって事は許可も取ってるんだろうが、神社に寄生して荒稼ぎしやがって。
倒れた俺の上に一本歯の下駄でちょーんと着地しつつ、玉藻は、
「皆の衆。この拝殿の奥に儂の座があるから、そこで御前評定としようぞ！」

そんな事を言ってくるのだった。

御前っていうから誰かＶＩＰでも来るのかと思ったら、玉藻御前ってことかよ。

だが玉藻の神社に対する威光はかなりのもので、俺たちは境内に部屋を貸してもらえた。

上座でキンキラのザブトンに正座した玉藻が、車座になった俺たちに向き直る。

「――香港での藍幇討伐、大儀であった」

何様？

「だが知っての通り、今回の極東戦役……欧州は眷属有利に進んでおる。パトラ、カツェ率いる魔女どもに加え、侮りがたき2人の傭兵が均衡を破った。東洋人というから藍幇の党類かと思いきや、日本出身らしい。その正体は不明じゃ」

「傭兵――『妖刀』『魔剣』か」

かなめに電話で聞いていた名前を俺が挙げると、玉藻が頷く。

「いまいち眷属の意のままに動かぬ男女らしいがの。その戦闘能力は極めて高い。実戦に出てくる事は希なれど、その2人がいるという前提で動かねばならぬので……バチカンやリバティー・メイソンの動きが牽制される。そこをカツエやパトラにつけ込まれておるのじゃ」

「どんなヤツらなの。もう少し情報が欲しいわ」

良くない予感がするのか、厳しい表情のアリアが訊ねる。

「通常の武人には妖刀が、超能力者には魔剣が出張る。妖刀は日本刀と銃を用い、聞いた限りでは遠山兄弟のように近接戦を能くする男じゃ。魔剣は未知の最新魔術を使いこなし、長距離戦に優れる――これも、極めて危険な魔女じゃ」

通常戦と、超能力戦。近距離戦と、遠距離戦。役割分担が出来てるってワケか。

「弱ったねぇ。そんなヤツら、見たことも聞いたこともないよ」

理子が首をひねると、

「そこも、この2人の恐ろしさじゃ。妖刀・魔剣は不自然なほど師団の誰もがその存在を知らなんだ。つまり何が飛び出してくるのか分からん、2頭のダークホースなのじゃよ。2人が揃っている時には、ゆめゆめ戦うべからず。バス

カービルといえど全滅しかねん。どちらか1人ずつ、集団で取り囲める時にのみ、戦うようにせよ」

玉藻って……彼我の戦力分析をする時、ちょっと保守的なんだよな。

たった2人で、このバスカービルを全滅させるだと？

そんなヤツら、ちょっと想像しづらいぞ。ありえん。

「なお向こうでは、師団と眷属が陣取り合戦をするような感じで戦役が進んでおっての。今は東南――独逸・埃及から眷属が陣地を広げ、師団は西北――仏蘭西・和蘭・英吉利に追い詰められ気味じゃ。伊太利のバチカンは孤立した。目下、援軍を要請されておる」

地理の成績が悪くてどの国がどこにあるのかすらウロな俺だが、要は向こうじゃ負けが込んできて、こっちに助けを求めてきてるって事か。

「とはいえ、ここで慌てて援軍を何人も送ると――手薄になった東京や香港を打たれる。眷属はそれも狙っておろう。なので欧州に送るのは若干名とするが、戦いは派手にさせる。それを見た眷属を、強力なままの極東に釣り出すのじゃ」

玉藻の言う戦法は……武偵の定型戦術にも、似たような手法がある。

ランペイジ・デコイ――『暴れん坊の囮』と通称される方法だ。



今回のケースに当てはめると、基本、東京にバスカービルを、香港に藍幇を据え置いてまずは主戦力を拠点に固めておく。

そして苦戦中の欧州戦線に、援軍の若干名を『戦う囮』として派兵し、目立たせる。

この囮は前線で暴れるのが仕事だ。仲間のサポートもしっかり受けているようなフリをしつつ、勢いを見せる。

まず、それはヨーロッパの師団にとってありがたい援軍になるだろう。加えて、眷属がその囮の印象から「極東は手薄になったハズ」と思い込み、余剰戦力を送ってきたならば……堅固なままの東京や香港はそれを確実に取り囲んで、返り討ちにするのだ。

「欧州を攻める班も、東京を守る班も――今まず狙うべき首級はカツェ、パトラ、妖刕、魔剱、そのいずれかじゃ。なお妖刕と魔剱は恋仲とのウワサもある。片方を人質に取れば、もう片方も退治できるやもしれぬのう」

なにげにエグい策で話を締めくくった玉藻だが、まあ全体的には……賛成だ。

特にカツェとパトラ。あの2人は、断固逮捕しなければ。

今や、戦う理由は山ほどあるからな。まずタンカージャックでの、頭を撃た

れた新鮮な借りがある。2人は2人とも、かなえさんに冤罪を被せた犯罪者だ。

さらに――アリアの殻金も持っている。残り3つのうち、2つを。

（そういえば、殻金……）

玉藻に渡しておかないと。

「作戦については分かった。あと……少し話が変わるんだが、これ」

と、俺は諸葛にもらって制服のポケットに入れていた殻金を玉藻に差し出した。

「おお、1つ取り戻したか。ではアリアは残れ。お主の胸に戻す」

言われたアリアは、こくり。真剣な顔で頷いてから――

「みんなにはもう話したけど……まさか、孫が緋緋神だったとはね」

やれやれ、という感じで頭を振った。

「正確には『不完全緋緋神』だけどな。でも、髪とか目とか、黒いままだったぞ」

アリアのピンクブロンドのツインテールをチラ見しながら俺が言うと、

「元の色が濃いと、色金が入っても変色は目立たぬ。シャーロックもそうじゃったろ」



玉藻がそんな説明をしてくれる。

って事は……と、俺はレキに振り向く。

「お前の髪は元々何色だったんだ？　金髪とかだったのか？」

「銀灰色でした」

これまた意外な。

脳内でちょっと、銀髪のレキを想像してみるが……うん、いい感じの色違いキャラだな。銀狼が一層似合うよ。識別名を付けるとしたら、ノーマルレキ／雪レキ。元々金髪だったアリアは、桜アリア／ゴールドアリアってとこかな？

正月明け――まだ冬休みの武偵高に戻った俺は、強襲科で射撃の自主トレをした。

そして夕方、強襲科棟前の『武器・売ります買います掲示板』をチェックする。

スクラマ・サクスは失ってしまったが……長物の刀剣は武器のみならず、防具にもなるからな。あれをいつも背中に挿してるのと防弾制服だけなのとでは、背後からの打撃や衝撃に対する備えが全

く違うんだ。

（年末年始は金に困るヤツが多いから、掘り出し物が多かったりするんだが……）

と、掲示板を眺めていた俺が――ぐいっ。ネコ掴みされて、持ち上げられた。

振り返ると、口をへの字にした強襲科・兼・体育教諭の……蘭豹だ。

横からは、ぱちぱちぱち。探偵科・兼・現代文教諭の高天原ゆとり先生が拍手してくる。

「叱られてるんですかね、誉められてるんですかね」

俺が2人の女教師に尋ねると、

「どっちもかなぁ」

高天原はニコニコ顔。

「来いや」

蘭豹は、半ギレだ。なにこの新パターン。得も言われぬ不安感があるんですけど。

小雪の降り始めた夕空の下、そのままネコ掴みで連行された先は――



教務科5階、校長室だった。

「緑松校長、失礼します。高天原です。遠山キンジ君を連れてきました」

「はい、はい。どうぞ」

中からの男性の声に続けて高天原がドアを開け、中に入る。

「はい、はい。どうも」

マホガニーのデスクについていた、話すのは退学騒動以来の緑松校長……って、この人だったっけ？　この人だったような気もするし、違う人だったような気もする。

人の記憶に残らない――『見える透明人間』こと緑松校長は、

「まずはおめでとう、『エネイブル』。君には2つ名が付きました。正式開校時から5年、在学中の国際武偵連盟による認定は当校の歴史上14人目。2年次では2人目の快挙です。常用外ですが、漢字文化圏用に文字もあてられました。覚えておくように」

テキパキと話し始めて、水溶性ペーパーに書かれた『帊』という文字を見せてきた。

2つ名が正式に付いたのは、名誉な事だが……

やだなぁ、常用外漢字。
アリアの双剣双銃も大概だが、なんでIADAってセンスが中学生なんだろう。
「今まで不可能だった事に、可能の歴史を加える——という意味の良い字です。2つ名に恥じぬよう、今後一層の活躍を期待します。なお、A組から新たな2つ名持ちを輩出した高天原先生には、臨時賞与が支給されます。あとで経理課にハンコ持ってきて下さいね」
と言われた高天原は、バンザイしてる。どうりで嬉しそうにしてると思ったぜ。
「さて、ここからは——あまり良い話ではありません」
来たぞ。今度は蘭豹が不機嫌な理由の方か？
デスクの上に広げてあった書類は、部屋に入った時点で一瞥したが……アメリカや中国から来た文書に見えたな。そしてブ厚い、イギリスの国章が入ったファイルもある。
「君は実に変わった生徒ですね。能力的な評価が、定まらない。良い点と悪い点があり、良い点は大変良いのですが、悪い点は大変悪い。中でも極めて良くないのが——対外的な目の付けられぶりです」
書類を机のこちら側に移した緑松は、
「イタリアは肯定的ですが、アメリカ、中国が……特にイギリスが、大いに否定的です。少々、危険人物リスト入りをコレクションしすぎましたかね」
あー……そっち系のお叱りか。いつか来るとは思ってたけどね。
俺は内心居直りつつも、ここは校長室なので『スミマセン』的な顔をしておく。
「いいんですよ。こういった系統の問題児は過去にも2、3人いましたし。面白い生徒を育てるのは、教職者の醍醐味でもあります。まあ、君みたいなタイプは殉学しちゃいがちなんですけどね」
いたんだ。俺みたいなの。あといま一言多かったな、この人。
「……ただ、国外からの苦情申し立ては無視しづらいものです。そして、時期が悪かった。いま武偵庁は国家公安委員会との結びつきを強めていて、一部の公安は外務省と犬猿の仲。敵の味方は敵という事で、近年では外務省が武偵庁の盾になってくれないのです」
その辺りで……何となく……緑松校長の言わんとしている事が読めてきた。

俺を含め、生徒がやらかす諸々のヤンチャについては放任するのが武偵高の基本方針だ。強襲系だろうが、事件――それも難事に当たればだろうが、当たるほど強くなるのが武偵だからな。

ただ、それも限度がある。俺は目立ちすぎたって事だろう。学校じゃ目立たない割に、巻き込まれたあれやこれやの裏世界で。

「そのため、申し訳ない――遠山キンジ君。武偵高は君を処分します」

――処分。対外的に、それが必要になったって事だ。

「停学ですか？」

処分内容を先回りして尋ねると、緑松は首を横に振った。

「チーム・バスカービルからの脱退を命じます。イギリスからの苦情が、重かった」

……ッ――やられたぜ。

長距離狙撃を喰らった気分だ。

裏舞台を分かりやすくするために、校長が一言付け加えた『イギリス』は――虎の子のSランク武偵・アリアを、国に連れ帰るまであと一歩の所で俺に奪われている。あの4月、ANA600便ハイジャック事件の後に。



そのイギリス武偵庁が、政治を使ってきたか。卑怯なヤツらだ。

イギリス武偵庁、イギリス外務省、日本外務省、日本武偵庁、東京武偵高……と、話を回すのに9ヶ月の時間がかかったようだが、その遠距離攻撃、命中したぜ。

俺はジーサードを連れて孫と戦い、死なせかけている。これにはジーサードと癒着するアメリカが難色を示しても仕方ない。中国――香港藍幇はともかく、政治の中枢でもある本土を仕切る上海藍幇は、俺にいい印象を持ってはいないだろう。

図らずも、その辺からのクレームが重なって……武偵高としても海外、特にイギリスの溜飲を下げる『処分』をせざるを得なくなったのだ。俺に対して。

（――アリアと俺を引き離す、って事か……）

そしてその処分は、米中への『遠山キンジには罰を与えましたからね』というアピールにも流用される。面白い話じゃないが、武偵高の立場から考えればクレバーなやり口だ。

などと考える俺に、緑松はそこから……意外な話を、付け加えてきた。

「とはいえ遠山君。君は非社交的ですので、1人で学業をさせてると本格的に

孤立しかねません。それでは君が成長できない。従って、君には別のチームに入ってもらいます」

「……別のチーム……ですか？」

イヤだよそんなの。知らないヤツらと組むなんて。

さっそく眉を寄せた、なるほど非社交的な俺に――緑松は、

「詳しくは新チームのリーダーに伝えていますので。そこもかなりの問題児チームなので、君を監査役として入れる事にしました。はい、これが資料。以上です」

ポン、と武偵高マーク入りのA4封筒を渡してくる。

そしてサッサと他の資料を片付け、別の業務に移ってしまった。

「あ、あの」

渡された新チームの資料を手にしたまま、校長に声をかけた俺を――

「――校長先生が『以上』と仰ったからには以上なのよ、遠山君。さ、行きましょ」

すぐ高天原先生が引っ張って、校長室から外へ連れ出しにかかった。

俺たちの後ろについてくる蘭豹は、背後に警戒する歩き方を保っている。



背後――つい忘れそうになってしまうが、武偵高きっての危険人物――緑松武尊校長の機嫌を損ねないようにしている。

中学生時代からコソボ、マケドニア、アフガニスタンを渡り歩いていたと噂されている高天原と、生まれついての貴蘭會――香港ヤクザの蘭豹が、警戒してるのだ。あの、どの通勤電車にも乗っていそうな、ただのサラリーマンみたいな風体の緑松校長に。

これは、もう……逆らえないな。俺ごときには。

防弾扉のエレベーターに乗ってようやく緊張が解けたらしい蘭豹が「金入るんやったらホストクラブ奢れやゆとりっ！」となぜか高天原先生の巨乳を鷲掴みにしてタカリ始めた中――俺は2人に背を向け、こわごわ封筒を開ける。

書類にザッと目を通すと……俺が入れられる事になった困ったちゃんチームの名は……『コンステラシオン』……？

どっかで聞いた事があると思ったら、リーダーは〝Jeanne d'Arc〟。ジャンヌじゃねえか。

知り合いのチームだったのは不幸中の幸いだったが、何やらかしたんだ。ジャンヌたち。

それでこないだ呼び出し受けてたんだな。今年1発目の――イヤな予感がしてきたぜ。

もちろん、俺は極東戦役には『元バスカービルの遠山』として継続参戦するつもりだ。

だが一部の学校の授業には、今後『コンステラシオンの遠山』として参加する事になる。

（その辺、アリアたちとの連携が鈍りそうだな……）

それだけじゃない。

バスカービルは結成までに俺、アリア、白雪、理子、レキ、それぞれに悶着があって、それを乗り越えてようやく結束したチームだ。

雨降って地固まるというやつで結束力は強く、個々人の能力も（俺以外は）高く、実はけっこう良チームだったのだ。俺たちは。

そこから名簿上の脱退者が出たとなると、アリアの心理的ダメージは大きいだろう。

アリアは国際武偵連盟への登録にもこだわってたが、そこからも俺の名前は消えるしな。

伝え方が難しいぞ、これは。特にアリアに対して。

ヘタに荒れるようなスイッチを押さないように話さないと。新年あけまして風穴です！　になっちまう。

弱ったなぁー……日本へ帰ってきてからこっち、問題ばかり起きてないか？



校長に異動の辞令を受けた、数時間後。

俺とジャンヌは、チーム・コンステラシオンの緊急トップ対談を行う事にした。

何かとジャンヌに縁のあるファミレス『ロキシー』に俺が入店すると、

「遠山。ここだ……」

実に済まなさそうに、しょげたムードのジャンヌが俺を小さく手招きしてきた。

武偵高のセーラー服姿で、スカートの下には黒いストッキングをはいている。

銀氷の魔女さんも、雪の日は寒いんだな。

「何やらかしたんだよ、ジャンヌ」

ドリンクバーを単品で頼んだ俺も、2人で対面して座るタイプのテーブルにつくと……。

「修学旅行Ⅱで、単位を落としたのだ」

ジャンヌは頬を赤らめ、アイスブルーの瞳を逸らす。いつもはこっちが恥ずかしくなるぐらい、まっすぐ俺の目を見て喋ってくるのにな。

巻き込まれた形になった俺に、心底申し訳ないと思ってる感じだ。ジャンヌ。しかし……コイツはコイツで、ホントに美人だな。相変わらず。顔といいスタイルといい、外見は完全無欠だ。映画女優とか彫刻みたいな造形をしてる。

……個人的には、いただけないよ。美人ってやつは。

「このままだと私たちは全員、留年になる……」

「お前なぁ。修学旅行の単位なんかどうやって落とすんだよ。行きさえすればまず単位がもらえる、ボーナス面じゃねーか」

「お前も1学期には単位不足で留年しそうになっただろう。そんなに大きな顔をするな」

きろっ、と碧眼で俺を少し睨みつつ、プンプン。



ジャンヌはごめんなさい期から、八つ当たり期に移りつつある。

銃弾と刃物の次に危険なものは、女の八つ当たり。

アリアでそれをタップリ経験している俺は、一つため息をついて気持ちを切り替える。

これ以上ジャンヌを責めても始まらないしな。

「なんで落としたんだ、修学旅行Ⅱ」

「忘れ物をしてしまったのだ。日本に」

ジャンヌは小さく指を噛み、コーヒーカップに視線を落とす。

「何を忘れたんだよ」

「コンステラシオンの副リーダーの中空知と、メンバーの島苺、京極めめだ」

「ちょっ……人を忘れた？　ていうか、教務科がくれた資料で名簿を見たんだが……お前以外全員じゃねーかそれ、コンステラシオン的には。ど、どういう事だ？」

「絵で説明してやろうか、遠山」

「いや、いい。口頭で頼む」

「私たちはシンガポールのチャンギ国際空港で待ち合わせしていた。しかし着

いたのは私1人で、待てど暮らせど3人が来なかった。中空知は空港を歩いている内に荷物を無くし、島は飛行機を眺めていて搭乗便に乗り遅れ、京極はメンタル上の理由によって欠席した。以上だ。教務科からは追試を申し渡された」

説明されても……意味が分からん。何だそりゃ。

規則上、修学旅行の欠員は代理が必要な上、1チーム1人までに限られていた。

3人も欠席者が出たら、さすがにアウトだろう。前代未聞、修学旅行の追試だ。

「……またシンガポールか？」

「いいや。武偵高と提携している旅行会社がシンガポール行きのチケットを確保しているシーズンは12月までなので……修学旅行Vで3年が行く地域の内、空きチケットがあったヨーロッパ行きを厳命された。カリキュラムも3年のもので行けとの事だ」

「ヨーロッパって。ヘタに行って刺激したらヤバい所だろ。俺たち師団的には」

「――逆に、いま最も助けにいくべき所でもある。バチカンやリバティー・メイソン、イ・ウー残党研鑽派の救援要請もあるわけだしな。禍転じて福となすだ、遠山」



顔を上げたジャンヌは、キリッ。

飛び級的に命じられた修学旅行Vを利用してしまおう、的なノリだ。

「この件、すでに玉藻にも話してある。私たちはいま欧州戦線で前線となっているパリに切り込むのだ。案ずるな。フランスは私の祖国、地の利もある」

個人的には……禍転じず禍となる、だぜ。

玉藻の作戦、ランペイジ・デコイ――『暴れん坊の囮』。

その囮役に、俺もされてるみたいだぞ。早くも、いつの間にか、勝手に。

ただ、まあ……海外には一度行って、慣れとは言わないまでも行く度胸はついた所だ。

何にせよ師団が持ってるアリアの殻金は取り戻さなければならないし、それは俺の責務。

人任せにするより、自分でやるべき仕事だろう。

だから……イマイチ気乗りしないままだが、俺は、

「分かった、一緒に行ってやるよ」

1人で囮役をやる自信の無さそうだったジャンヌに……

聞きたかったであろうセリフを、言ってやった。
「ありがとう、遠山。パリで出くわすかどうかはともかく、ナチスは3代前のジャンヌ・ダルク……私の曾祖母もレジスタンスの銃士として戦った、因縁のある相手だ。勇気あるお前の参戦を、心から感謝するよ」
俺の爺ちゃんにとっちゃ同盟国だったんだけどな。当時のドイツは。
だが、昨日の友は今日の敵。
諸葛じゃないが、そこは割り切ろう。今日を生き延びるために。

正月気分も抜けきらない、1月5日の朝。
バスカービルのリーダー改め、コンステラシオンの監査役こと俺は——
総武線直通の横須賀線・快速で、成田空港第2旅客ターミナルに着いた。
監査役が遅刻してはアレなので、フライトよりかなり早めに着き……
今回は国内にした待ち合わせ場所、国際線出発ロビー内——NAAランデブープラザ、スターバックスに入る。
すると、いたぞ。
トンチキチーム・コンステラシオンの重鎮。中空知美咲が。



もさくてでかいスーツケースを向かいの席に乗せ、『会話がうまくいく21の習慣』とかいう本を懸命に読んでる。前髪とメガネで隠れてるから、目つきまでは分からんが。
俺がコーヒー片手に近付いて、
「おはよう。今日はメガネなんだな」
そう声をかけたら、ハッ！　と中空知は顔を上げ、ぱしん！
本を閉じ、その閉じた音で自らビビり、わたわた。制服のスカートをはいた、でかめの尻の下になぜか本を隠す。そして、
「う、ぉ、お、おあしょうございます！　監査役との！」
多分これは『おはようございます、監査役殿』だな。本での学習成果が出てないけど。
そして、わさぁ、と長い髪を前に揺らして深々とお辞儀してきた。
それでメガネがずれて、またわたわたしてるよ。中空知。
（これが、チーム・コンステラシオンの副リーダー……）
初っぱなから、不安に陥れられた気分だぜ。
——この中空知美咲は、これでも通信科のオペレーターである。

だが、極度のあがり症なので人前でマトモに喋れない。そのくせ通信機を使うと滑舌がアナウンサー並に良くなるという、俺が言うのも何だが変わり者の女だ。

「わぁぁわぁ男子、おとこ、とおにゃまクンです#く$あ%せ&ふ#じ$こ%&?:?:?」

立ちつくす俺を見上げ、中空知は何やら舞い上がった調子で謎言語を呟いている。

「何?」

「い、いえ、ひひひ独り言なので、きき気にしないで下さい！　あ、あの！　すっすっ、すみません！　ベンチを独りしめ、しめ、占めしてて！」

中空知は噛み噛みでそう言うと、対面の席から自分が置いていた荷物をどけた。

そしたら、だばぁ。

やたらでかいスーツケースが開いてしまい、中からぐしゃぐしゃに入れてあった服やら本やらヘッドホンやら、そして拳銃（！）がころころーんと出てきちゃってる。



な、なんて、だらしないんだ……！

「お、おい、銃はさすがにマズいだろ」

と、中空知のシャツの下から銃を拾い上げると……お、重っ！　なにこれっ。

（……コ、コルト・アナコンダ……！）

熊や水牛も一撃で殺せる、.44マグナム弾をブッ放す大型リボルバー拳銃だぞ。

しかも銃身は最長の8インチ・モデル。重いわけだぜ。これが持ち銃なのか。

中空知。

「お前……こんなゲテモノ撃てんのかよ」

ここは空港なのでシャツで包み気味に銃を返すと、

「う、撃ったことはありません」

っておい。

「じゃあ何でこれにしたんだよ……」

「じゅ、銃は、怖いので……あまりよくあまり知らなくて、調べるのも、怖くて、なのであまりよく知らなくて、でも校則で持ってないといけないので、銃砲屋さんに薦められた、こ、これを。お安くしていただきいたので、3割引で

っ……」

中空知は、もさい下着を抱っこしつつしどろもどろ。

あーあ。無知と気の弱さにつけ込まれて、在庫処分品を掴まされたパターンだなこれ。

よく見たらこのアナコンダ、シリンダーに難がある初期バージョンのヤツだし。

ていうか、銃が怖いって。いつも思うが、よく武偵が勤まるなお前。

だがまあ、中空知は……よくいえば豊満な体つきをしている。女性なので聞かないが、体重もありそうだ。大口径銃を撃つには有利な体型と言えるだろう。

（世の中には大型拳銃を2丁撃ちするチビもいるワケだし、神経質になる事もないか）

と、俺は……むちむちした太ももを無意識にねっとり見せてくる悩ましい中空知と2人、雪崩を起こした荷物をスーツケースに戻していく。

「このポケットナイフは何だ」

「ひ、肥後守です。刀剣の所持も、所持義務あります、から」

「剣銃のバランス悪いなお前……じゃあ、この赤いヒモは？」



「しゅしゅ、趣味の、あやとりです」

……高校生にもなって、あやとりが趣味……

ていうかお前、なんで近くで会話する時はこっちを絶対見ないんだよ。

そのくせ俺がゴミ箱にゴミを捨てに行く時は背中をジッと見てたりするし、振り返った俺と目が合うとビクッとなってからうつむくし。挙動不審なんだけど。

中空知の荷物の再パッキングも終わったが、まだ集合時刻より前だったので……

「何か作ってみろよ。あやとり」

コーヒーを飲みながらヒマにあかせてそんな事を言うと、スーツケースから赤いヒモを出した中空知は……せっせ、せっせ。言われた通り、何やら作り出した。

そして、

「ご、ごじゅうのとう」

五重塔だ……！　すげえ。

「上手だな」

思った通りを言ってやると、中空知は赤くなって……えへへぇー……と、ニヘラニヘラだらしなく笑った。気持ち悪いけど、なんか……妙な可愛さがある な。この女。愛嬌っていうのかな。そういうのがある。

そんな事をやっていると――

「遠山。中空知。おはよう」

「ハロー、トオヤマ」

あの略鎧を積んでいるらしく荷物の多いジャンヌと、ほとんど手ブラの……ワトソン？

ワトソン君ちゃんが来たぞ。男子の制服を着てるけど。

「何で来たんだ、ワトソンまで」

「ご挨拶だね。京極さんの代理だよ。それと……」

トン、ツートト。ワトソンは俺の肩を掴むような素振りで、素早く指信号を伝えてきた。

曰く、『ＴＡＭＡＭＯ　ＦＥＷ』――極東戦役の援軍を、玉藻に命じられたって事か。

玉藻は……頭数が足りないと思ったんだろうな。内１人は俺だし、さもありなんだ。

ワトソンはイギリスの出だからヨーロッパのあれこれに詳しいだろうし、所属しているリバティー・メイソンが苦戦してるわけだしな。適任だろう。

「ていうか代理って。京極めめ……だっけ？　鑑識科の。そいつはどうしたんだよ」

コンステラシオンのリーダーことジャンヌに聞くと、

「いつも彼女は通信講座で授業を受けているのだが、半年ぶりに家を出ようとしたところ過呼吸を起こして入院したのだ。今回行ける人員は、これで全員だ」

「……」

空港までの段階で、もう脱落者が……っ……

この修学旅行には、俺の評価も関わってるんだぞ。連帯責任で留年とかにな



ったらどうしてくれるんだ。残りのヤツらをビシッと統率しないと。

監査役は出発前に全員をチェックしなきゃいけない規則なので、

「じゃあ行くぞ。気をつけッ！」

俺が号令をかけると、シャキッと立ったジャンヌとワトソンの隣で中空知がなぜか転びそうになってまたトランクをだばぁしている。

竹刀でも持ってたらそのだらしないケツを叩いてやりたいところだが、無いので、

「番号！」

なし崩し的に、人数を確認する。

「イチ」

「ニ」

「さ、サンっ」

「ヨンですの～」

あれ？

ジャンヌ、ワトソン、中空知、と、もう１つ声が聞こえたぞ。ヘンな喋り方の、女子の。

だが姿は見えないので、首を傾げていると……

振り返ったワトソンの背後から、フランス人形みたいな女の子が顔を出した。

「ぷっぷー♪」

クラクション音を口で表現しつつ、現れたのは……

モカブラウンの髪をふんわりさせ、でかくてまん丸な目でこっちを見上げてくる女子だ。身長は――目測、135㎝ちょい。アリアどころか間宮よりもチビだぞ。背には女児用と思われるリュック。でかいリボンのついたピンクのエナメル靴は、20㎝とかそこらだ。

そして……その、服。全身がピンクと白の、リボンとフリルの要塞だ。頭の横幅よりもでかいピンクのリボンを脳天に載せ、袖、裾、ふんわり広げたピンクのスカートに重ねたエプロン、ピンクのハート柄の白いニーハイソックスにも数多のリボンを装備している。

そしてその、エプロンのストラップと一体化したセーラー・カラーは……もしや……

「監査役さま、お初にお目に掛かりますの。私のお名前は、島苺ちゃんですの！」

やっぱり武偵……コンステラシオンのメンバーかよ、これも……ッ！



確認のため見回してみると、辛うじて武偵高の女子制服の形跡が見られる。

苺形に膨らんだパフスリーブの襞に埋もれた、校章とか。

な、なんちゅう制服の改造っぷりだ。理子の比じゃないぞ。ほとんど原形を留めてない。

「なぜ深いショックを受けたような顔をしているのだ遠山。彼女は車輌科のAランク武偵。2年では武藤剛気のライバルと目される、コンステラシオンの逸材だぞ」

「担ぐのはよせ。この短足じゃアクセルが踏めないだろ。それとも車輌科じゃ三輪車でもAランクが取れるってのか？」

俺がちょっと強襲科的な言い方をすると……島は、ぢんわぁ……目を涙でうるるっと潤ませて、「ふぇ……」などともう泣いちゃいそうになってる。なんたる心の弱さ。

いきなり女の子を泣かした俺に、ジャンヌがムッとしているので――

「あー、泣くな泣くな。悪かったよ。今のは、その……失言だった。謝る。じゃあ行くぞ。みんな、はぐれるなよ」

冷凍グラタンにされたくなかった俺は島をヨシヨシして宥め、なんとか泣き

やます。

そして、全員で一列になって出国ゲートを抜け……

電子案内板を見て、パリ行きのＪＡＬ４０５便の駐機している63番ゲートへ向かおうとする、が……たったった。

後ろで足音がしたので振り向いたら、ジャンヌ、ワトソン、中空知はいたが、最後尾にいたハズの島がいない。

（もう脱走者が出た！）

青くなって探すと、見つけたぞ。

島はエナメルシューズの足で女の子走りし、関係ないゲートの窓にまっしぐら。

そして窓枠に登り、べたぁ。窓ガラスにへばりついた。何やってんだ。

「お、おい島。はぐれるなって言ったばかりだろ」

駆け寄った俺は、ブン殴りたい右腕を左手で押さえつつ横から注意する……が……

「監査役さまもご覧下さいませ。世界最大の旅客機、エアバスＡ３８０ですの。最大定員８５３人、最大離陸重量５６０トン。オール２階建ての、まさに空飛ぶホテル。はぁう～……ステキですの。おっきいですの……！」

アニメっぽい大きな目をウットリさせて、島はぽわーんと頬を赤らめてる。

マンガで言えば、周囲にハートマークをいっぱい浮かべてる感じだよ。

「ははは。島はバスや電車、旅客機などの大型の乗り物が大好きなのだ。一番好きなのは何だったか。イージス艦だったか」

大らかなチームリーダー、ジャンヌが横からこの光景を笑い飛ばしつつ説明してくれる。

「ちがいますの。原子力空母さんですの。きゃっ♪」

片思いしてる相手の名前を言うように、島は恥ずかしげに両頬に両手を当ててる。

その表情や仕草は完全に、恋する乙女のもの。

島は……自分がちっちゃいから、でかい乗り物が好きなのか。女子高生として見ると、痛ましい趣味だ。車輌科的にはウェルカムな人材なのかもしれんが。

「し、島。これは追試なんだから、留年確定なら、立場をわきまえてくれよ。早く63番ゲートに行くぞ。出発便に遅れたら、留年確定なんだぞ？」

「あぁ、なんて美しい高バイパス比ターボファンエンジン。世界唯一の4発ワ

イドボディ民間航空機……ドキドキが止まりませんの、苺はもう、もう、オイルが……！」

「――あぁもう！　じゃあ後でラブレターでも送れよ！」

ちっこいのの扱いには慣れてる俺はここでキレて、島の超改造制服の後ろ襟を掴む。

「お、お離し下さいませ～！　写真を、せめてお写真を撮らせてくださいですのー！」

そして蘭豹直伝のネコ掴みで、びーびー泣き出した島をパリ便のゲートへ空輸していく。その途中で、中空知が2回ほどスーツケースをだばぁした。

……チクショウ。

なんだって俺は、こんなチームに入れられちまったんだ？

天然参謀のジャンヌ、だらしない中空知、引きこもりの京極、泣き虫の島。

バスカービルの女子も困った連中だったが、イザという時に命を預けられる――武偵としての信頼度はあった。だが、こいつらにはそれがカケラも感じられない。

誰一人、信用できない。星座などと優雅なチーム名を名乗っちゃいるが、どいつもこいつもポンコツ、出来損ないだらけじゃねーか。

こんな連中と行動を共にしてたら、命を落としかねないぞ……！



ようやく諦めがついたらしい島を放しつつ、63番ゲートに辿り着くと――

そこにはなんと、アリア、白雪、理子、レキ……!?

バスカービルの4人がいて、俺たちを見つけるなり集まってきた。

事のあらましは、しっかり推敲したメールで伝えておいたが……

「見送りに……来てくれたのか。こんな所まで」

怒られないかと内心ビクついて言う俺を、アリアは大きなため息で迎える。

「理子がサプライズで見送りしようっていうから、空港に許可取って搭乗口まで来たのよ。教務科からもメールがあったわ。あんた、ホントにバスカービルをクビになったのね」

「キンちゃん……将来キンちゃんが会社とかをクビになっても、私がその分働くからね！　今回それを証明してみせますっ！」

「サプラーイズ！　キーくん、新しいチームでも頑張るんだよー？」

なんかみんな、既に心の整理を済ませてる感じなんだけど。俺の存在、軽っ

……！

だが……ここは女子4人で相談して、怒らないでおこうという事にしてくれたっぽいな。この空気。

俺の目が離れて窓にダッシュしていった島を、中空知が追っていき……

極東戦役関係者だけになったところで、つっ、とレキが歩み寄ってきた。

「チームがどこであったとしても、私はキンジさんの力になりますから。私たちウルスは、いつでも、いつまでも、あなたの側にいる」

俺をそばから見上げ、そんな事を言ってくるレキを――

理子とアリアが引っぱって下げ、白雪が後ろから抱き留めて押さえてる。

「東京は理子たちにどーんと任せといて！　妖刀が来ようが、魔剣が来ようが、理子たちだけで何とかしちゃうからさ！　くふふっ！」

「あんたたちは、ヨーロッパをしっかり助けてくるのよ？　あと、キンジ……今あたし、あんたがバスカービルに戻れるよう働きかけてるから」

と、アリアは小さく上を指した。

上。つまり、お上……日英の外務省に掛け合ってるという意味だな。

「……ありがとう。恩に着るよ。俺はそっち方面には、まるっきり無力だから」



「もう。これは貸しよ。もうあんたとあたしじゃ、どれだけ貸し借りがあるか分からなくなっちゃったけど」

素直に礼を言った俺に、アリアは犬歯丸見せの笑顔で応じてくれる。

「ジャンヌも頑張ってくるんだよー？　はいこれ、あやに作ってもらったお餞別だよ！　日本の『カワイイ』の極意をパリに広めてきてね！」

背伸びした理子は、ぽん。

ジャンヌの頭に、白くてフサフサした毛の生えたネコミミつきカチューシャをつけた。

重量感から見て、どうも指向性集音器らしいが……なぜその形状にしたのか整え……

女子相手だとノリがいいのか、

「ニャン？」

「はいニャンって鳴いて、ニャンニュ！」

イ・ウー時代からの戦友――理子に言われたジャンヌは、ネコミミ集音器を平賀さん。

ネコみたいな手つきをして、おどけて見せた。

か……カワイイ。

普段のキリッとした態度とのギャップもあって、なんかグッと来たぞ。俺的には危険なアイテムだな。ネコミミ形集音器。機内への危険物の持ち込みは、ご遠慮願いたい。

俺がよくダイブした東京湾を下にして、悠然と旋回するＪＡＬ４０５便の中で――

（また、しばしの別れだな。日本）

窓側の席についた俺はそんな事を思ってみたりもするが、前の席で窓にへばりついてる島のせいで感傷的にはなれない。ジェット機の翼が少しずつ変形するのを見て興奮してるらしいんだが、ハアハアという息遣いが怖い。

島の隣では飛行機が苦手らしい中空知がエチケット袋に一発キメやがったし、しばらくしてから出された機内食を食うのもやたら遅くてやきもきする。小学校の頃、休み時間になってもまだ給食を食べ終わってなかったタイプだな。中空知。

ジェット機は今回、地球の自転に逆らい、西へ西へと太陽を追うように飛ぶ。



そのため窓の外は日本時間の夜になっても日が暮れず、時間感覚が薄れていく。

夜とも昼ともつかない、その時の中で――

「今回の事……悪かったな、遠山。お前は海外に不慣れだと玉藻から聞いていたのに」

肩の触れ合うようなエコノミー席で、俺の隣に座ったジャンヌが謝ってくる。

ジャンヌは、ロキシーでも俺に済まなさそうにしていた。責任を感じているんだろうな。

美人に真横から語りかけられて恥ずかしかった俺は、目を逸らしつつ……

「気にするな。レキ辺りから聞いてるかもしれんが、俺は救護科の望月や尋問科の鏡高ってのに追われてて……ちょうど、日本に居づらかったところなんだ」

気休めにと、そう言ってやった。

するとジャンヌは、くすっ、と可笑しそうに――

どこか妖艶に、その長く柔らかそうなまつ毛の目を細めた。

そして前の島・中空知、後ろのワトソンを気にしたのか、俺の耳元にそのバラ色の唇をくっつくほど寄せ、

「では私を連れて逃げるワケか。駆け落ちだ」
年齢より大人っぽく、色っぽい事を囁いてきた。
「何を……」
俺が振り向くと、
「フフッ。おやすみだ、遠山」
ジャンヌはまた妖しげに目を細め、席に置かれていた毛布をそっと自分にかけた。
そしてそのアイスブルーの瞳を閉じ——静かに、眠っていく。
（……『冗談だ』、とは言わなかったな）
眠るジャンヌを見る分にはあまり恥ずかしくないので、俺はその映画から抜け出てきたような美しい顔を隣から見つめる。
ジャンヌは、とにかく美人だし……
接していて好感が持てる性格なんだが、天然な所もあって、どこか理解に苦しむ女だ。
だが俺は今回初めて、相棒のアリアの故郷であるヨーロッパに行く。この、ジャンヌと。



行く事があるとすれば、アリアと行くものだと思っていたのに。
俺の人生は予想外な事ばかりだよ。いや、誰の人生でもそうなのかもしれないけどな。

# 3弾　仮面舞踏会（マスカレード）

着陸15分前のアナウンスで目を覚まし、窓から外を見ると――
パズルのように道で区切られた田園地帯が、眼下に広がっていた。
もう、フランス上空なんだ。今見えているものは、フランス。
降下していく地表は、何だかオレンジがかって見える。赤土が多いのかもしれない。
そして欧州中央時間（CET）15時、ＪＡＬ４０５便はシャルル・ド・ゴール空港に着陸した。
寒い機外に一歩出ると、花のような甘酸っぱい香りに迎えられる。パーム・オリーブの洗剤みたいな香りだ。これはきっと、この地の香りなのだろう。
入国審査を終え、パスポートにフランスのハンコをもらって――
到着ゲート（Arrival gate）を抜け、セザンヌの『カード遊びをする人々』の絵を使ったPhilips（フィリップス）の看板前で一旦（いったん）改めてコンステラシオンを集合させる。
「修学旅行（キャラバン・ファイブ）Ⅴでは、できれば1人1人で、最低でも2班に分かれて別行動するのが課題だ。俺たちは飛び級で来てるようなものだから、2班でいいだろう。



ジャンヌ班はジャンヌと俺でパリ、中空知（なかそらち）班は中空知・島（しま）・ワトソンでブリュッセルだ」
と、俺は事前にジャンヌやワトソンと相談していた通りに話を始める。
主にジャンヌが立てた、今回の作戦では――
まず極東戦役に関係ない中空知（なかそらち）や島（しま）を巻き込まないよう、前線のパリから離す。
また、もし俺（おれ）とジャンヌが眷属（クレナダ）と出くわし、さらにもし撤退戦になったケースのための避難所をブリュッセルに置く。
ベルギーの首都・ブリュッセルはパリから北に位置し、今のところ師団（ディーン）の勢力圏にある安全な街だ。そこで衛生科（メディカ）のワトソンが守備役（ギャリソン）を務めてくれれば、守りは万全となる。
で、着替えぐらいしか入ってないスーツケースを手に、俺は……
そこからはコンステラシオンの監査役として、規則に従い皆に訓示をした。
「この修学旅行では各自、やりたい事をやれ。観光したけりゃ写真でも取ってろ。誰（だれ）も、何も、強要しない。ただ、将来への想像力があるなら遊んでいる場合じゃない事は分かるハズだ。これからの世の中は、あらゆる物事が年々国際

化していく。武偵だってその例外じゃない。俺たちがいずれまたヨーロッパで仕事をする時も来るだろう。ただの観光客として遊んで過ごしてしまえば、将来この地で戦う時に命を落とす。この地に招かれた時、成果を挙げられない。そうならないために、手探りでも構わないから、学べる限りを学べ。修学旅行とは、学を修める旅である。以上」

監査役マニュアルにはこんな事が書いてあったので、その通りを言うと……

「は、はいぃ」

「はいですの～」

中空知は初の外国に怯えまくりの表情で、島は緊張感の無いほんわか笑顔で答えてきた。

2人とも、俺の訓示を全然聞いてなかったムードだ。とってもコンステラシオンだな。

「トオヤマ」

長いフライトで少しパサついた髪を整えて近付いてきたワトソンが、内緒話してくる。

「事前の打ち合わせ通り、もし問題が生じたら北へ逃げるんだよ。パリからブリュッセルには車でも電車でもすぐ抜けられる。もしそこが陥落しても、さらに北のアムステルダム、その次はロンドンまで撤退できるんだ。それぞれの移動は、数時間しかかからないからね。ヨーロッパにおける国と国は、日本における県と県みたいな距離感で考えるといい」

割と分かりやすい説明をしてくれるワトソンだが、

「逃げる前提で話をするなよ。逆に、スペインやドイツを取り返してやるさ」

海外まで遠征してきたテンションもあり、俺は少し意気込んで返す。

「トオヤマにしては前向きで嬉しいけど、油断は禁物だよ。ヨーロッパはアジアと違って、眷属優勢の地なんだ」

あくまで、ワトソンは警戒心を解かず――

「ジャンヌ。トオヤマをよろしく頼んだよ」

そう言い残して、中空知と島を引率しにかかるのだった。



空港からはジャンヌの案内で、高速郊外鉄道でパリ市内へ向かう事になった。

ジャンヌと2人、京成スカイライナーみたいなそれでパリ北駅に着いて……

驚いた。

旅行者でごった返すパリの玄関みたいな駅なのに、薄暗く、汚く、冷え冷えしていて、見るからに怪しげな連中が点在している。ホームレスや薬物中毒者と思われるのが壁際に陣取り、迷彩服を着た警備員がブルパップのマシンガン(F.A.M.A.S)で武装して巡回している。

(治安が、悪いんだな……これが『花の都』と詠(うた)われたパリか……)

隣を歩くジャンヌには言えないが、ちょっと幻滅した気分だな。

だが、このぐらいの暗さはネクラの俺(おれ)にはちょうどいい。汚いのは香港(ホンコン)で慣れっこだ。治安の悪さも、職業柄どうということはない。

それに……こういう所なら、宿も安いだろう。俺にはピッタリかもしれん。

「じゃあ、ジャンヌ。俺はこの辺りでホテルを探すから」

スーツケースを引いて歩いていたジャンヌを立ち止まらせてそう言うと、

「ムダな出費は控えろ。それにここはあまり良い地区ではない。私の部屋に泊まれ」

真顔でそんな事を言ってくるので……

「何言ってんだ。お前、女だろ」

「そうだ。それがどうかしたか」



「いや、その……」

困ったな。日本語なのにコミュニケーションに難儀してるぞここ。

後ろ頭を掻(か)く俺に、ジャンヌは小さく笑う。

「フフッ。お前、怖いのか？　魔女と2人で」

「いや、それは白雪(しらゆき)とかで慣れてるんだが……」

「ついて来い(フォロー・ミー)。駅はスリが多いぞ」

話がうやむやなまま……ジャンヌは、タクシー乗り場の方へ歩いていってしまう。

ので、俺も仕方なくついていく。

なし崩し的に2人でタクシーに乗ると、

「Galerie des Arcades.76 Avenue Champs-Elysées,s'il vous plaît(ガルリ・デ・アルカデス。シャンゼリゼ通りの76番まで頼む)」

ネイティブの流暢(りゅうちょう)なフランス語でドライバーに告げたジャンヌに、ドキッとさせられる。

パリは……まだ午後5時なのに、もう夜の暗さだ。それもそのはず、ここは札幌(さっぽろ)よりも緯度の高い都市。それでも寒さがそこまで厳しくないのは、温暖な偏西風のおかげだとか。

パリ市内の地区を、タクシーで中心の方へと移っていくごとに――
だんだん、街が煌びやかになってきた。
店やレストランも、高級そうなものになっていく。
(香港と同じで、パリも貧富の差が大きいんだな)
などと考えている内に、気がつけば俺は――
映画で見た、イメージ通りのパリの中にいた。
大きな通りを挟む街には、彫刻で所々を飾り付けた、壮大で華麗な石造りの建物が密集している。それらの壁は乳白色を基調としていて、統一感も見事に取れていた。
一つ一つの建物に、歴史的な価値がありそうだ。いや、全て実際に築百年、二百年物の建築物なのだろう。パリは東京と違い、戦争や大地震で壊滅した経験のない都市だからな。
何やらジャンヌが運転手に依頼して、タクシーは少し遠回りなコースを走っていく。
「遠山」
ちょい、とジャンヌが俺の肩をつついたので――



指さした街角の広場を窓から見ると、そこには威風堂々たる黄金の女騎士像があった。
説明不要で分かる。フランスの国民的英雄、ジャンヌ・ダルク像だ。
俺が苦笑いでジャンヌを見ると、ジャンヌは、どやぁ。
見事などや顔で、笑い返してくる。
「パリには高層ビルが無いだろう、遠山」
「確かに……無いな。どれも10階建てぐらいに見える」
「景観を損ねないため、高層建築を昔から法律で制限しているのだ」
なるほど。パリは、街自体を美術品のように計画して作ったんだな。
どうりで見とれちまうワケだよ。
「超高層の建物は、あれだけだ」
と、ジャンヌが示した先には――
ライトアップされたエッフェル塔が、月と並んで夜空を黄金色に照らしていた。
さっきみんなに訓示を垂れたくせに、すっかり観光客気分の俺を乗せて――

タクシーはパリの目抜き通り、新年ムードのシャンゼリゼ通りに入る。
ここは東京で言えば表参道みたいな、高級ブランド店なんかがある大通りだ。
キラキラしてて、賑(にぎ)やかで、道行く人々はみんな楽しそうにしてる。
だが、タクシーを降りて寒い路上に立つと……
遠目には美しいんだが、道や木々は汚いな。この町。ゴミも落ちてるし。
こういうのを見ると、逆に日本の衛生観念の高さを思い知らされるよ。
「行くぞ、遠山」
ジャンヌに言われて、シャンゼリゼ通りに面した1つの建物の——昔は馬車をそのまま入らせていたのだろう、短い石造りのアーケードへと導かれる。
幾何学的な模様のタイル床が美しいそこを、2人でスーツケースを転がしつつ歩く。
アンティークショップやアクセサリー店、靴屋やブティック、カフェ……といった店が居並ぶその一角に、オートロックの扉がある。
どうやらここが、上層階——賃貸(アパルトマン)マンション(アパルトマン)への入口らしい。
ジャンヌが暗証番号を入れて扉を開けると、次は金縁のエレベーターに乗るのだが……このエレベーターがまた、日本とまるで違う。まず外ドアを手で開



けて、中で行きたい階——ジャンヌは3階（地上階は0階(RC)らしく、日本でいう4階）を押した——を指定すると、内ドアが閉まってようやく移動するシステムなのだ。
そして、3階……例のヨーロッパ特有の花のような香りがする、薄暗い廊下を歩く。
「ここだ」
ジャンヌが長財布から鍵(かぎ)を取り出し、自分の部屋らしい303b号室を開けようとするので……
「いいのか、ホントに」
「この8区の部屋は私個人の不動産だから気がねするな。一族の家は16区にある」
「いや、そうじゃなくて……ここまで来て言うのも何だが、女の1人暮らしの部屋に男が泊まるっていうのは、その、えーっとだな……」
「私も家族以外の男を入れるのは初めてだ。しかし、ケ・セラ・セラ(なるようになる)だ」
——がちゃ。ジャンヌは扉を開いてしまった。
最後が日本語じゃなかったから、ジャンヌがどういう腹づもりなのかは分か

らんが……

ニガテなんだよ。俺、こういうの。一言で言えば。

俺はレキやアリア、理子の部屋にも入った事はあるが、あれは女子寮だからそれなりに気持ちに一線を引けてた。

ところが今度は旅先。他の生徒はもちろん、元女性自衛官の寮監もいない。ガチンコの2人っきりで、一つ屋根の下というシチュエーションだ。胃が痛くなってきた。

だが……俺は……

……眠い。眠いんだ。今。

というのもまだパリは冬時間の午後6時なんだが、これは日本時間の午前2時にあたる。

機内で仮眠を取ったとはいえ、この時差ボケってヤツは胃痛よりも耐え難い。

香港のマイナス1時間は平気だったが、パリのマイナス8時間は強烈だぜ。

――仕方ない。

一泊させてもらおう。今からホテルを探すのも面倒だし、この辺、高そうだし。



「……おジャマするよ」

というわけで、ジャンヌに続いて入ったジャンヌの部屋は――

き、来た。女子部屋特有の、いいニオイ空間。ずっと留守にしてたハズだが、それでもこのフェロモンというかスメルというかは保たれるものなんだな。

なんなのこの、若草みたいな、清潔感のある、爽やかな……そして女ぐさいニオイは。一発で目がさめたよ。いいニオイすぎて、ヒス的な恐怖で。

ぱちん、と電気を付けて靴のままジャンヌが入っていくのは――藍色の壁紙が貼られたリビング。床はダーク・ブラウンのフローリングだ。

まさにフランス映画にでも出てきそうなオシャレな内装だな。大人っぽい。

そこに俺も入っていくが、家で靴を脱がないってのは……落ち着かないな。

脱ごうかと思って入口付近を見回すと、靴置きにはジャンヌのブーツやパンプスなどがズラリと陳列されていた。俺の靴を置くスペースは無さそうだ。

「……ハイヒールはあまり無いんだな。あれは動きにくいからな。武偵として の心構えが出来てるよ」

とりあえず人の部屋は誉めておこうと思って、そんな事を言うと――

「違う。キライなのだ。私は背が高いから、ヒールでこれ以上高く見せたくな

い」

スーツケースを壁際に置きつつのジャンヌが、への字口になる。

「……意外だな。フランス人の女は、スラッとしたシルエットが理想じゃなかったのか？　シャネルのスーツなんかがビシッと似合う……」

「いつの時代の話をしてるのだ遠山（とおやま）。今は、理子（りこ）やアリアのように『カワイイ』姿がパリジェンヌの流行（モード）だ」

ジャンヌは暖房をつけながら、身長に関する話にプンプン。不機嫌（ふきげん）になる。いきなり会話の選択肢を間違えたらしい、俺なんだが……

別に、ジャンヌは言うほど高身長とは思わないけどなぁ。１６５、無いと思うぞ。

だが、それでも本人にとってはコンプレックスなのかもだな。前、女子寮の隠し部屋でメイド喫茶の制服を着てた時にもそんな事を言ってたし。

「……」

これ以上余計な事を言って怒らせないよう、俺はお口にチャックで室内の様子を眺める。

ジャンヌは読書家でもあるので、本棚にはフランス語の本が、デスクにはキ



ャンドルと読書用メガネがある。このリビングはシックなんだが……ベッドルームは、女子力が高いというか、少女っぽい。この辺はジャンヌの趣味の二面性を感じさせるな。

理子の好きそうなロココ調が入ってる寝室の化粧台（ドレッサー）には、メイク用品やアクセサリーが沢山載ってる。あまり整理整頓（せいとん）はされてない感じだ。

そして俺は見逃さなかったが、水晶やロザリオの置かれたガラス扉の棚には――『伊』という漢字を、アルファベットの『U』が囲むデザインの指輪があった。

これは多分、イ・ウーのスクールリングだ。

（元々は……ジャンヌは、イ・ウーの構成員。敵……だったんだよな）

ジャンヌの策略に陥れられながら、白雪（しらゆき）を守るため戦った頃を思い出していると……

「日本からヨーロッパに来ると、夜更かしをするような時差感覚（ジェットラグ）が生じる。コーヒーでも飲んで、目を覚ましておけ。私は慣れているから平気だがな」

キッチンから、ジャンヌが不意に声をかけてきた。

俺（おれ）は指輪を見なかったフリで、

「じゃあ……日本に帰る時は早起きするような感覚になるのか。そっちの方がキツそうだ。俺は早起きはニガテなんだよ」

テーブルにつきつつ、雑談でごまかすと――

「では帰らなければいい」

ジャンヌは細めたアイスブルーの眼で俺をまっすぐ見て、そんな事を言ってくる。

「……？」

角砂糖をソーサーに添えたダブルのエスプレッソを受け取りつつ、俺は眉を寄せる。

帰らなければいい？　……どういう意味だろう。

冗談だとは思うが、分かりにくいんだよな。ジャンヌのジョークって。

「――フフッ。歓迎に一曲弾いてやろう」

そんな俺を横目に、ジャンヌは何やら嬉しそうな足取りで壁際のアップライトピアノを開け……ピアノチェアに掛けて、弾き始めた――『火刑台のジャンヌ・ダルク』を。

それは俺とジャンヌが武偵高で再会した日に、ジャンヌが弾いていた曲。



あの頃の、思い出の曲だ。

（なんだか……見透かされてたみたいだな。考えていた事を）

と、優雅なピアノの旋律を聞いていると……

……あれ？　なんだか、テンポがゆっくりになってきたぞ。

見ればジャンヌは……うつら……うつら。

慣れてるとか言ってたくせに、カクーンっ。

い、いきなり首を垂れて、寝ちゃったよ……！

初めて見たよ。ピアノ弾きながら寝る人。

「お、おいジャンヌ」

ぶっ倒れたらアレなので、背中を支えてやると……

「んあ」

ちょっとマヌケな声を出して、起きた。ジャンヌ。

だが、それはそれは眠そうな焦点の定まらない目をしてるよ。

「Voulez-vous... sortir pour prendre... le pepas...?」

「おい、日本語で喋ってくれよ」

「……食事……食事をしよう、遠山。もう少し起きているために、な」

俺に両脇を支えられて立たされたジャンヌは、フラフラとクローゼットに向かう。

食事……か。腹は減ってないが、機内食はヘンな時間に食べさせられたしな。美味くもなかったし。よし、食べ直すとするか。

気を取り直した俺はコーヒーを喉に流し込んで、ジャンヌの身支度を待つ。

するとジャンヌはセーラー服の上にコートとマフラーを引っ掛けて……ベッドルームに入り、片膝をつき、化粧台にあった香水瓶をスカートの内側へ弱めにプッシュしてる。

「何だそれ」

「ディヴィンヌ、ナンバー6。オ・ドゥ・レジェールだ」

「だから日本語にしてくれよ」

「オ・ドゥ・レジェールに日本語は無い。英語で言えばコロンだ。薄い香水だと思え」

こっちに来たジャンヌから、爽やかで女の子っぽい香りがして……

「なんで、そんなモノをつけるんだ」

少し赤くなってしまった俺は、クレーム気味に訊ねる。

するとジャンヌは引き上げたマフラーにちょっと可愛く下あごを埋めつつ、

「祖母の教えだ。彼女は70歳になっても、男性と会う時はこれをやっていた。『男は女にいつチャンスをくれるか分からない』と言ってな。フランス女とはそういうものなのだ」

上目遣いで、白い頬を少しだけ赤らめつつ謎な事を言う。

女からいいニオイがして、男が、チャンスを……？　何の話だ？　全く分からん。



1階の宝石箱みたいなアーケードから、シャンゼリゼ通りに出ると……

「遠山、チャンスだぞ」

ちょいちょい。ジャンヌが、小さなハンドバッグで俺の腕をつついてきた。

「チャンス？　何のだよ」

「私の荷物を持つチャンスだ」

「自分の物は自分で持て」

「教えてやろう。男女が2人で歩く時、女の荷物を持つのは男の義務であり名誉だ」

ぎゅむ。押しつけられた。ジャンヌの、洒落(しゃれ)たヤギ革のハンドバッグを。
なんだよ、全然重くないじゃねーか。マジで自分で持てよ。
とも思ったが、俺にこれを持たせたジャンヌは満足げに目を細めて横から見上げてくる。
そして、くいっ。ニコニコしたまま、腕組みしてきたぞ。
「な、なんだよ。よせよ」
「い、いいだろうこれぐらい。男と女が夜の通りを2人で歩いていて、よそよそしくしていたら逆に不自然だ」
俺は別に、自然とも不自然とも思わないが……
ジャンヌは意外と力がある。これを振りほどく元気は、眠気にやられた今の俺には無い。
ので、仕方なく腕を組ませたまま——正月のかなめの事を、ちょっと思い出しつつ……
夜のシャンゼリゼ通り、マロニエの並木の脇を歩いていく。
「あれがルイ・ヴィトン本店だ。フランスよりも日本で人気のある店だろう。向こうは、ルノーのショールーム。マクドナルドもあるぞ」



ジャンヌは地元とあって、張り切って俺(おれ)にあれこれ説明してくれる。
実際シャンゼリゼ通りは広く長く、ファッションに限らず世界中のブランドがあった。
アリアご愛用の何とかチャン・ディオールの本店も、角の向こうにあったぞ。
「何でもあるんだな」
俺がここを誉(ほ)めると、ジャンヌはまたどや顔。嬉(うれ)しそうに、横から俺を見上げてくる。
その、明るい表情は……
いつも割と張り詰めている印象のジャンヌとは、少し違う。
やっぱり自分の国だから、リラックスできてるんだろうな。
というか、こっちのジャンヌの方が——本当のジャンヌ、って気がするな。
なんとなく。
しかしこれは、個人的には困りものだ。
かわいいぞ。非常に。今のジャンヌは。そう意識すると気づかされるんだが、
組んでる腕の肘(ひじ)に時折当たってくる……意外なほど柔らかくて、上品なサイズ、完璧(かんぺき)な形状の……明らかに肉体の他の部位ではない……その、当たってる。当

たってるって！　俺の肘が、お前の胸に！　気づけよ、この天然女め……！

大通りには当然、観光客向けの派手なレストランが幾つもあったが――

「この辺で食べるのか？」

「ああいう騒がしい店は、私は好きではない」

訊ねる俺にそう答えたジャンヌは、もう少し通りを進んで角を曲がる。

通りは一本外しただけで急に静かになり、その一角に……

過度に装飾的ではなく、こぢんまりとした、品の良さそうなレストランがあった。

石の壁につけられた小さな銀の看板には、星のマークが4つある。

歩いている間にパリの夜も更けたとあって、閉店したところらしいが――

レストランと一体化している時代がかったホテルにジャンヌが入っていくと、

小ぶりなホールでメイドのお姉さんが飛び上がるほどビックリしてる。

そしてジャンヌと2、3言フランス語で話し……フロントの奥から、小柄で小太りの、金縁メガネ、ハの字ヒゲ、三つ揃えのスーツを着た初老の男を連れてきた。

このオシャレしたスーパーマリオみたいな男が、ここの支配人らしい。

慌てた感じで出てきた彼は、ジャンヌを発見して「O mon dieu...!」と目



を見開く。

そして、ちょっとチャーミングな見た目とは裏腹に――

――スッ。

ハッとしてしまうほど威儀正しく、ジャンヌの前から2歩退いた所で跪いた。

片手を胸にあて、目に涙を浮かべてジャンヌを見上げ、何やら歓迎の辞を述べている。

フランスの文化なんか何一つ分からない俺だが、この光景の意味は一目で分かった。

見た目はともかく、この支配人は日本でいうところの武家――名のある騎士か、兵士の末裔なのだ。

彼に立ったまま堂々と挨拶するジャンヌの態度から見て、彼は初代ジャンヌ・ダルクの従僕の子孫なのだろう。

彼女への敬意が……現代にも、密かに伝わっているんだな。

立ち上がった支配人は、何やら俺について『ムシュウ・トオヤマ』『サムライ』ぐらいしか分からない会話をフランス語でジャンヌとしてから……にこぉ

ーっ。

満面の笑顔になって、俺たちをホテル内部からレストランへ案内してくれた。

白いテーブルクロスと銀の食器が並べられた、暖かい席につき――俺たちは、

「お前のコネで入れてもらえたみたいだが……ちゃんとしたレストランだな。大丈夫かな。俺、テーブルマナーとか分からないんだが」

「気にするな。お前の国のマナーに従い、堂々と食べろ。私たちフランス人は、歴史ある文化には敬意を持って接する。お前の食器には、箸も用意するよう言ってある」

運ばれてきた籠入りのパンを前に、そんな会話をする。

そこに支配人がいきなりワインを運んできて、慣れた手つきで開ける。ジャンヌがその香りを確かめ、キリッと何か告げてから注がせた。

俺にもワインが振る舞われるが……まあ、口を付けるだけにしとこう。香港の二の舞はゴメンだからな。

「コースは軽いものを頼んである」

割としっかり白ワインを味わいつつ、ジャンヌはそんな事を言い――



俺たちは、崩したトマト・チーズ・キャビアをコイン形に盛りつけた前菜、サーモン・菠薐草・アスパラガスのクリームソースがけの魚料理をいただいていく。箸は鉄箸だったが、マジで使わせてもらえた。これはありがたかったよ。もらったバターナイフみたいな魚用ナイフが使いにくかったしな。

次に出てきた、ドーム形の肉料理は……なんの肉だろう？　食べた事のない味だな。

「ジャンヌ、これは何だ？」

「ウサギ肉の香草包み焼きだ」

「ウサギ……」

ちょっと食べるのが初めてだったので俺が考え込んでいると、

「お前はウサギを知らないのか。こういう生き物だ」

口元をナプキンで拭いたジャンヌは、頭上に手を立ててウサギのミミを表現する。

か、可愛いな。俺が知らないと思って、真顔でやってるけど。

「……戦役の件だが。これからどうする」

食事も粗方終わった頃、俺がそう訊ねると……
冷たいシャーベットをウットリ味わっていた銀氷の魔女さんは、
「まずは師団の仲間を呼ぶ。メーヤだ」
少し懐かしい人名を出してきた。
メーヤ――あのアルコールをやたら飲む、バチカンのお姉さんか。性格はぽわんぽわんしてるけど、キレると巨大な剣を振り回して手がつけられなくなる人だ。
美人で胸がドでかく、しかも年上という、個人的には悩ましい味方……なんだよな。
「メーヤは『祝光の聖女』。敵には『祝光の魔女』と呼ばれているがな。お前は超能力に疎いから端折って説明するが、とにかく、『運がいい』女戦上なのだ」
すげえ端折ったな。あの人の戦術の傾向とか、もうちょっと説明してくれよ。
という顔を俺がすると、ジャンヌは――
「運とは魔学上、最古から研究され……最新の研究も続いている、メジャーな分野の1つ。そして、最も危険な分野でもある」



「危険？」
「運には平衡性がある。つまり運とは『良い時が来れば、悪い時も来る』もの。メーヤはカトリックの祝福術の粋を集めてとにかく武運に恵まれるような幸運強化を受けているが、その分、別の何らかの運に恵まれなくなっているハズだ」
うーん。半分ぐらい理解できたが……
つまり戦闘に関して運が良くなる代わりに、別の運が悪くなってる人って事か。
確かに、危険かもな。戦いってのは、単純に戦闘行為だけじゃないからな。
「とはいえ幸運・不運はどちらも絶対ではない。運とは確率論。確率を99%まで高めても、1%の不運に見舞われるかもしれない。逆もまたしかりだ」
なるほどね。
まあその辺、気をつけて付き合うか。メーヤさんとは。
これ以上魔学とやらの話を聞いても分からなくなりそうだったので、
「カツェたちはどこにいるんだろうな。魔女連隊のアジトとかは判明してるのか」
俺は話を味方から敵の話題、香港で突っかけてきたカツェの件に変える。

「拠点は幾つか見つかっているのだが、どれも仮住まいだ。いま師団が探しているのは、魔女連隊らの『兵器庫』――兵器倉庫でな」

「兵器庫……？　どんな兵器を持ってるんだ、ヤツらは」

「銃砲はもちろん、戦車や巡航ミサイルまで持ってるらしい」

「眉唾だな。そんな物まであるなら、兵器庫なんてすぐ分かりそうなもんじゃねーか」

「それが分からないのだ。どこか意外な所に隠しているのだ、きっと」

意外な所……？　海とかかな。イ・ウーみたいに。

そこまでデカいUボートは存在しなかったハズだけど。

「カツェたちが厄介なのは、魔女連隊を名乗りつつも、魔術に頼り切らず……そういった近代兵器を巧みに併用してくる点なのだ。その兵器庫を発見・強襲できれば、欧州戦線はだいぶ楽になるだろう」

確かに……俺の知る限り、魔術ってのはかなり不安定なものみたいだしな。

そこに依存しすぎず、『魔術』＋『兵器』のバランスを取ってるってワケか。

一方のバチカンは、聞くからに魔術一辺倒。リバティー・メイソンはどうか知らんが、ワトソンを見てると通常武器での隠密戦に偏ってそうな組織だしな。

……どうりで欧州戦線が苦戦するワケだぜ。手を焼きそうだ――魔女連隊には。



支払いを固辞する支配人に、押しつけるようにして金を支払ったジャンヌと俺は……

店を出てから、水の凍りそうな冷え込みになったシャンゼリゼの裏通りで話す。

「リバティー・メイソン経由の情報だが、カツェは今パリにいるという話もある。普段はストラスブールに住んでいるのが、戦役ではない何らかの理由でパリに来たとか……」

「戦役以外の理由？　何だろうな。だが――1人でいるところに出くわしたら、逮捕するチャンスかもな」

「パリは広い。偶然見つけられる事はないだろうが、こっちにはリバティー・メイソンの監視力がある。その他にも、見つけられるあては無くはない。すぐ強襲するかどうかは、見つけた時に判断しよう」

リバティー・メイソンはヨーロッパ中にメンバーを持つ、有名な秘密結社だ。

その名前は俺ですら昔から知っていた。
会員になるには家柄や財力、特殊技能の有無が問われるので、その点は藍幇と異なるが——人数は多い。その力を借りれるとなると、ヨーロッパでは色々便利だろう。
俺たちは白い息を吐きつつ、それからしばらく黙って裏通りを歩くが……
「……あれ？　この道はどこに続いてるんだ？　まっすぐ家に帰るんじゃないのか？」
どうも反対方向に歩いているようだったので、ジャンヌに訊ねる。
するとジャンヌは、きゅ。また俺の腕に腕を絡めてきて、
「今夜は何だか楽しいのだ。もう少し行こう、遠山」
戦役の話をしてた時のクールな態度をふと和らげ、またあの少女みたいな笑顔を見せた。
……ワインが回ってきたのかな。言うほど、量は呑んでなかったっぽいが。
言われるまま歩いていくと、裏道は大通りと合流し——
「……っ……」
——凱旋門。



かのナポレオン・ボナパルトの戦勝を記念して建造された、エトワール凱旋門……パリのランドマークが見えた。
ライトアップされて乳白色に輝く高さ50mの門は、イメージしていたよりずっと雄大だ。
「全ての道は凱旋門に通じているのだよ、遠山」
俺が驚いているのを見て、ジャンヌはまた嬉しそうにそんな事を言ってきた。
そしてマフラーを整え、
「あれをやってみよう、遠山」
凱旋門を囲む道のこっち側にあった、直径12mほどの真っ白い池みたいなものを指した。
それは——広い歩道の一部を利用して作られた、小さなスケート場。
単に外周を仕切って水を張り、冬の寒さを利用して凍らせただけの簡易なものだ。
安全性には問題がありそうだが、そんな事は気にせず子どもたちが楽しげに滑っている。
大人や観光客は尻込みして、見ているだけだが……ジャンヌは俺をそこに連

れていき、係のお姉さんに何ユーロかを渡してしまう。
「お、おい」
「このリンクは夜間限りだ。滑るぞ」
それこそ少女のように楽しげに目を細め、ジャンヌはスケート靴を手に笑いかけてくる。
流されて、靴をはきかえて銀盤に上がると……
「……おっと」
俺はスケートなんか久しぶりだったので、少しよろけてしまう。
「ははっ」
先にリンクに入っていたジャンヌが、手を取ってバランスを取らせてくれる。
かわいらしいパリの子どもたちが滑るのに混ざり、俺とジャンヌは白い息を吐いて——小ぶりなリンクを丸く、あるいはS字に滑る。何度か、転ばないよう手を取り合いながら。
……けっこう、楽しいな。
子どもにぶつかりそうになって緊急停止した俺が、自然と笑顔になってしまい。



「危なかった」
「フフッ」
その俺と、笑顔を交わしたジャンヌは——
俺から少し離れたところまで滑っていき、くるり。
優美にターンしてから止まり、片足のブレードのつま先で氷を小さく突いた。
そして演舞を終えたスケート選手がやるように、優雅に手を回してお辞儀してから——
その手で、星空に浮かぶ白い凱旋門を示した。
「Bienvenue en France.」
銀盤の上の、銀氷の魔女。
彫刻のようなパリ。天使のように美しいジャンヌ。
そのジャンヌを彩るように、ダイヤモンドダストのように——パリに、雪が降り始めた。
ははっ、どうりで寒いワケだぜ。明日は、積もってるかもな。
小雪の降る中ジャンヌの部屋に戻り、俺は寝る前に洗面所兼用のバスルーム

を借りた。
　カーテンで仕切ったバスタブの上で体を洗い、熱いシャワーを浴びてから…
…
（これ……どうやって湯船に浸かるんだ？）
　バスタブに湯を張りつつ、俺は腕組みしてしまう。
　武偵高の寮にあるユニットバスより長いんだが、浅い。水深が膝ぐらいまでしかないぞ。その分すぐに湯は張れて、湯冷めはしなかったんだが……こうやって、入るのかな……？
　と、俺は棺桶に入るみたいに寝っころがって全身を湯に埋めてみる。
　うーん。肩まで湯に入れたのはいいが、そうすると膝を立たせざるを得ないな。
　こうじゃない感じがする。だがこうしないと入れん。謎だ。バスタブ。
「……」
　だが……湯に入れた安心感もあり、うつら、うつら、うつら、していると……
……がちゃ……
「――遠山。どこへ消えた？」



　ジャンヌの声……！
　目が醒める。いかん、つい寝ちまってた。
　ていうか、ジャンヌがバスルームに入ってきてるっぽいぞ。カーテンの向こうなんで、見えんが。
　そのカーテンに俺の影が無かったのを訝しんだらしい、ジャンヌは――しゃあ。
「……ッ！」
　あ、開けやがった！　カーテンを！
　当時もジャンヌが絡んでいたんだが、来たぞ白雪以来――
　約8ヶ月ぶり、通常は男女が逆で起きるタイプのハプニング！
　俺は男なので、裸を見られてキャーと悲鳴を上げこそしなかったが……慌てて上半身を起こし、その、何というか、体の要所を隠す。
　一方のジャンヌだが、白雪とは異なり――
「フフッ」
　くすくす。笑ってる。慌てる俺を見て、面白そうに。
「な……何だよッ。笑うな。日本人はフロに入る時、湯船に浸かるもんなんだ

よッ」

「フランスでは古くから言われているぞ。湯に浸かると、寿命が縮むと」

「日本人の平均寿命は世界最長だッ。ていうかそれ、カーテン、閉じろよッ！」

とある理由により手が使えないので、真っ赤になった俺が慌てて命令すると

……

「バスルームで裸になるのは、裸になる必然性があるからだ。恥ずかしい事ではないぞ」

出、出たー！　欧米人の合理的論理。だがそりゃこっちにしてみりゃ非合理的だ。

「――それでも恥ずかしいんだよっ！」

もう俺は破れかぶれで、隠すところも隠さずカーテンを閉めるのだった。

その後ジャンヌはバスルームからほっそいパンツいっちょで出てきて室内を歩くという暴挙に出ている。やっぱり、入浴の前後に裸を見られる事には抵抗が無いようだ。

中身が透けて見える極薄レース布の衝撃を、鋼の意志の力で乗り切った俺は



ともあれ、ようやく……寝れそうだぜ。

（ったく。ジャンヌめ。こっちがヒスったら、ヒドイ目に遭うのはお前なんだぞ……？）

なお、ジャンヌの部屋は1人暮らし用。

だから予想できた、というか最初に目視で確認してたんだが……ベッドが1つしかない。

なので、俺は床で寝よう。リビングのソファは寝るには小さいからな。

ソーッと寝室を覗き、ジャンヌが既にパジャマを着ているのを確認してから

……

「じゃあ、おやすみ。長い1日だったな、文字通り。俺はそこの床で寝るよ」

そう声を掛けると……

髪を解いて銀髪ロングになったジャンヌは、

「？」

ベッドに俯せで聞いていたオルゴールを止めて、フシギそうに振り向いた。

「それでは疲れが取れないだろう、遠山。ベッドで寝ろ」

「だって、ベッドはそこしかないだろ。お前はどうするんだよ」
「私もここで寝る。2人までなら入れるだろう」
ジャンヌ……お前なぁ。自分の言ってる事の意味が分かってないのか？
俺たちは年端もいかない子どもじゃないんだ。男と女で、一緒のベッドに寝られるか。
とも思ったが……ジャンヌが、ポンポン、と叩いて示したクリーム色のベッドは……
すごく柔らかくて、寝心地が良さそうだ。
まあ……天然のジャンヌは多分、分かってないんだろう。男女が一緒のベッドに入るという事の意味が。
であれば、寮の二段ベッドに理子が侵入してきた時みたいな流れにはならないか。
（それに、土足で上がる床に寝るのもアレだしな……）
疲れ果てていた俺は、もう何も言わず——
ベッドに歩み寄り、座る。うわぁ、雲みたいにフカフカだ。
ぱちん。ジャンヌがベッドサイドのスイッチで灯りを消したので、俺はジャ



ンヌに背を向ける形で横になり……うっ。やっぱり、ジャンヌのニオイがする。
な。このベッド。いい香りなんだが、女のニオイだと思うとしんどい。
だが、これだけ眠ければ問答無用で寝れるさ。
と、毛布を引っぱり寄せると……ゴソ、ゴソ……
「……」
何やら背後で、ジャンヌが動いてる。上半身を起こしてるみたいだ。
しゅる、しゅる、と布ずれの音もするが——まあいいや。眠くて何も考えられん。
と、俺が寝に入ったところで、ジャンヌも改めて横になった。
おやすみ、ジャンヌ。
……
……おやすんで下さいよ……！
このベッドよりも柔らかく、崩れ落ちないのが不思議なほどに柔らかな——
胸の感触が、俺の背中に密着してきた。今、背後から、抱きつかれてる。ジャンヌに！

「お、おいジャンヌっ！」
慌てて掴んだジャンヌの腕は、素肌。さっき着ていたハズのパジャマはどこへやらだ。
脱ぎやがったのか。今さっき。
俺は起き上がろうとするが、ジャンヌが抱きついてるのでそうもいかない。
後ろに手を回すと、スベスベした凹みに手が触れる。これはジャンヌの腰のくびれだ。
レースの下着は、つけたままのようだが――
「なんでこれしか着てないんだよッ！」
「シャネルの19番も着ている」
香水は着るもんじゃねーだろ！
徒手格闘技でバックマウントを取られた時のセオリーを応用し、俺はジャンヌの手首を掴んで腕を外しにかかったが――読まれていた。ジャンヌのしなやかな、少し冷たい指が俺の手のひらを握ってくる。そして戯れるように、闇の中で指を絡めてきた。
俺の手の甲に手のひらを被せる、変則的な恋人繋ぎで手を繋いだジャンヌが



「フフッ」
――大人っぽく、俺の後ろ襟の辺りで笑ってる。
追い詰めた少年をからかう、お姉さんのような態度――に、イラッときて――
俺は、力尽くで動こうとする。
だが剣術の心得があるジャンヌは、組み討ちのテクニックも高い。
こっちの力を利用して腕と肩を回させ、どさっ。
俺を――ベッドの中央に、仰向けにさせてしまった。
ジャンヌは軍馬に乗る騎上のような体勢で、俺に跨っている。馬こと俺は仰向けだが。
窓からの月明かりに、ジャンヌの銀髪と雪肌が妖しく浮かび上がる。
精緻なレース地の下着は、肌が透けて見えるほど薄いスノーホワイト。
銀糸で編んだようなそれに飾られた、光り輝くように白い両胸。大きすぎず小さすぎず、理想的な半球形をしている。くびれた腰は完璧な造形美を誇っていて、縦長に少し窪んだオヘソは小さくて可憐。スリムだが華奢な印象はない、

鈴羊のような四肢。

それらの全てが、今、世界の誰よりも俺の近くにある。

ここまでの流れが、ジャンヌの計算だったのかどうかはともかく……俺を見下ろす瞳は、さっき俺が『分かってないんだろう』と思っていた事を『分かっている』と宣言していた。

ドクンッ、ドクンッ——と、俺の心臓が止めどなく暴れ——

——なっちまったな。だから美人は困る。

この血の巡り。体の中心・中央に太陽が生じたような、熱い滾り。

欧州初公開、ヒステリアモードだ。

「——怯えているな？　遠山」

俺の胸に少し冷たい手をあてて、ジャンヌが囁いてくる。

「……安心しろ。私も怯えている。男とこういうのは、初めてだからな。だが……お前は経験豊富だと噂で聞いている。だから、途中からはお前に任せよう」

ヒステリアモードの、頭で——ああ、そうだったのか——と。

ようやく、理解できた。ジャンヌの考えが。

そして、これが過ちだって事も。



俺は下から手を伸ばし、煌めく銀髪に指を分け入れる。

そして……形のいいジャンヌの耳に手を触れる。そこも、熱くはなっていなかった。

それで確かめられたよ、ジャンヌ。君は勇敢だ。でも——

「説明不足だよ」

「男と女がこうなる事に、説明が必要なのか？」

煌びやかな街を2人でデートし、ロマンチックな食事を共にし、一つ屋根の下で身体を寄せ合う……今までの出来事は全て、ジャンヌが用意した男と女の階段。

俺は手を引かれるままに、それを登ってきてしまった。

でも……

ジャンヌは、納得ずくじゃないんだ。

俺に対する好意から、その最上段まで来たんじゃない。

ジャンヌはコンステラシオン。イ・ウー研鑽派残党。バスカービルじゃない。

仕切り上、今まで俺とは一線を引いた立場にいた。

それが——

自分の失敗のせいで、祖国フランスの前線に俺を巻き込んでしまった。結果的に。

それを、申しわけなく思っていたんだ。ずっと。

責任感の強いジャンヌは、自分が開けてしまったその穴を……

「……埋め合わせようとしてるんだね。こういう形で」

「そうだ。言わないようにしていたが、欧州では師団が劣勢。撤退戦の様相となっている。今度こそは、お前も私も死ぬ公算が大きい。そんな死地に来させた、その代償は払う」

ジャンヌの言う通りだ。俺も敢えて考えないようにしてきたが、ここは四面楚歌の地。

2人とも生きている夜は、今夜だけかもしれない。

「……分かった。じゃあ俺も、したい要求をさせてもらおう」

俺がそう言うと、ジャンヌは頷き――

黙って、その身体を俺と重なるようにしなだれさせてきた。

大人っぽいな、こういう仕草も。

と、俺は小さく苦笑してから……その背を、頭を、抱き留める。



「俺の要求は1つだけだ。ジャンヌ。もう――強がらないでくれ」

その言葉に、ジャンヌは――

少し顔を上げて、鼻と鼻が触れ合うような距離から俺の顔を覗きこんできた。

銀氷の精霊が住まう湖のような、美しいアイスブルーの瞳で。

「いや、もう1つあった。女の子は体を冷やしちゃダメだよ」

と、俺はジャンヌが退けていたダウンの掛け布団を2人の上に引き寄せる。

ジャンヌは、とても誇り高い子だ。

だからしっかり者のように見せているが、それは演じているだけ。

本当はけっこう抜けている、ちょっと天然の……ただの、女の子でもあるんだ。

その子が――騎上の末裔として、血で血を洗うアンダーグラウンドの世界に生きている。

それは……重荷、なのだろう。どんなに気を張って生きていようと。

「ジャンヌ。君がもし重荷を背負う事に疲れたなら……ためらわず、俺に分けていいよ」

今度は俺からジャンヌの方を向いて、耳元にそう告げると……

ジャンヌは碧い瞳を少し潤ませて、俺を見つめ返してきた。
その目は初めてはっきり見せた、ジャンヌのか弱い視線。本当の、ジャンヌ

――

「――『女の荷物を持つのは男の義務であり名誉』、なんだろう？」
さっき自分が言ったそのセリフを俺に返された、ジャンヌは……
「……遠、山……」
その碧い瞳から、サファイアのような涙を一滴こぼした。
泣き顔を見られまいとしたのか、ジャンヌは顔を下げ……おでこを俺の胸に押しつけるようにして、そのまま――静かに、泣いている。どこか、安堵したかのように。
「……遠山。お願いがあるのだ」
「お願い？」
「お前は2つも要求しただろう。私にもさせろ」
と、ジャンヌは少し強く抱きついてくる。甘えるように。
そして、視線を逸らしたまま――
「……呼んで欲しい。私は小さな頃から、あまり女扱いされてこなかったから」



「何て呼んで欲しいんだい」
「『お嬢さん』、と……」
――ああ。
ごめんよ、ジャンヌ。
君は俺の知っている誰よりもミステリアスで、読み切れないところがあって
だから、ヒステリアモードなのに見落としてしまっていた。
君が8ヶ月も隠し持っていた、俺への想いを。

――

「よく覚えていたね」
「見くびるな。私は記憶力がいいのだ」
「ははっ。『どこまでも賢いお嬢さんだ』」
「……！」
今の、俺のセリフは――去年の5月、俺とジャンヌが戦ったあの地下倉庫でのセリフだ。
それを聞いたジャンヌは、きゅうん……と、胸を押さえるような仕草をして
喜んでる。

ジャンヌはあの時、恥ずかしがって怯んでたけど……嬉しくも、あったんだな。戦いの中で生きてきた男勝りの彼女にとって、『お嬢さん』扱いされるという経験は。

そう。君はお嬢さん。女だ。

君もさっき似たような事を言ったけど、女を男が守って戦うのに説明なんかいらない。

ここに俺が来たことだって、君が責任を感じる事はないんだ。

だから俺たちはもう、何も喋らず――

抱き合ったまま、静かに、眠りに落ちていった。

……チュン、チュン……

パリにもいるらしい、スズメの鳴き声で目を覚ますと……

ジャンヌは、ベッドにはいなかった。

ヒステリアモードの解けた、白面の頭で――

昨晩ジャンヌをいなした際に発した、恥ずかしいセリフの数々を思い出す。

死にてえ。

ううう。自己嫌悪だ。何が『女の子は体を冷やしちゃダメだよ（ハート）』だよ。バカはカゼひかねーんだよ。カゼを一切ひかないバスカービルの女子どもが生きた証拠だ。

鬱々とした気分で着替え、リビングに入ると……

朝日の差し込む窓際で、ジャンヌが――ヒュンッ。ヒュラッ。

舞うように、銘剣デュランダルを振っていた。

実戦的ではない『剣舞』だが、あれは手に剣重を、視覚に刃渡りを忘れさせないようにするレッキとした騎士の訓練。日本の剣道でいえば型のようなもので、達人ほど疎かにはしない日々の鍛錬だ。俺は滅多にやらないけどね。

「おはよう、遠山」

振り向いたジャンヌは、白いブラウスとグリーンのチェックスカート――ちょっと日本の女子高生の制服っぽい、私服を着ている。

武偵高のセーラー服とウェイトレスのコスプレぐらいしか見たことなかったから、新鮮だな。ジャンヌの私服姿。髪の結い上げ方も少し変えてて、カワイ



イ。

「朝から訓練か。偉いな」

「好きなのだ。剣の練習が」

昨夜の事は敢えて無かった事にしてる雰囲気で、お互い話してはみたんだが……

「……」

「……」

あー……ダメだな。2人とも、微妙にぎこちない。そのぎこちなさで、お互いが昨夜のあれをハッキリ覚えてると再確認しちまったような気恥ずかしさもある。

とはいえ、蒸し返すような態度はナシだ。危険な流れを再発させてはならない。

昨晩のあれは早く忘れて、引き続き普通に接するよう努めよう。

という俺の意志が通じたのか、ジャンヌは剣をヒュルッと回して鞘に収め――

「――剣は騎士の誇りだからな。武士の刀だってそうだろう？」

色気の皆無な話を繋いでくれる。
「そうだな。刀は武士の魂って……言うからな」
俺の歯切れが途中で悪くなったのは、スクラマさんを『矛盾』でやっちゃった事を思い出したからだ。人生、忘れたい事っていっぱいあるなあ。
顔を洗いにバスルームへ入ると、洗濯乾燥機の中で……ジャンヌの肌着と俺のシャツが組んずほぐれつしていた。洗濯してくれたのはありがたいが、ちょっと恥ずかしいなコレ。
「朝食もあるぞ。朝市でいろいろ買ってきた」
バスルームの扉の脇からヒョイと顔を出したジャンヌが、笑いかけてくる。
「悪いな、食わせてもらって」
新婚夫婦みたいで気まずいムードの中、俺がリビングのテーブルにつくと……ガリガリ。
ジャンヌはノコギリみたいなパン切りナイフで、細長いフランスパンを切る。
「案ずるな。バゲットは安い。一定以上の価格にしてはならない法律があるのだ。貧しい者が飢えないためにな」
「へー。フランス流の生活保護みたいなもんか」



そんな会話をしつつ、パンにレタスやミートパテを挟んだサンドイッチを食べて、熱いコーヒーでしっかり目を覚ます。
そのコーヒーを手にジャンヌと2人、寒いバルコニーに出ると……
もう降ってはいなかったが、外には昨晩の雪が少し積もっていた。
「遠山、お前は優しいな」
――ジャンヌが、苦笑いを浮かべてそんな事を言ってくる。
意志、通じてなかったみたいだな。復習してきたぞ、昨日の夜の事。
「……そうでもないぞ。際どいところだった」
「じゃあ今夜はどうなるか分からないな。私も覚悟しておこう」
からかうように予習っぽい事も言うので、俺はとにかく話題を逸らそうと――

ツッコミ所を探し、周囲を見回す。
すると、ジャンヌの白金みたいな銀髪が朝日にキラキラしていたので……
「髪。キレイだな」
見たままを言う。ここでうまくシャンプーの話とかにシフトしようと企んでいたのだが、対するジャンヌは、わしゃ。手で自分の髪を押さえて、かぁ……

かぁあぁぁ。

……何だ？　赤くなったぞ？　白人特有の、分かりやすい赤面で。

「こ、このタイミングで予想外の所を誉めるか。大したテクニックだな。お前はやはり、天性の女ったらしかもしれんな」

「な、何でそうなるんだよっ。俺は、見て思った通りを言っただけだ」

「それが……そうだというのだっ」

コーヒーカップを青銅のテーブルに置いたジャンヌは、バルコニーの手すりに積もっていた僅かな雪を掻き集めて……ぺし。

イタズラっぽい笑顔で、俺に雪玉をぶつけてきたぞ。

「お前っ……冷てえなッ」

俺もテーブルから雪を取り、小手返し一手でミニ雪玉をすぐ作って投げつける。

ひょい。ジャンヌはそれを避けて、

「ははっ」

すでに作っていた2弾目を俺の頭に投げてきた。痛っ！　固いぞ！　お前これ、超能力使ってるだろ！



それから、俺とジャンヌは……狭いバルコニーで、プチ雪合戦になる。

ていうか、2人で雪合戦って。銀氷の魔女とタイマンで。何やってんだろうね、俺。

でも……楽しいな。ジャンヌって、こんなに楽しいヤツだったんだな。意外性があって、一緒にいて飽きない相手だ。普段のクールさと、こういう無邪気さのギャップも面白いし。

天然も――捨てたもんじゃないな。一緒に過ごしてみて、初めて知ったよ。

その夜、7時過ぎ……

「――メーヤと連絡が取れた。ガルニエ宮で会うぞ。ついてこい」

クローゼットから藍色のドレスを出しつつ、ジャンヌが告げてきた。

「ガルニエ……オペラ座の事か？」

そこを携帯で調べながら俺が聞くと、

「オペラ座は歌劇場の総称だ。ガルニエ宮はガルニエ宮だ。いいからお前も着替えろ」

ジャンヌは俺に、保存用のビニールに包まれた白いタキシードを渡してくる。

「タキシード……か」
「違う。スモーキングだ」
いちいち俺のマチガイを指摘してくるジャンヌだが……
なんで、こんな服を持ってるんだろうな？
リビングで合わせてみるとちゃんと着れたが、サイズは少し大きめだ。
そこも少し気になる。このサイズだと、ジャンヌが男装するのにも使えないだろう。
（多分、誰かの服なんだが……）
寝室の方を見ると、ガルニエ宮――宮殿に行くとあって、ジャンヌは化粧に勤しんでる。
イヤリングを付ける手つきも忙しそうだし、まあ、細かいことはおいとくか。
そこを無粋な話でジャマするのもアレだしな。
と、そのお下がりらしいタキシードをきちんと着ると……
なかなか、センスのいい服だな。オシャレに疎い俺にも、粋なことが分かる。
ややもすると、黒のタキシードは滑稽に見えてしまうものだが――そこを、あえての白。



これはカッコイイぞ。女受けはどうか知らんが、男受けのよさそうな服だ。
タイトなドレスを着付けたジャンヌが、
「これはさっき下のアンティーク・ガルリで買ってきた。お前用だ」
と、俺に――飾りのない、鼻から上だけを隠す白仮面を投げ渡してくる。
歌劇『オペラ座の怪人』で、劇場に潜む怪人が付けていたような仮面だ。
「こんな物を付けなきゃいけないのか？」
「そうだ。仮面舞踏会だからな」
着替えとメイクを終え、リビングに出てきたジャンヌは――アリアが載ったのとはまた別の、大人向けファッション誌の表紙を飾れそうなエレガントさを放っていた。
美人は何を着ても美人だが、装いが整うと一分の隙も無くなるな。
「せっかく理子がくれたからな。これを……こうだ」
と、ジャンヌは目の周りを大きく覆うネコの顔を模した仮面と、出国時に理子がくれたネコミミを併せて着用してる。ネコジャンヌ、『ニャンニュ（理子命名）』の完成だな。
俺のネクタイを直してくれつつ、ジャンヌが……

「私たちもそうだが、メーヤにも尾行がいる可能性がニャくはニャい。それを一気に撒くのが、仮面舞踏会ニャのだ」

「ん……えーっとだな……」

「顔を隠して味方同上の接触・合流を敵から見えニャいようにし、コッソリと車で出る。これは古くはブルボン朝の頃から、冷戦時代のスパイにも使われていた手法ニャのだ」

「えっと。なんで仮面舞踏会なのかは分かったから。ネコ喋りはせんでいいから」

「ニャンニャンしなくていいのか？　私は気に入っていたのだがな」

ちょっと拗ねたニャンニュが、俺の胸をネコ手でチョイチョイ触ってくる中……

俺は少し納得した気分で、この仮面をつける。

なるほど。仮面舞踏会ってのは、コスプレ大会みたいな催しかと思ってたが……正体を隠して、人に密会するためのものだったんだな。1つ学んだよ。

オペラ座、ガルニエ宮は――



昨日見た凱旋門より遥かに大きく豪壮な、白亜の、まさに宮殿だった。

ネオ・バロック……とかいう様式らしいが、デコレーションケーキが巨大化したようなたたずまいだ。

屋上には芸術を司る黄金の神像が立っていて、外壁にはビッシリと彫刻が為されている。飾りのない場所を見つけるのが難しいほどだよ。フランスに侘び寂びの文化は無いんだな。

昨日のホテルで使ったようなコネでジャンヌが呼んだリムジンから、2人で降り――

なるほど秘密の出入り口っぽい、側面の小さな鉄扉から宮殿の地下1階に入る。

普段は観光地にされているらしいが、今日はこの仮面舞踏会があるとあって貸し切り。

時代がかった内装がされ、狭く区切られた薄暗い内部には……

（……うさんくさいのが勢揃いだな）

みんな正装してて見てくれは立派だが、怪しいムードを漂わせた連中がゾロゾロいる。

それも全員が仮面を付けてるんだから、これでもかってぐらいの不審さだ。
まあ、俺とジャンヌもその一部なんだけどな。
舞踏会と銘打っちゃいるが、踊ってるのはいない。清々しいほどの密会・密談空間だ。
ひときわ華やかなドレスを着た女は、立ち振る舞いから見て芸能人。恋人との逢瀬すら自由にさせてもらえないらしく、スポーツ選手と思われる男と楽しげに喋ってるよ。
火薬のニオイを消しきれてない日焼けした男は、多分、コルシカ辺りから出張してきたマフィアだろう。何やら商談してるみたいだが、麻薬関係かな。
他にも……IT企業の関係者、政治家、軍人、水商売の女……いるねー。っぽいのが。
そしてこの場に流れる、ある種の無礼講ムード。
どんなにアンダーグラウンドな話でも、勝手にしやがれって感じだ。
日本で言えば、料亭でのお偉方の密談——それを、みんなで集まって大々的にやってる。そういう融通が一定程度、暗黙の内に許容されてるんだな。フランスの社会では。



そう考えると、個人的にも割と気楽で居心地のいい場所かもしれない。仮面舞踏会。
「——ミャォウ」
さっきやめろって言ったのに、ジャンヌがネコの鳴きまねをして……
俺に、ウマのヌイグルミを見せてきた。
「何だそれ」
「猫が馬を持つという、愉快な目印だ。メーヤ側は、犬が牛を持ってるらしい」
「ちっとも愉快じゃないが……要は『犬の仮面を被って牛のヌイグルミを持ってる女』を捜せってことか」
「少し手分けして捜そう。思ったより人が多いからな。5分後にまたここで落ち合うぞ」
と、ジャンヌは——あまり好きではないと言っていたハイヒールで、賑わっている丸い小ホールへ進んでいく。
じゃあ、俺は……1階へ行ってみよう。と、細い階段を上がると——
小型車ほどもありそうなクリスタル細工のシャンデリアに照らされた、全段白大理石の、それは見事な大階段が見えてきた。

すげえな。五層馬蹄型だ。あんなもの、お伽話の絵本でしか見た事ないよ。

それ自体が会話の場所になっている階段を、呆然と眺めていると――

「おう、ごめんよ」

俺はジャマな所に立っていたらしく、学者っぽい酔客にぶつかられた。

その時、彼の仮面が……かちん。俺のタキシードの胸ポケットに当たって音を立てる。

「――？」

胸ポケットに、何か金属物が入ってる。ジャンヌが俺に渡す前から入っていた物らしい。

武偵はこういう時、それが危険物かどうか確認する習慣があるので……出してみる、と……銀メッキのペンダントだ。中に写真を入れられるタイプの。

「……」

これは、この服の前の持ち主が入れ忘れていった物だろう。

白大理石の階段を上がりながら、俺は少し考えて……

ペンダントを、開けてみる。

すると中には、イ・ウー入学前と思われる14歳頃のジャンヌと――3つほど



年上の白人男性が、白馬に2人乗りしている小さな写真が収められていた。

写真の2人は……幸せそうだ。心の底から。

男は目を見張るほどの美形で、それこそ俳優顔負けって感じのイケメンだ。

……多分、昔の恋人だな。

見ちゃいけなかった。なぜか気になってしまって、見てしまったけど。

（ヤボな事……しちまったな）

武偵は職業柄、人の個人的な過去を探る能力がある。実際に探る事も少なくないから、それが探られた側にとってどれだけ不愉快な事かも知っている。

だから、特に武偵同上では――敵対でもしない限り、個人の過去のプライベートな事を詮索しないのがルールだ。

しかもこれは、異性に関わること。

いくら俺でも、それがデリケートな問題だという事ぐらいは分かってる。

それを……なんで俺は。

この何でもアリの、仮面舞踏会のムードに流されてしまったのかな。

見なかった事にしよう。この件は誰にも言わない。許せジャンヌ。

「……」

でも、あー……
なんだか、胸につかえが出来た感じだな。
割と居心地のよかった仮面舞踏会が、急に面白くなくなっちまった。
階段を上がった所は、年代物の絨毯が敷かれた小さなホールになっていて…
…
仮面の下からメーヤを目で捜していると、目に止まるものがあった。
バーカウンター。そこでカクテルグラスに次々と注がれていく、色とりどり
の酒だ。
（酒、か……）
香港では痛い目にあったが、ちょっと、いただいちゃおうかな。無料らしい
し。
カクテルは色水みたいで、シャンデリアの下でキラキラしてる。見てるだけ
でも楽しいぐらいだから、一杯つければ気も晴れるかもだ。フランスは16歳か
ら飲酒ＯＫの国だしな。
と、そこに歩み寄っていくと――
いまバーテンが量産した赤・青・黄色のカクテルを、左から右へ……



きゅっ。かちゃ。くぴっ。かちゃ。ちゅるる。かちゃ。
5杯、10杯と、次々に一気呑みしていく女がいるぞ。
な、なんだあいつ。酒が、わんこソバみたいだ。
あまりの飲みっぷりの良さに、ガヤガヤ。人も集まってきた。
ていうか……この人のドレス、オシリの辺りにコスプレっぽい犬の尻尾が…
…
女が牛のヌイグルミを持ってるか確認しようとした彼女の、小玉スイカほどもある
った時、
「ぷは！　おいしい！」
巨乳が振り回されて――ぼみゅん！　俺の顔面にフックを入れてきた。
ぶぅんっ！　観衆の方へターンしようと、俺が少し身を屈めて横に回
「っ……！」
その夢のような弾力にバウンドしてしまった俺は、床に尻もちをつく。
「……ん？　あら……あらあら？　トオヤマさん！　お久しぶりです！」
しゃがんで、鼻から上に犬の仮面をしたままこっちを覗きこんできたのは…
…

乳牛みたいな胸に牛のヌイグルミを挟んだ、やっぱりメーヤだ。
明夜（メーヤ）・ロマーノ。日伊ハーフ、18歳（さい）。
バチカン市国の祓魔師（エクソシスタ）で、ローマ武偵高（ぶていこう）では殲魔科（カノッサ）――東京武偵高でいうSSR研みたいな学科の5年生だ。かつてはカナの後輩でもあったらしい。
見た目はおっとりしてるが、宣戦会議（バンディーレ）では最初に師団（ディーン）入りを表明した武闘派のお姉さん。
以前からカツェ率いる魔女連隊（レギメント・ヘクセ）と互角の戦いを繰り広げてきてたり、昔ヒルダと戦って首を切り落とした事があるなど、強さも折り紙付きの人だ。
そしてジャンヌの説明によると、武運に恵まれる特殊能力を持った人らしい。
「ここ、中が複雑で困ってたんですけど……この辺にいたらトオヤマさんに会えるかなと思ったら、ホントにお会いできましたね。ああ、神よ感謝します」
ちゃっちゃっ、とメーヤは十字を切ってる。
確かに、すぐ会えたのも武運の1つって事かもだ。何にせよ、友軍と合流できたな。
緩（ゆる）やかにウェーブした金髪を揺らし、わんこメーヤは俺の手を引いて立たせてくれる。



「久しぶりですね」
一応先輩なので、敬語で喋（しゃべ）ると……
「あらあら。そんな他人行儀（たにんぎょうぎ）な。普通に、お友だちのように喋ってください」
仮面の中でも目立つ長い睫毛（まつげ）の目を細めて、メーヤはニコニコしてる。
「あ、ああ……分かったよ」
しかし……
メーヤの、血管が浮き出るような白肌。肩を丸々露出させ、胸元（むなもと）を大きく開けたドレス。内側に流れる腰から、むっちりと外側に張り出した臀部（でんぶ）。
色っぽいよな。この人。聖職者なのに。
「トオヤマさんは先月、藍幇（ランパン）を押さえたとか。一騎当千の超人戦士（レフエレンテ）、日本のサムライ――トオヤマさんが来てくださったのですから、欧州戦線も一気に盛り返せるハズです。さあ、眷属（けんぞく）――ちょっと人間に似た形をしてる不快害虫の駆除（くじょ）をがんばりましょー！」
メーヤは日本式に、えいえいおーの手つきをやった動きで……ごっすん！
ドレスの背から、どう入れてたのか分からん大剣を落っことしてるぞっ、床に。

よかったー、鞘に入ってて。この高そうな絨毯を傷つけてたら大変だったよ。
剣は……これも良かった、周囲の人々はコスプレの小道具だと思って笑ってくれてる。
（ていうか、相変わらず……敵の人間を害虫扱い……）
ま、まあいいか。味方には違いないんだし。
そして、俺は知っている。
この人が酒を呑んでいたという事は、魔力をしっかりチャージしていたという意味だ。
ジャンヌと俺の2人だった急造チームに、確かな戦闘力を持った仲間が増えたのは——素直に、良いことだろう。
と、落っことした剣を拾ってやろうとすると……な、何この剣っ。超重いんですけど。
デカいから重いだろうとは思ったが、見た目以上だ。劣化ウランでも挿してんのか。
その大剣を持ち、よろけた俺は……受け取ろうとしたメーヤに寄りかかってしまい……



——がらんっ。どさっ……！
剣をまた床に転がしつつ、メーヤを……
お、押し倒しちまった……！
そのまま何やら呼吸が出来なくなったと思ったら、か、顔の、仮面のない鼻から下が、メーヤのホルスタイン顔負けの胸元に埋まっちまってるぞッ。どうしてこうなった!?
「あら、まあ……！」
メーヤは両手をほっぺにあてて、何やら嬉しそうに微笑んでいるが……
これは理子語で言うところの、ラッキースケベとかいうシチュエーション。
これもまたメーヤの幸運効果か。いや違うだろッ。俺にとっちゃ降って湧いたヒステリアモード化の危機。アンラッキーの極みだッ……！　ひょっとすると、この人のもたらした不運か!?
ノリのいいフランス人たちは、そんな俺たちに指笛を吹いて囃してくる。
その騒ぎに——カツカツカツッ。
「遠山！　衆人環視の中で何をやっているのだっ！　……メーヤ？　お前、メーヤか？」

5分経っても戻らない俺を捜していたらしいネコミミ仮面のジャンヌが、ハイヒールを鳴らしてやってきてしまったらしい。ネコミミ形集音器で、ここを探知したらしい。

「はいい。そのお声はジャンヌさんですね？　ああ良かった、お会いできて」

「遠山に襲われたのか」

「あのその……急にトオヤマさんが胸に飛び込んでらしたので、私には何が何だか……」

ドレスの胸元を直しつつ、おとぼけメーヤはいまいちしっかり否定してくれない。

「ち、違うッ、メーヤの剣が――」

起き上がって弁解しようとした俺をスルーして、腕組みしたジャンヌは……

「この男は時々、急に女を襲う習性があるのだ。かつて東京で盗聴作業をしていた時にも、突然私を手込めにしようとした。それも、ヒルダに傷つけられて弱っていた私をな」

よ、よく覚えてるなージャンヌ……！

それは確か、ワトソンに拉致されかけたアリアの様子を中空知と聴音調査し



てた時――

ヒステリア・ベルセになった俺が、ジャンヌにやらかした一連の乱暴な動作の事だ。

「まあ、誰にでもなんですか？　それはそれで期待感の持てるお人ですね……！」

ワケの分からん事に、メーヤは目をキラキラさせて俺を見てくる。

あんた、何の期待をどう持ってんだよ。今のジャンヌの説明に。

まあ、乱入してきたジャンヌのお陰で、血流の危機は甘ヒス程度でやり過ごせたが――

そのジャンヌは……カツ、カツ。

ヒールを鳴らしてバーカウンターに寄りかかり、ドライマティーニなんかを頼んでる。

仮面の下の口は、完全にへの字。なんでか、怒ってるよ。

そりゃ……仲間と合流するなり失態を演じた俺に怒るのは分かるが、それだけじゃない怒り方って感じだぞ。

手にしたカクテルの煽り方も、流し込むみたいだったし。

「お、おいジャンヌ。ハッキリ言っとくが今のは完全に不幸な偶然だからなッ。

ていうか、何に対してそんなに怒ってるんだ。武偵がヘンな酒の飲み方をするな」

「……別に怒ってなどいない」

「怒ってるだろ。今も間が有ったし――」

「無い」

事実をねじ曲げてまで、ニャンニュは俺に反論。

そして、チラ、チラ。アイスブルーの瞳で、自分の胸元とメーヤの胸元を一瞬ずつ見た。

それから俺に――ぽむっ。

馬のヌイグルミを投げつけてきたぞ。歌劇でも見てるように。

オー……と、周囲のフランス人たちが面白そうに声を上げてる。

こいつらには理解できてるみたいだが、当事者の俺はまるで分からん。なんなのコレ。

皆さん説明してくださいよ。なんでジャンヌが怒ってるのか。できれば日本語で。



「な、なにすんだよッ。なんでこんな……」

「自分の胸に聞いてみろ。いや。お前の場合、聞いてもムダだろうな。ところで、遠山。駄馬を躾けるのに最も良い方法は――ムチだ」

ジャンヌはドレスのどこからか、そしてなぜか馬上ムチを出してくるし……！

「ちなみにムチは、一部の欧米圏では子どもを叱る時にも使う」

また出たぞヨーロッパの文化。アリアは日本風に鉄拳制裁してくるけどね！

「……一晩ごとに女を換えるような節操なしには、痛みで罪と罰の意味を覚えさせてやる。遠山。お前は私とメーヤを侮辱したのだ。侮辱されたら、仕返ししてやるのが騎士道だ」

ぽん、ぽん、と不可解な事を言いつつジャンヌが手元で鳴らす短いムチは――本物だぞ。

SMショーでも見てるような調子で盛り上がる観衆を、俺は押しのけ――

（三十六計逃げるにしかず、だッ）

ダッシュで逃げる！　なんで怒られてるのか分からんままに。

だが、カツカツカツッ！

ヒールをならして、ジャンヌは追ってくるぞ。多分ネコミミ集音器で足音を

拾いつつ。
「トオヤマさーん、ジャンヌさーん、どっちもがんばってー！」
あのクソ重い大剣を片手で振って応援してるメーヤ、あんたもトンチンカンな人だな！　知ってはいたけど！
広いベランダに逃げた俺は、セーヌ川ダイブでもキメてやろうかとも思ったが――下は石畳。しかもベランダから宮殿内に戻るドアは1つしかない。袋小路だなこりゃ。
ジャンヌは追いついてくるなり、
「――フンッ！」
マジでムチを振るってきたが、そこは俺も甘ヒスの運動神経で振り返りざまに躱す。
とはいえ紙一重だったこともあり、胸のポケットチーフがムチの先端に掠められて――ガルニエ宮の白い外柱の間を舞った。
そして、それに引っかかって出てきた――さっきの写真入りペンダントが、カツンっ。



ジャンヌの、ヒールの辺りに転がった。
「……！」
そこで、ジャンヌの手が止まる。
しばらく何かを考えるような顔をしてから……ジャンヌはそれを拾い上げ…手の中に握り混みつつ、腕組みした。
「そういう事か、遠山」
「……？」
あれ。なんか少し、機嫌が直った感じの声だぞ。
「分かりやすい男だな。これか。お前がヤケになってメーヤに走ろうとしたワケは」
別に、ヤケになったりメーヤに走ろうとしたりはしてないんだが……
トラのようだったジャンヌがネコに戻りつつあるので、ここは話に乗っておこう。
ジャンヌの部屋にあったこのタキシード、そのポケットに入ってたペンダントの話題を振っておけば……乗り切れるみたいだからな。
「……お前、男と住んでたのか？」

武偵のタブーは犯すが、恋愛当時の……いい思い出の話でもさせて、取りなそう。

「お前と一緒にするな。ピアは兄だ」

パチン、とジャンヌは手の中でペンダントを鳴らし――

「私の母親は2回離婚して2回再婚している。なので父親は違うがな」

……別の意味で……あんまり触れちゃいけなかったな。この件。

イヤだったらもう話さなくてもいいぞ、というアピールで、俺はベランダから外を向く。

だがジャンヌはここは明らかにしておこうと思ったのか、静かに俺の横についてきた。

「――私の一族は徹底した女系。なので、兄は成人後……義絶されている。私は、家族を引き裂くこのしきたりを憎んでいるよ」

……だろうな。仲良しっぽかったもんな。あのハンサムなお兄さんと、ジャンヌ。

「その、ピアさん……兄さんは元気なのか。ちゃんと遣り取りしてるか？」

俺にも、ある種の腹違いの弟と妹がいるので――共感してそんな事を訊ねる



と、

「ああ。ピアはスイス人の画商とオランダで同性結婚して、カンヌで幸せに暮らしている。仕事は前衛芸術の画家をしていてな。かなり儲かっているそうだ」

ジャンヌはニッコリ笑って、お兄さんの話をしてくれた。

そうなんだ。いいね。

クリエイティブな仕事をしてるみたいだし、お金持ちとは羨ましい。

……

……

やっぱりダメだ！　話の後半に意識を逸らして前半を聞き流そうと思ったけど、いま、聞き流すに流せない重要情報がありませんでしたかお兄さんに関して!?

い、いや。ここは海外。日本の常識があれこれ通用しない場所だ。

それは香港でも学んだ事だし、驚きを顔に出さないようにしとこう。

うーん……しかし、ジャンヌも妙に女子にモテる辺りは……似たもの兄妹なのかもだ。それとジャンヌの壊滅的な絵のセンスも、ひょっとして出すところに出せば画才って事になるのかな？

そして、ジャンヌと俺には……
意外な所に、共通点があったんだな。
騎士と武士の違いはあれど、義のために戦う一族の血を引いている事。
きょうだいの複雑さ。
性別や人種、国籍も違うし、見た目もまるで違うが――
似たような宿命を背負った少年少女なんだ。俺と、ジャンヌとは。
それなら……
なおさら、助けてやらなきゃな。この欧州戦線でも。
同情というのとはちょっと違うけど、なんというか、似たもの同上として。



## 4弾　高く危険な道

ルーヴル美術館は、かつてのフランス王宮を利用した世界最大級の美術館だ。
外観は昨夜のガルニエ宮と同様に精緻で絢爛だが、朝日に煌めく建物は――
ケタ違いに広く、大きい。窓から見える館内もゴージャスだ。さすが元・王宮だけあるな。
「獅子の門から入館しよう。観光客が知らないから並ばずに入れる、穴場の入口だ」
一般高の女子制服っぽい私服姿のジャンヌの案内で、俺とメーヤは館内に入る。
なぜ、俺たち師団の3人がここに来たのかというと……
早朝にジャンヌ宅を訪れたメーヤが、ここに行こうと主張したからである。
武運を司る天使のお告げがどうのこうのとか言って。
俺も超能力者との付き合いが増えてきたから分かったが、それは星伽巫女で
いう『託』のようなものなのだろう。無視しない方がいい。
空振る可能性もあるが、メーヤの力で何らかの武運に恵まれる事も期待でき

たので――

こうして、やってきた。というわけだ。

（だが……どうして、こうなった……）

豪華な館内を歩く俺は、右腕をジャンヌ、左腕をメーヤに組まれている。

で、ジャンヌは時々メーヤを睨み、メーヤはそれにほんわか笑顔を返したりしてる。

……ナニコレ。

特に、日本で言えば森ガールみたいなゆったりした私服姿のメーヤ。これがしっかりとしがみつくように腕を組んできているので、その圧倒的な肉の果実、ミルクの大玉、要は巨乳がむにゅむにゅ肘を挟んでくる。今月3回目の胸地獄だぜよ。こんな事もあろうかと100個ほど暗記してきた素数を念仏のように唱えて耐えてるが、ヘタしたら歩きながらヒスる恐れまであるぞ。

しかし、ここに……武運に関わる、何があるというんだろう？

スクラマ・サクスに代わる銘剣でも展示されてるのかな。

当のメーヤは、まるっきり観光客モードでキャッキャウフフしてるんだが。

「59、61、67、71……こ、こうして歩いてればいいのか……？」



「はい。あとは神の御導きに依ります。何が起きるかは私にも分かりません」

「まあ、せっかくパリに来たのだ。モナ・リザぐらい見ていけ」

俺、メーヤ、ジャンヌはそんな話をしつつ――

割と博学なジャンヌの解説つきで歩き、サモトラケのニケ、ミロのヴィーナス、そしてレオナルド・ダ・ヴィンチの名画モナリザ（La Gioconda）の微笑みなんかを見て回った。

そうこうして、3時間ほど歩いたんだが……何も、起きないな。

ルーヴルの展示品はまさに無尽蔵。見ても見ても美術品が尽きず、もうお昼だってのにまだ1／3も見れてないが――

（このままここで、1日潰す事になるのか……？）

まあ、それならそれでいいか。

美術品を見る機会なんて、俺たち武偵には滅多にないんだ。鑑識科でもない限り。

ここはひとつ、一生分見るつもりで……

……

……？

（……――!?）

見間違いかな。

今、古代ギリシャ美術の彫刻コーナーで先生の説明を聞いている……社会科見学で来たフランスの女子校生と思われる、一群。

そのお嬢様っぽい制服少女たちの中に、見覚えのある顔があったような気がする。

俺はミュロンの『円盤投げ』の白い彫像の陰から、少女たちを監視する。

「……おい、ジャンヌ。メーヤ。あれ……」

俺に促されて、2人もクニドスの『愛の女神』像の脇から同じ方を見る。

次のホールへ少女たちが移動する動作で、対象の人物が見えて――

「……！」

俺たちは息を呑み、顔を見合わせる。そして改めて、少女を見た。

お行儀良くジャンパー・スカートの制服を着て、いそいそとノートにメモを取っているチビは……

（カ、カツェ・グラッセ……！）

――魔女連隊の、カツェだ！



こ、こんな偶然が、起き得るのか。

さすがに人違いかとも思ったが、3人が3人して見間違えるハズもない。髪型も身長も、顔つきもカツェだ。そして何より、右眼に眼帯をしている。逆鉤十字じゃなくて、お花のマークになってるけど。

「メーヤ、お手柄だぞ」

声を潜め、ジャンヌがそんな事を言っている。

「これ……お前の力なのか。メーヤ」

「はい、おそらく……としか、厳密には言えないのですが。会うべき仇敵に偶然出会う、その偶然が必然に変わる――最も典型的な、私の『強化幸運』の現れかと」

メーヤは眉をツリ上げ、カツェを睨んでいるが……今すぐには、仕掛けない。

「お前ら、魔法でババッと捕まえられないのか。アイツをカエルに変えたりとか」

「遠山。乏しい魔術知識で無理に語ろうとするな。聞き苦しい。今は、魔術はダメだ」

「今日は瑠瑠色金の粒子が濃い、魔術に頼り辛い日なのです。あの害虫も同条

件ですけど。強化幸運――神のご加護は色金粒子の影響をほぼ受けないのですが……他は、危険です」

「使えねーな、お前ら……じゃあ実力行使で行くぞ。ここで会ったが百年目だ」

俺がジャケットの内側、ショルダーホルスターに手を掛けると――

「よせ遠山。ここは美術館だぞ。無関係な人間も多い」

「今すぐ殺虫したいのは山々ですが、尾行しましょう。1匹1匹殺しても良いのですが、巣穴を見つけられればゴキブリを一網打尽に出来るかもしれませんから」

近付いてきたジャンヌとメーヤに、腕を止められた。

巣穴ってのは……魔女連隊の拠点、『兵器庫』の事か。

あと、確かに――ヤツらの戦える魔女の数が未判明な以上、カツェ1人をここで仕留めても次のカードを出されるだけかもしれない。

それより、敵のアジトの場所を突き止めた方が戦果としては大きいな。

よし。かけがえのない美術品を損壊しないためにも、ここは堪えて尾行に切り替えよう。

「……」



次のローマ美術のホールへ尾けていくと、カツェはそこでも先生の講義を聞いて熱心にノートを取ってる。

勉強……してるんだな。

そりゃあの年齢だし、するはするんだろうけど。学生だったのか。普段は。

だが見たところ、カツェの見学の手際は他の生徒より悪そうだ。

みんながメモを終えて記念写真を撮ったりしてるのに、まだ1人であせあせとノートに美術品の説明文を書き写してる。

しかも、奥から勢いよくやってきた中国人の団体に気づかず……カツェはドンッと押しのけられて、筆記用具を床に散らばらせてしまった。

慌てて這い回り、ペンケースやノートを集めるカツェだが……

クラスメートたちは、誰もカツェを助けない。

友達が……いないらしい。

（……ぼっちなんだな、アイツ）

フランスはホームグラウンドのジャンヌが、少女たちの制服を携帯で検索し

……

「あれは、ストラスブールの――フォレ・ノワール女学院の制服だ。通学制の、かなりのお嬢様学校だぞ。教育レベルは高いが、学費も高くて有名だ」

俺にヒソヒソ話してくる。

へー……テロリストのくせに、柄にもない所に通いやがってるんだな。カツエ。

瑠瑠粒子とやらが濃いせいで、魔術による探知もあまり効かないとの事で……

ここは俺が探偵科で鍛えた尾行術を使い、目視でカツェをマークし続ける。

メーヤには、館外での追跡に備えて車を調達しに行ってもらった。

そうこうしている内に夕方になり、フォレ・ノワール女学院の生徒たちは——

らしい。

—美術館の中央出入口で先生の訓示をもらって、現地解散という流れになった

パリでショッピングでもして帰るつもりか、生徒たちは盛り上がった様子になる。

そして仲良さそうにそれぞれグループを作って、そこを立ち去っていった。

だが……

カツェはポツーンと1人、出口付近に残ってる。

そして、みんながいなくなるのを横目で見送ってから……



「ケッ」

ポケットから煙草を出し、トントン、と指で叩いて出したマルボロで一服してるな。

「時間を潰してるみたいだが……何をやっているのだろう、あれは」

などとジャンヌが不審がる中、

「さあな」

と言いつつ、東池袋高校でぼっちを体験した俺には分かる。

いま動き回ると、1人でいるところをクラスメートに見られるから恥ずかしいんだろう。あれは、ぼっちの処世術なんだよ。

皆の目が無くなるのに十分な時間を置いてから、カツェは携帯でどこかに連絡してる。

そして尾けられてるとも知らず、ルーブル宮の中庭にあった階段を地下へ下りていった。

携帯を手に、ジャンヌがメーヤに連絡する中……

カツェは排気ガス臭い地下駐車場に入り、居並ぶ観光バスの向こうへ歩いていく。

その奥でカツェが、んしょ、と乗り込んだカーキ色の乗り物は――

（……ケ、ケッテンクラート……）

かつてナチス・ドイツが量産していた、前輪はバイク、後輪には2軌道のキャタピラがついているという小型装軌式オートバイだ。

さすがに鉤十字マークは無いが……赤地に白盾、中に荒ぶる黒猫が描かれた魔女連隊の紋章はバッチリ側面に描かれている。

ここからは女子校生のカツェじゃなく、魔女連隊のカツェ……ってワケか。

ゴーグルつきのハーフ・ヘルメットをかぶり、トラクターみたいな音を上げるケッテンクラートを走らせたカツェが出ていくと――ちょうど、すぐ……

サングラスで変装したメーヤが、真紅のアルファロメオ・ジュリアスプリントGTAで別の車両出入口から駐車場に入ってきた。目立つ車なのにはイラッとしたが、仕方ない。あれで引き続き追跡しよう。

ケッテンクラートは時速50kmぐらいしか出ないらしく、こっち以上に目立つ事もあり、追跡はしやすかった。

俺たちはアルファロメオでカツェを追い、レトロなパリの市街地を南東に出て、郊外の住宅地を抜け……田園地帯へと進んでいく。

カツェは、まっすぐ東南方面に走っていっているようだ。

速さで勝るこっちは道を何度か外しつつ、カツェを遠くから視認する形で追っていく。

そして……メーヤが胸の間から出したオペラグラスを借りたジャンヌが、

「クベール飛行場だ。入っていくぞ」

カツェの行き先を、確認した。

そこはフェンスで囲まれた、小さな飛行場。滑走路もあったがセスナ機ぐらいしか着陸できない長さで、主に気球や飛行船が発着する場所らしい。

その一角に……あったぞ。魔女連隊マーク入りの、今日日珍しい硬式飛行船が。

全長70m程に縮小したヒンデンブルグ号――といった風情の、銀灰色の機体だ。

俺もオペラグラスを借りて、様子を窺うと……

飛行船からはこれでもかってぐらいミニなタイトスカートの軍服を着た金髪少女たちが2人出てきて、カッ、と踵を揃えてカツェに敬礼してる。どうやら、

手下らしい。
人のまばらな飛行場とあって、割と堂々ナチス・ドイツの気配を出してきたな。武装もしてるし。
ケッテンクラートを降りて、飛行船の大きなゴンドラに入ったカツェは……きちんと白いテーブルクロスをかけたテーブルについて、コックらしい褐色肌の少女が運んできたサラダと魚料理をむしゃむしゃ食べてる。制服はそのままだが、眼帯は逆卍のやつに変えたぞ。
機内には他にも、ワルサーP38で武装した少女たちが乗ってる。全部で10人はいるな。
飛行船はゴンドラの後部格納庫を開き、ケッテンクラートを収納していく。どうやら、離陸準備をしているようだ。
「格納庫内に見えましたが、積荷は武器と……化学兵器の材料と思われます。パリで買い集めていたのでしょう。きっと、ローマに侵攻するつもりなんです」
「……どうする。離陸されたら、さすがにもう追えないぞ」
「ロケットランチャーでも持ってくればよかったですね」
オペラグラスをパスしながら俺とメーヤが焦る中、メガネを掛けたジャンヌは――



「あそこだ。ケッテンクラートを入れた、格納庫。ハッチが割といいかげんな造りだから、潜入できそうだぞ」
と言って、俺の方を見てきた。
策士の目、作戦参謀モードで。
「潜入できそうですよ、トオヤマさん」
メーヤも俺を見る。
な、なんだよ。こっち見んな。
「行くんならお前が行けよ。レディーファーストだろ」
俺がジャンヌに振ると、
「瑠瑠粒子が濃いとはいえ、いつまでも濃いとは限らない。潜入の後に粒子が晴れたら、私たち魔女はカツェに探知される怖れがあるのだ」
「あの機体では、ローマまで直行は出来ないハズです。ドイツがスイスの拠点に一旦停泊するのではないでしょうか」
「運が良ければ、兵器庫の位置を判明させられるチャンスだぞ。遠山」
2人はもう、俺が行く前提でテンポよく話してきてるぞ。

「着いたら場所を連絡してください。すぐ行きますので」
などとメーヤは胸の谷間から、シリアルバーを出してくる。お弁当のつもりかよ。
あー……クソッ。
面倒な事になったな。
だが、せっかくメーヤのおかげで敵のシッポを掴んだのに、ここでみすみす逃して振り出しに戻るのも癪だ。
それに、化学兵器の材料とは穏やかじゃない。テロ用の毒ガスでも製造されたらマズいぞ。そういう暴挙を止めるのも、武偵の仕事の1つだ。
それに……メーヤの幸運にあやかって、あわよくばヤツらの拠点でアリアの殻金を発見・奪還できるかもしれない。今回のカツェ発見の幸運っぷりはそんなノリだったしな。
エンジンをたっぷり暖気した飛行船は——係留用のケーブルを引き上げ始めている。
離陸までもう、何分も無い感じだ。
「……俺はヤバいと思ったらすぐ退くからな。その交通代金は請求するぞ」
そう言い残して、やむなく俺は——
アルファロメオから、暮れ始めた車外に出た。
飛行場のコンテナやテントといった死角を伝っていき、最後はイチかバチかでダッシュして、俺はカツェたちの飛行船に迫る。
運良く、見つかった様子は無く……さらに運良く、ゴンドラ後部の格納庫も手動で開け閉めできるものだった。メーヤのお陰か、とことんツイてるな。
プロペラが回り、ちょっと浮かび始めた銀色の飛行船にしがみつきつつ——俺は暗い格納庫に侵入し、静かにハッチを閉ざす。
「……」
気密が保たれた格納庫内には、灰色のビニールシートを掛けられたケッテンクラートと……駅に置いてあるような、ロッカーがある。
ほぼ全てのロッカーにはナンバー錠が掛かっていたが、非常用らしい1つが開けられた。中には、簡易なパラシュートが幾つか詰められている。これはありがたいね。
俺はそれを1つくすねて、ケッテンクラートのビニールシートに潜り込む。

（半ば、勢いで乗っちまったが……）

敵の拠点を判明させ、破壊工作の1つでもやって逃げられれば大金星だろう。

帰りはタクシーで、何百ユーロかかろうと帰ればいい。「パリの凱旋門」と言えば着くだろうさ。ジャンヌとメーヤよ、請求書を見てビビリやがれ。

俺はジャンヌたちに潜入成功を知らせようと、携帯を取り出してみるが……電波は弱まり、すぐ圏外になった。基地局情報を併用するので、GPSも作動しない。高地弱電界――携帯の電波塔より上空まで、上昇したんだな。

カツェたちは……レコードなんかを掛けて、楽しそうに歌を歌ってるよ。

曲は、ワーグナーの『ワルキューレ』だ。ヒトラーがお気に入りだった曲だな。

ケッテンクラートの廃熱もあり、シートの中は暖かかったので……

しばらく息を潜めていたら、眠くなってきた。けっこう風で揺れるんだが、それが逆に揺りかごみたいに眠気を誘ってくる。

3時間ほど飛行船に揺られて、ウトウトしてきたところで……

メーヤがいなくなった途端、運の悪さに定評のある俺にハードラックが訪れた。



（……！）

格納庫の……灯りがついたぞ。誰か、乗員区から入ってきたんだ。

シートのスキ間から、外を窺うと……

「Ich verändere Kleid. Ihr werdet hingerichtet werden, wenn es schwankt」

ドイツ語で背後に何か言いながら、カツェが入ってきたぞ。肩に大ガラスを乗せて。

そして自分のロッカーからナチスの黒制服を出し、ぱさ。ぱさ。

ケッテンクラートのカバー、つまり俺の上に放ってきた。

そしてカラスをロッカーの扉にとまらせて、

（……！）

おもむろに、女子校の制服を脱ぎ始めたぞ……！

ここ、更衣室としても使われたのか。だからロッカーがあったんだな。

テンパる俺の、目の前で――

あまり体格のいい方じゃないカツェ、その発育途上の体が露わになっていく。

思いっきりこっちに見えてしまっている背中には、貧乳だからつけてなかったらどうしようと危惧していた下着のストラップがちゃんとあった。

服を着ようとする動作で横を向いたから見えてしまったが、幼い顔に相応しい小ぶりな胸をしてるよ。平賀さんぐらいだな。

俺に気付いてないカツェは無警戒に胸のカップを整え、ささやかな膨らみに赤レースの下着を乗せ直してる。身長１５０ぐらいしかない中学生みたいな体形のくせに、セクシーなのをつけてやがるな。ギャップはいかんよ、ギャップは。ヒス的に。胸と同じく細くて大人っぽい赤下着をつけた小ぶりなヒップにも、けしからん血圧が上がっちまう。

ていうか、このシチュエーションもよろしくない。

こっちは敵情を確認しなきゃいけないのでガン見するが、向こうは俺に気づかず自然にお着替えしてる。まるで、ノゾキみたいだ。というか完全にノゾキだ。昔、武藤と女子の身体測定を覗いた時に判明した事だが、こういうのは…割とヒス的に危険なんだ……！

――ドクンっ……

ほら来た……！　案の定、簡単に来ちまったよ。もう見るのやめようか。



だが、そういうワケにもいかん。向こうに気づかれたら、こっちもすぐ何かアクションしないと命に関わるんだから。

なので、血流と戦いながらカツェのストリップを見続けていると――

カツェは、ぱちん。ケッテンクラートに乗ってたせいでちょっと食い込んでたパンツを短い指で整えて……下着姿のまま、魔女連隊の軍帽らしい黒い魔女帽をかぶった。

そしてロッカー扉の裏側についていた鏡に、にこっ。自分で自分をカワイイと思ってるらしく、ちょっとブリッコな笑顔を作ってる。

いや、実際カワイイぞ。やたら。

あの凶暴なカツェが、１人の時はああいう可愛い仕草もしてるんだと思うと……しかも敵だと思うと、ギャップと背徳感でヒス的な危険度が倍増してしまう。

（憎さ余って可愛さ１００倍、だったかな？　いや、逆だったかな）

などと、国語の成績の悪い俺が考えていると――ぐらり。

突風に煽られたらしい飛行船が大きく揺れて、カツェがよろけた。

そして、ぽむっ。

覗いていた俺の頭に、赤パンツの小ぶりなオシリがのっかって、きた……ぞ！
「Narr! Ich sagte daß nicht schüttelte!」
乗員区に叫んだカツェは――
「――？」
手で、もそもそ。
や、やばい。
やっぱり自分が座った感触に違和感があったのか、俺の顔の辺りをカバー越しに探ってきた。
さらに、ばさばさっ。
ロッカー側から、カラスが飛んできて――びしっ。
クチバシで突いてきたッ、割と的確に目を！
「痛ッ！」
つい声を上げてしまった俺は、
「――と、遠山ッ!?」
バレた……！　ものの見事に。
しかもこんな……どこだか分からん上空で。



やっぱり無謀だったか。ジャンヌの立てた作戦のせいだ。あのポンコツ参謀め。
カツェは飛び上がってケッテンクラートから離れ――
ロッカーから、俺がシーマ・ハリ号で壊したのと同じ金のルガーP08を出してきた。
事ここにいたっては仕方ない。と、俺もベレッタを手にカバー下から姿を現し――
「壁に耳あり障子に目あり、だよ。カツェ。特に、女の子は年頃になったなら男の視線に気をつけた方がいい」
と、覗いてたくせに、ヒステリアモードの口調で『覗かれてたそっちが悪い』的セリフ。
「グラーフ・ツェッペリンNT号に乗ってきやがったのか。どこまでバカなんだお前は」
「言っておくけど、この作戦は俺が立てたものじゃないよ」
「参謀の無理強いか？」
「まあそんなとこだね」

「そこは同情しといてやる。戦中のナチス・ドイツにもよくあった事だからな」

ピュイッ！　カツェが指笛を吹き、何事かドイツ語で叫ぶと――

乗員区から、わらわら。

ナチの軍服を着た女の子たちが、何人も出てきた。

そして俺が手にしていた銃を見ると、慌てた口調で敵の潜入を告げ合う。うち何人かが、素早く身を挺してカツェを守るような位置に立つ。

（ヒステリアモードには――）

割と、しっかりなれている。さっきのノゾキのおかげだな。

あとあまり認めたくない事だが、俺は、貧相な体つきの女子に対しては……なったら、しっかりなるらしい。ヒステリアモードに。

「さて、どうしようか」

半ば自問するように言った俺に――

「魔女連隊は名前の通り魔女――女だけの部隊だ。『異性恋愛罪』って独自の軍規があるぐらい徹底した男子禁制なんでな。出てってもらうぜ。今すぐ」

飛行中のゴンドラ内で、カツェがサディスティックな笑みを浮かべる。

カツェの手下たちは……次々と、黒いワルサーP38を抜く。



銃を持つ手つきから見て、シロウトじゃない。訓練を受けた兵上だと考えよう。

それと、10対1……

武偵法9条つきのこっちは、戦りにくいな。ヒステリアモードでも。

体質上、俺は女性には手抜きして戦ってしまうし。

じゃあ、言葉で切り抜けよう。日本語でも、真心こめて話せばきっと伝わるさ。

と思ったところで、そもそも言葉が通じない相手――カラスが、ばさばさっ！

俺めがけて特攻してきた。振りかざしたその爪が、薄紫色――

（――毒爪だッ）

ヒステリアモードの視力でそれを見抜いた俺がハッチ側へ後退すると、パァンッ！

カツェが撃ってきて、弾が俺の防弾制服を掠めてきた。

パンッ！　パパンッ！　乾いた音を立てて、少女たちはかなり的確な狙いで撃ってくる。カンッ、カカンッ、とハッチや床が火花を上げる中、やむなく俺も応戦しようとする――

が、視界や動きを毒ガラスにジャマされて戦いにくい。
カラスは大きさの割に素早く、勇敢で、俺の銃を警戒はするものの恐れない。
なにげに一番手ごわいのは……このカラスだな。極めて高い訓練を受けた、殺人鳥だ。
仕方ない。動物を傷つけるのは趣味じゃないし——女の子は、もっとだし。
カツェに言われた通り、出ていこう。
俺は回転受け身を取りざまに、自分が入ってきた格納庫の後部ハッチを蹴り開ける。
そして格納庫内の気流が乱れ、慌てる部下をカツェが一喝する中——
懸垂の要領で飛行船の後端に上がっていき、カラスと射撃線から逃れていく。

グラーフ・ツェペリンNT号は、すでに日没後の空を夜間飛行している。
飛行船の外布、そこに浮き出た骨格をハシゴのように上がり——
太陽電池が貼られてあった機体上に座るようにして、眼下を確認してみる。
だが、ここがどこかは全く分からないな。運悪く、下は曇だ。
真冬の高空とあって、気温は氷点下。山越えでもする航路だったのか、高度は6千mを超えているようだ。かなり息苦しい感じがする。
光学ステルス爆撃機・ガリオンの翼に乗ったのを思い出すけど、今回はあれよりずっとローテクな乗り物の上か……とも思ったが、よく見ると銀色の外布は化繊——防弾繊維。骨格も炭素繊維を撚って作ったらしい硬質・軽量のものだ。デザインはクラシックだが、最新科学の粋を集めた飛行船らしいな。ツェペリンNT号は。
ただ、所詮は飛行船。時速は80～90kmってとこだ。
気流は激しいものの、ヒステリアモードの俺が振り落とされるほどじゃない。
（さて、さっきくすねておいたコレで……）
俺が飛行船上の中央辺りで、背中に隠しておいたパラシュートを取り出した



そこで、バサバサッ！　さっきの大ガラスが……！
全力でこの飛行船と併走するように飛び、俺の手を掠めてきた。
間一髪で毒爪は躱したが、そのためにパラシュートを——落としてしまった。
袋に入ったままのパラシュートは側面の斜面を転がり、眼下の雲の中へと消えていく。

カラスめ。これが目当てで手を狙ったんだな。なんて知的なヤツだ。

やむなく、威嚇射撃で追い払おうとしたが――闇夜をターンした飛行船が、ゆっくりと雲に入っていく。俺は霧に揉まれたようになって視界を失い、カラスを見失ってしまう。

舌打ちした俺の視界の端、機体後方側の霧の向こうから――

ぬぅ、とカツェが現れた。

距離は、30m。

隊長自ら追ってきたのか。飛行船の上にまで。アリア並に好戦的だな。

「わははー！　エドガーよくやった！」

ナチス・ドイツの黒制服を着てパラシュートを背負ったカツェは……エドガーと呼んだカラスを片腕に留まらせながら、もう片方の手で命綱のワイヤーを掴んでいる。

そして、ああ、そんな。いくら気流が強いからって、股下1cmのスカートで腰を落として歩いちゃダメだよ。暗いのに、赤い薄布がハッキリ見えてしまいそうじゃないか。

それでヒステリアモードが少々強まった俺は――



「いい飛行船だね。今も昔も、ナチス・ドイツの科学力は世界一って事かな」

一応、いろいろ見せてもらったお礼も兼ねてお世辞から入っておく。

「高いんだから、壊すんじゃねーぞ。2機目の建造は予算が下りなかったぐらいなんだ」

確かに、そんな事を言ってたな。香港で、カツェは。

「香港では――お世話になったね。君は俺の頭を撃った。あと、タンカージャック」

次に、俺が恨み言を言うと――

「有名なお前のことだ、あのぐらい何とかするって思ったぜ。実際、なんとかしやがったみたいだしな」

有名なんだ、俺。

イヤだなー、学校でも外でも、不名誉な名ばっかり売っちゃってるよ。

「そういや……昔、情報員から聞いたぜ。宣戦会議の後――お前、メーヤを自分の部屋に招いたんだって？　何かいいことしてもらったのか。あのでかい、下品な胸で」

カツェは確かに少々昔の事を、なにやら憎々しげに訊いてくる。

「よく知ってるね。ただ、俺と彼女の間にそこまでの事は無いよ。今のところ」
メーヤに失礼にならないよう、あまり強く否定はしないでおくと――
表情豊かなカツェは、激しくイラッとした顔になる。
「あたしは……男女がイチャイチャしてるのを見るのが、この世で一番キライなんだよッ。お前、いくら乳がでかいからってメーヤはやめとけよ。あれと付き合うと、運が下がるぜ。これは断言するが、女は胸じゃないからな」
なんだかよく分からないが、とにかくカツェがメーヤを嫌いな事だけは分かったよ。
あと、胸にこだわってるところを見るに……自分の胸にコンプレックスがあるんだな。カツェは。
「女性と付き合う気はないけど、今のご忠告は頭の片隅に置いておこう。ただでさえ――このように、不運な俺だ。運と聞かされるとちょっと怖いからね」
「殊勝な心がけだ。さて遠山。墜落刑に処す前に、ひとつ質問しとくぜ。『遠山キンジ』ってのは本名だな？」
「それがどうかしたかい」
「あたしは、斃した敵の名前は覚えとくようにしてるのさ。思い出すのが楽しいからな」
ははーん。Sなんだね、キミは。
「どうかな。思い出すたび『戦わなきゃよかった』と思うんじゃないかな？」
軽くウインクして、カツェの動きを少しの間止め――
俺は、右手でDE、左手でバタフライ・ナイフを抜く。
それを見て、カツェもワイヤーをベルトに固定し――
右手で右腰のルガーP08、左手で柏葉の彫刻とダイヤモンドで飾られた短剣を抜いた。
そして楽しげな笑顔になり、
「1940年の事は、しばらく忘れようぜ！」
――パンパンッ！
日独伊三国同盟を破棄するような事を言って、いきなり撃ってきた。
俺は、それをスレスレで躱すが――
カツェ。君、ガン＝エッジで俺とやるつもりかい。
じゃあ受けて立とう。あの頃からヒトラーには見くびられ気味だった、日本人の強さを見せてあげるよ。

飛行船上での戦闘訓練の経験もあるのか、カツェは、たったった。
傾斜のついた船上、その骨格をうまく踏んでこっちに迫ってくる。エドガーも飛ばした。
だが――こっちはヒステリアモード。
下着について無頓着らしい君が足を振り上げて走ってくれちゃうお陰で、寒さの中でも血流が根倒れせずに済んでるところだよ。ああ、小柄な子って可愛いな。
ドオンッ！
通常の拳銃より遥かに大きな、デザート・イーグルの発砲音に――エドガーが、初めて怯む。鷲とカラスじゃ役者が違うとばかりに、上空を旋回するようなコースに逃げた。
「エドガー下がってろ！　こんなヤツ、あたしが――！」
飛びかかってきたカツェの短剣と、俺がナイフの破壊峰で切り結ぼうとすると――
カツェは、クルッ。それを嫌った。
そして短剣を手元で回し、逆手で俺の首をカッ切るような振り方に変えてく



る。
だが、遅い。俺は易々とそれを回避し、
「大事な剣なら、使わない方がいいんじゃないかな？」
――チャキッ。
ナイフの先で、カツェが胸元で留めていたパラシュートのハーネスを外させた。
そして、かつて出会った日のアリアにもやった事があるスリ技で――
すれ違い様に、パラシュートを奪う。
ワトソンほど上手くはないけど、これはカッカ来てる相手にはよく決まるんだ。
俺は飛行船の外皮をトランポリンのようにして、カツェから少し離れ――
「ごめんよ」
女性が身につけているものを剥いだので、一応、謝っておく。
「うっ……」
近接戦では明らかに格上の俺に、カツェが呻く。
「ほら。これが無くなったら怖くなっただろう？　もう船内にお帰り。俺も、

お望み通り降りるから。君からなら、今の俺は服だって取れる。そしたら寒くなるよ」

俺はパラシュートを背負いつつ、警告するが――

「あたしが……お前より弱いってのか。怖がってるって言うのか」

「僭越ながら」

「ちげーよッ！　えっと……えっと、これのせいで動きが鈍ってたんだ！　怖くなんか、ねーんだよ！」

カツェは、プツッ！　短剣で、命綱のワイヤーを切ってしまう。

なんて……プライドの高い子だ。まさにドイツ版のアリアだね。

「足が震えてるよ、カツェ」

「さ、寒さのせいだ。冬将軍には機甲軍団だって苦戦するもんだからなッ」

ははっ。意地っぱりだなぁ。

だが、もう君に打つ手はないだろ？

もうちょっと可愛がってあげたい気もするけれど、バイバイするとしよう。

ここがどこかは知らないが、俺はこれで失礼する。

と、俺が武器を収め、飛行船の背を側面の方へ踏み出すと――



「――逃がすかよっ！」

てっきり後退すると思っていたカツェが、飛びかかってきた……！

危ないッ、と思うヒマもなく、エドガーも主人と心中するような勢いで急降下してくる。

2対1でバランスを崩された俺は、カツェと揉み合うようにして飛行船を――

上から横へと、転げ落ちてしまう。

カツェが落ちないよう抱きかかえながら、飛行船の骨格を俺が片手で掴むと

「ケケッ。油断したな遠山っ……！」

カツェは――俺のパラシュートに、ガッチリ手をかけていた。

ゴンドラ側からは、少女たちがカツェを応援する声が聞こえてくる。

「……ちょッ……と、それは、取らないでくれるかな……？」

俺の手が機体に掴まるのとカツェを支えるのとで塞がってるのをいいことに、

カツェはパラシュートの留め金を俺から外してしまう。そして、

「バーカ、1人で地獄へ堕ちろッ！」

自分でツェペリン号の側面に掴まり、パラシュートを引っぱってくる。
だが、俺からパラシュートを外そうとしたその動きで、かじかんでいたらしいカツェの手が――飛行船の外骨から、ズルッ。外れてしまう。
「わっ」
と一声残して――
転落したッ。カツェが。
パラシュートはまだ辛うじて、俺の肩に残っている。カツェにはない。
武偵法9条違反――
「――！」
即座に、俺も飛行船を蹴って飛び降りる。
わぁー！　というゴンドラからの少女たちの悲鳴が――
一瞬で、消えていく。遥か上へと。
俺は空中でパラシュートのハーネスを掛け、背中を下にして落ちていくカツェを追う。
（追いつけッ……間に合え！）
高度も何も分からないが、とにかく女性は見捨てられない。



俺は頭を下にし、真っ逆さまになって加速していく。
今、カツェから外れた魔女帽とすれ違った。
驚きのあまり硬直しているカツェの顔も、暗い空中で見えてくる。
もう少しだ。もう少しで……カツェに、手が、届く……！
――霧のような雲の中でカツェに追いつくと、
「これはッ……あたしのもんだ！」
ちょっ……！
助けに来てやったのに、カツェは俺にしがみついて未開傘のパラシュートを奪い取りにかかってきた。そして、愕然とする俺から――今度はついに外し、自分で背負ったぞ。
この……バカ女……！
俺はカツェにしがみつき、半ギレでパラシュートに手を伸ばす。だが、落下の乱気流で思うように動けない。カツェの腰のベルトを掴んでいた俺が、カツェに蹴られてその手を離してしまった瞬間、
「――勝利万歳！」
風圧で引きつった笑顔になったカツェが、ばさッ！

自分だけ助かろうと、パラシュートを開いた。自由落下する、俺の真上で。

――だが。

ぐきぐきっ。

「うげっ」

割と近い上空で、カツェの声がした。

骨盤が割れそうな衝撃が、俺のベルトに伝わってくる。それはカツェも同じハズだ。

さっきの一瞬で、カツェのベルトには俺のベルトのワイヤーを引っ掛けておいたからな。

俺はパラシュートにブラ下がるカツェに更にブラ下がる形で、墜落を免れたのだ。

濃くなった霧、というか雲の中で大慌てでワイヤーをよじ登り、俺は、むぎゅ。

「――失礼するよ。上は見ないんでご安心を」

カツェの細い足を掴む。

右手で右足、左手で左足を思いっきり掴み、振り落とされないように堪える。



「こ、こらァーっ！　乙女の足を掴むなーッ！」

俺を足にブラ下げた状態のカツェが喚き、次の瞬間――

ドシッ！　ザァァ――ッ！

「――！」

「……ッ！」

まだ高空にいると思っていたのに、俺たちは高速のまま地面に叩き付けられた。

水平面だったら即死するところだったが、斜面に落ちたようだ。まだ、滑り落ちている。

自分が激しく転がる衝撃で、周囲に氷が飛び散っているのが分かる。何だ、これは――

ザザザザッ……！　ザザザッ……！　ザザッ……！

……と……

何十mも滑落した俺の体が……うつぶせの状態で、ようやく静止する。

グラグラする意識をなんとか保って、薄目を開けると――夜の闇の中――

かなり傾斜した、青白い斜面に……俺の体は、転がっていた。

フーッ……と深くついた息が、白い。
極めて、低温の空間にいる。
（ど、どこだ……？　ここは……？）
斜面を多う白い物は全て、氷。
雲越しにボンヤリ光る月に照らされて、ポ
着地時に先端のカラビナが外れてしまったベルトのワイヤーを回収して、
ケットから携帯を取り出してみると……壊れてはいなかったが、通じない。こ
こも、高地なのだ。
冷たい霧の向こうに目を凝らすと、ギザギザとした山の稜線が辛うじて見え
る。
（山岳……か……）
一難去ってまた一難、だな。
斜面を滑り落ちないよう注意しつつ、体を起こすが……良かった。どこも折
れてない。
もちろん打撲で全身がバキバキに痛むけど、蘭豹のシゴキに比べりゃ大した
ことないね。



とはいえ周囲は暗く、凍てつくほどに寒い。山にかかる雲の中にいるらしく、
文字通り五里霧中だ。こんな所でボンヤリしてるワケにはいかないぞ。
絶望的な気分で、山小屋でもないかと灯りを捜してみるが――
そんな都合のいい物はもちろん無く、見つかったのは……氷河の少し上の方
で大の字になってブッ倒れているカツェと、カツェに繋がったままおれたパ
ラシュートだけだった。
「……」
ざく、ざく、と氷を踏んでそこまで上がっていき――
死んじゃったかなと思ってカツェを見てみたら、目をグルグル回しちゃいる
が生きてた。
タフだなー、この子。さすが極東戦役の代表戦上を務めるだけの事はあるよ。
「カツェ」
「……う……ん……」
俺が声を掛けると、カツェが薄目を開けたので……
「そんな所で寝てたら、カゼひくぞ」
寒さのせいでヒステリアモードが解けていた俺は、あまり優しくはない口調

で言う。

――転落から生き延びたのは良かったものの、まだ俺たちは生命の危機にある。

ミニスカートのナチス制服を着たカツェもそうだが、俺も武偵高の制服。冬服とはいえ、防寒性は最低限のものだ。このままじゃ、吹き下ろす冷風で凍死してしまう。

なので……俺は風避けにするため、コードを掴んでパラシュートを引き寄せる。

そして、その布をカツェと自分に被せていく。

こいつを――テント代わりにしよう。

飛行船に載せるためかパラシュートは防火布だったので、断熱性も少しはありそうだ。布量もかなりあるので、被るだけではなく、カツェと自分の下に厚めに巻き込んでおく。

暗い即席テントの中で、上体を起こしたカツェが……ぱちんっ。

ライターのケツについていた、ＬＥＤライトを灯した。

「……」

2人してあぐらをかいて向き合う、この空間は……テントのつもりでも、骨が無いから上布を頭で支えている状態だ。ゴム製の救命イカダ、いや、大きめの寝袋ってとこだな。

俺たちはしばらく、こんな近くにいるのに視線も交わさず黙っていたが――

「遠山。お前……さっき、あたしを助けようとしたのか。バカなのか」

への字口で、カツェが話しかけてきた。

パラシュート無しで転落した、カツェを追って……

俺が、ツェッペリン号から飛び降りた時の事を言ってるみたいだな。

「俺は武偵法を守っただけだ。確かフランスでも武偵は殺人禁止なんでな」

つっけんどんに俺が返すと、カツェは黙ってる。

「……ここは、どこなんだろうな」

今度は俺が訊ねると、カツェが、

「西アルプスだ。トリノまで行く航路だったが、モンブラン越えの途中で落ちた」

……モンブラン……

考え得る限り、最悪の所に落ちたな。
モンブランは、フランスとイタリアにまたがるヨーロッパ屈指の高峰。
標高は確か、４８００ｍとかだ。どうりで落下時間が短かったワケだぜ。
俺もカツェも、この件に関してはもうこれ以上喋らない。
真冬のモンブランで遭難し、登山靴やピッケルどころかテントや防寒着すら
ないという……この、現実。
生還は絶望的だな。
「……」
「……」
だが、黙っていると暗い気分が増してくる。
こういう時は、気持ちが折れたらおしまいだ。
寒さを紛らわすためにも、何か喋ろう。空元気も元気って言うしな。
なので、長い沈黙の後……
「カツェ、お前、普段は学生なのか」
俺がルーブル美術館で見たカツェの姿を思い出して話を振ると、カツェは見
られていたことを悟ったのか「チッ」と舌打ちしてから――



「お前こそ、人のこと言えんのか」
ぐうの音も出ないような事を言い返してきた。
だが敵に言われっぱなしでは腹が立つし、パラシュートを取られて殺されか
けた恨みもあるので……俺は、こっちを見てないカツェの頭を……ぐいっ！
引っぱり寄せて脇に抱え、ヘッドロックしてやった。
おーおー。小顔だからガッチリ極まったぜ。
「――いたいたいいーたーいー！　はなせはなせはーなーせー！」
カツェが喚く通り、ヘッドロックはシンプルにして超痛い技。
俺も特に理由もなく蘭豹によくやられてたから、その激痛は分かるぜ。
だがカツェは寒さのせいか、声は上げるものの イマイチ抵抗に力が入ってな
い。ので、かわいそうになってきて……離すと、
「……ッ……」
カツェはおかっぱ頭の黒髪を整えて、一旦静かにしてから……
「――だっしゃあ！」
ちょっ！
いきなり俺に組み付いて、ミニスカートお構いなしで全身関節技をキメてき

たぞッ！

「痛い痛い痛いッ！　離せ離せ離せッ！」

今度は俺が、このセリフだ。徹底してるな、ナチスの魔女は……！

グラウンドだけど、卍固めだなこれ。

テントはやはり、その場凌ぎにしかならず……

深夜を回ると、寒さはどんどん増してきた。パラシュートの防火布で密閉した空間の中、俺たちはガチガチ震えながらも自分たちの体温で耐えようとしているのだが――ダメだ。

テントの中も氷点下、それもマイナス5度、10度ってレベルに思える。

だが、ナメんなよモンブラン。日本の冬だって寒いんだ。この程度、子供の頃に正月の青森――星伽神社に行った時に経験した地吹雪に比べりゃ、まだ生ぬるいぐらいだぜ。

そうして、寒さで襲い来る眠気と戦いながら……夜中の2時を回った頃。

……ばしっ。

何かがこの簡易テントに、外側からぶつかってきた。



（……？）

氷か何かかとも思ったが、もっと柔らかい音だったな。

ひょっとしたら人間が叩いたんじゃないか。そんな感じだった。

と、微かな希望を胸に――俺は、パラシュート布のスキ間から外を覗く。

外は雲に切れ間が出来ており、耳が痛いほどの静寂が包んでいたが……人影は無い。

その代わり、

「……っ……」

翼に霜が降りて白鷺みたいになったカラスが、すぐそばの斜面に落っこちていた。

（エドガー……！）

あれはカツェが飼っていた、大ガラスだ。

飛行船から落ちたカツェを追って、空からここを見つけて飛んできたのか。

月明かりがあるとはいえ、鳥は夜目が効かないから苦労しただろうに。

寒さで半死半生のエドガーは……ひょこ、ひょこ。ぱさぱさ。

最後の力を振り絞るようにして歩き、飛び、俺が開けたスキ間にへばりつい

てきた。
コイツはさっき俺に毒爪を振るってきた、ナチの殺人鳥だが……まあ、動物に罪はない。
カツェの身を案じて必死にここまで来たワケだし、その忠誠心に免じて入れてやるか。
と、俺はエドガーを簡易テントの中に引っ張り込む。
凍りかけていたエドガーを……パラシュートを包んでいた袋にくるんでやり、
「……エドガー、お前のご主人は、まだ生きてるぞ。おいカツェ……感動のご対面だ」
そう言いつつ、カツェに渡してやろうとする。が――
さっきまで木のウロで眠るヤマネのように丸まって、震えていたカツェの…
…
震えが、収まってきている。ほとんど動いてない。
これは……寒くなくなってきたんじゃない。体力が尽きてきたんだ。
「お、おい」
声を掛けるが、カツェは答えない。



顔を覗きこむが、もう意識が無いぞ。鼻水も凍ってる。
頬を触ってみると、ゾッとするほど冷たい。マズい。凍死寸前だ。
「……ッ……」
やむなく、俺はほとんど動かないカツェを引っぱり寄せ――
座ったまま後ろから覆い被さるようにして、自分の体温で温めにかかった。
ついでに、エドガーもジャケットの内側、背中側に入れてやる。
だが……1時間、2時間と耐えているうちに……
言いようのない眠気が、強まってくる。
これは単に夜だからではない。俺も、意識を失いそうなんだ。
雪山で寝たら死ぬというのは、迷信じゃない。通常、人間は寒すぎると眠れないように出来ているのだが……それが寝てしまうほど寒さに体力を奪われると、もう復活できない。睡眠時に体温調節の機能が弱まる事も手伝って、疲労凍死――体温が止めどなく低下し、死に至るのだ……！
……
……

「……っ……！」

目が、覚めた。

よ、よかった。うっかり寝ちまったけど、ギリギリ死なずに済んだみたいだよ。

今は即席テントの布越しに、日の光が感じられる。

気温も上がっているようだ。意識を失った直後、日の出に救われたんだな。

エドガーは背に入ったままだが、カツェの姿は無い。夜を乗り切り、外に出たらしい。

腕時計を見ようとすると、がちっ。

両手首に……手錠が掛かってるぞ。鉤十字マーク入りの。

（カツェめ。こんな物まで持ってやがったのか……ッ）

もそ……もそ、と、布から外に出ると——

眩しい。遮るものの無い太陽が、ギラギラと照りつけている。

乾燥した風は冷たいが、日差しは日焼けしそうなぐらいだ。

目を細めて見回すと、外は見渡す限り——氷河と、氷を纏ったピラミッドのような黒岩だけだった。足下には、ドライアイスが気化したような白い煙が薄く流れている。日光で氷が溶けて発生した水蒸気らしい。眼下は、雲海で……周囲に人工物は見えない。



「おはよう、遠山。お前は捕虜だ。おとなしくしてろ」

背後から声を掛けられて、振り向くと……

カツェがルガーP08を手に、ニヤリ。笑いかけてくる。

割と、元気そうだが……感謝知らずの女だな。いきなりこれかよ。

とはいえ、その口調は少しだけ柔らかい感じだ。

どうやら目覚めた時、自分が俺に抱っこされて温められてた事を知り……態度が少し、軟化したみたいだな。行動は相変わらずだけど。

手錠をされてるものの、俺もベレッタを抜こうと思ったが……ちょっと触って、重さで分かった。弾を抜かれてある。DEもだなこりゃ。

「タマなら、氷河のずーっと下まで滑っていったぜ。銃は後でもらうが、重いんでお前に運ばせる」

「フンッ……雪山で発砲してみろ。雪崩が起きてお前も死ぬぞ」

そう言い残して、俺はカツェに背を向け……立ち去るというか逃げようとすると、

「そっちはイタリア方面だぜ、遠山。人里まで遠いし、検問もあるぞ。お前、パスポート持ってねーだろ」

カツェがそんな事を言うので、振り返る。

そういや、ジャンヌの部屋に置いてきちゃってたな。パスポート。

銃を収めたカツェは、腕時計を見つつ太陽の向きから方角を確かめてる。

「じゃあ、どっちへ行くんだ」

「フランス側の麓（ふもと）にある、シャモニーって街の方だ。国境警備隊には見つからないようなルートを行くぜ。あたしも、ちょっと検問はヤバいからな」

方角があまり正確に求められないのか、髪をくしゃくしゃしながら時計の向きを変えるカツェは……アウトローならではの抜け道を、知ってるらしい。

それを教えてくれたのは、昨晩のお礼のつもりなのかな。

俺も——敵同士とはいえ、この厳しい山を別々に歩くのが愚（おろ）かな事は分かる。

なので、歩き始めたカツェと2人……横並びで、氷河を少しずつ下り始めた。

「ああ。そういえばカツェ、これ。コイツは捕虜にもならんお荷物だから返す」

俺は上着の背に入れていたカラスの存在を思い出し、ゴソゴソと肩を動かし……手錠をした手でなんとかそれを取って、カツェに渡してやった。



すると——

「……？　……！　エドガー！」

袋を開けたカツェは目をまん丸にして驚き、バサバサッと出てきたカラスを抱きしめる。

そして、満面の笑みになって——

「良かった……！　もう一生会えないかと思った、エドガー、良かった……！　ふ、ふぇ、ふぇえぇ……」

それから……泣いて……喜んでる。

普段のカツェとは違って——あの、普通の可愛（かわい）い女の子って感じのカツェの表情で。

「……」

どんな旗を背負ってようと、こいつも人間なんだな。俺（おれ）へのお礼は一言もないけど。

「あはは！　エドガー！　帰ったらプレッツェルを食わせてやるからな！　あはは！　よかった、よかった！」

カツェは嬉（うれ）し泣きしながら、エドガーを両手で持って——

たったった！　ワルツを踊るように、回りながら走ってる。
「お、おいカツェ」
滑って転んだら事だぞ、と思った俺が声を掛けた時――
それよりマズい事が起きた。
「――うおっ！」
声を上げたカツェの姿が、スッと消えたのだ。
真下に。
「――カツェ!?」
崖でもあったのかと思って、慌てて駆け寄ると……
カツェが消えた辺りの氷河には、幅1mほどの割れ目が開いていた。
足下を流れる水蒸気のせいで見えにくかったが、これは……氷隙……！
氷河や雪渓に生じる、巨大な亀裂。自然の落とし穴ともいえるそこに、カツェは落ちたのだ。
深さが10mはありそうな、暗い氷の壁面には……
エドガーを持ったままのカツェが、地下4mぐらいの所に挟まっていた。
「だ……大丈夫か！」



「チッ……」
カツェは上がろうとしているが、クレヴァスの壁面は滑る氷。上がれるものではない。
動こうとすると、むしろ少しずつズリ落ちていってしまうようだ。
俺はベルトのワイヤーを伸ばそうとするが……なんてこった。バックルのウインチが、壊れちまってる。どうしても自分の手の長さ以上に延びず、巻き戻ってしまう。
こういう時は両手を使い、手と肘を糸巻きのようにすれば伸ばせるものなのだが……
カツェに掛けられた手錠のせいで、それができない。
「――カツェ、この手錠を外す鍵をくれ！　そうすればそこまで、ワイヤーを……！」
「……ダメだっ。お前は捕虜なんだぞ、氷の下で意地を張るカツェが――ずりっ。また数十cm、落ちていく。
「分かったから！　俺は逃げない！　約束するから、鍵をよこせ！」
「……っ……」

カツェはそれでも黙っていたが、さらに、ずりっ。滑り落ちかけて、慌てた顔になる。

そして胸元のポケットから出した鍵をエドガーに咥えさせ、ばさばさっ。上へと、飛ばしてきた。

エドガーがくれた鍵を掴んだ俺は、大慌てで手錠を外し――

クレヴァスのフチに寝そべり、体を出来る限り固定し、ワイヤーを下へと垂らしていく。

そして、カツェがワイヤーを自分のベルトに繋いだのを見て……

慎重に、慎重に、引き上げていく。

見た目通り体重はあまりない子だから、上げられるぞ。いける……！

そうして……氷のフチに近付いたカツェに、

「……手を……！」

手を伸ばす。

はしっ、と、俺の手をしっかり掴んだカツェの手は……

小さくて、柔らかかった。

ようやく上がれたカツェと入れ違いに、少し割れたクレヴァスのフチから――

さっきまで俺に掛けられていた手錠が、落ちていった。真っ暗な、奈落の底へと。



その後、山を下りるカツェは……

おとなしく、というか無口になった。

敵に助けられた事を、恥じてるのかな。

あと、改めて俺を拘束するような素振りもない。

とはいえ俺も逃げないと約束したので、引き続きカツェと並んで歩く。

青白い氷の坂を、時々お互い手を貸し合いながら――とにかく、下りていく。

そうして、4～5時間は歩いただろうか。

初め氷だけだった足下に、露出した堆積岩が現れ始めた頃……

（……あれは……）

天候が変わり、眼下を覆っていた雲が晴れてきて……見えてきたぞ。久々の、人造物が。

「――鉄塔だな。電線だぜ」

手で庇をつくるようにして、久々にカツェが喋る。その声は……明るい。

「かなり遠いな……」

「文句言うな遠山。あれを伝って行きゃシャモニーだ。登山客が来る街だから、ホテルがある。熱いスープも飲めるぜ」

「スープか。悪くない響きだ」

つい2人して笑顔を交わしてしまってから――

敵同士だという事を思い出して、カツェはフンッと顔を逸らす。

だがスープの話をしたせいか、その小さな腹が……きゅる、るる……と鳴った。

これは万国共通で女子的に恥ずかしい事なのか、カツェは顔を赤くしてるが……

（腹が……減ってるんだな）

それは1日何も食べてないこっちもだったので、俺は――腰ぐらいの高さにあった岩に腰掛け、メーヤが持たせてくれていたとっておきのシリアルバーを取り出した。

するとカツェは、すぐ俺の食糧に気づいてチラ見してきてる。目ざといなー。



だが、よこせとは言わないので……

「食うか？　全部はやらんけど」

声を掛けてやると、カァッと赤くなったカツェは、

「て、敵の施しなんか受けられっか！　あたしは誇り高き魔女連隊の、連隊長だぞ！」

と言ってきたタイミングで、きゅるるー。また腹を鳴らしてる。

「……」

「……」

俺は無言で、包装を剥いたシリアルバーを半分に折る。

そして差し出してやると、カツェは、たった。

キレ顔で近付いてきて、ばしっ。取った。食うんじゃん。

言ってる事とやってる事の違う魔女連隊長さんは、ガツガツ。俺に背を向けて、一気に食べた……かと思いきや、ちょっと砕いたのを、エドガーにもエサとして与えてやってる。優しいところもあるな。

しかし、このシリアルバー……マズイな。空腹でも不味く感じるって事は、相当だぞ。パサパサしてて、口の中の水分を全部持ってかれる感じだ。

ただでさえノドはカラカラなので、できればミルクが、せめて水でも欲しいところだが――ここには無い。諸説あるが、雪氷を食うのは体温を失う危険な行為だと教わったしな。

などと俺が考えていると、カツェが……軍服の胸ポケットから、逆卍マークの金属筒を出してきた。胸を少しでも大きく見せたいのか、何でも胸ポケに入れてるなぁ。

「何だそれは。炸薬筒か」

俺がイヤミ混じりに訊ねると、

「惜しいな、水筒だ。あたしは厄水の魔女――本来は緊急時に武器として使う水だけどな。オートミールは水無しで食うと胃に良くないから、飲料水にする」

くぴくぴ、と水を飲んだカツェは……

「ん」

と、こっちにその水筒を突き出してきたぞ。俺の方を見ずにだけど。

分けて……くれるってのか。

お前にとっては武器にもなる、貴重な水を。

食糧をもらったお返しは、律儀にちゃんと返すって事か。



カツェは……敵だが、誇り高い敵ではあるんだな。

「……」

俺は何も言わずそれを受け取り、ちょうど半分残っていた水を少しずつ飲んだ。

しかし、山――大自然が相手となると、敵も味方もなくなるもんだな。

ここからも、まだ助け合わなきゃ下山できなさそうだし。

俺が水筒を返すと、カツェは……

「――あたしは、ドイツ系フランス人だ」

フランスの山々を眺めたまま、独り言のように言う。

「大戦中、ドイツとフランスの国境地帯――ストラスブールの戦魔女は魔女連隊に入って、偉大なる祖国・ドイツのために命懸けで戦ったんだ。ストラスブールは元々ドイツだった土地だからな。ストラスブールの戦魔女は、昔からずーっとドイツの魔女なのさ」

そう話したカツェは、そこで苦い顔になり――

「だけど現代じゃ、あそこはフランスだ。領有権争いの果て、戦争の結果ってやつでな。祖国を守るために血を流して戦った魔女連隊の子孫は、フランスじ

や迫害される。それはあたしもだ。髪を切られたり、ネットでご先祖様をバカにされたり、ナチに売る物は無いってんで店を追い出された事もある。家の窓に落書きされたハーケンクロイツを消す時の気分ったら、へへッ。なかったぜ」

自嘲気味に笑ったカツェの横顔に、俺はルーブル美術館での光景――

フランス人たちの中で一人ぼっちだったカツェの姿を、思い出す。

「そんなあたしに手をさしのべてくれたのが、イヴィリタ長官さ。彼女はあたしみたいな迫害されてるドイツ系の戦魔女を集めて、戦う場所を与えてくれたんだ。長官は怒らすとコワイけど、ホントはいい人なんだぜ。すっげえ美人だし」

戦う事でしか自分のアイデンティティーを保てず、迫害のせいで公には戦えず……

そのなれの果てが、テロリストってワケか。

カツェは捕虜の俺に、自分たちへの理解を促そうと喋ってくれたみたいだが……

賛同は、できないな。

俺は武偵。テロリストは敵なんだ。米軍みたいに悪即斬ってワケじゃないが、武偵法に則って強襲・逮捕する。どんな哀れな理由があろうと、情状酌量するのは裁判所の仕事。

そこは譲れない一線なんだ。俺たちにとっちゃな。

だがまあ、俺も、血も涙もない鬼じゃない。だから今は、何も言わないでおいてやる。

――大切な水を分けてくれた、誇り高き厄水の魔女への礼儀としてな。

# 5弾　歌う鉄十字の虎（パンツァー・リート）

その夜、ボロボロの状態でシャモニーの街に辿り着くと……

そこはフランスとスイスの文化が混ざったような、観光地っぽい所だった。

カツェがヨロヨロと入っていった古いホテルはドイツ語が通じ、俺たちは通常の客には貸さないらしい3階のスイートルームに案内された。

内装は純ドイツ風で、シカの頭の剥製やら柱時計やら、何もかもが懐古的だ。

壁には、スパイク兜を被ったビスマルクの肖像画が飾られている。なるほど、ちょっと過剰に親独的なお宿ってワケか。カツェの服装を見ても驚かなかったワケだぜ。

それから俺たちは食堂でチーズフォンデュをドカ食いし、スープを一気飲みし、暖炉のあるホールで休息する。おかげでやっと……生き返ったよ。

カツェは、電話で味方と連絡を取っていた。

俺の携帯は、とっくに取り上げられている。取り上げたカツェは、日本の珍しい携帯が気に入ったのか……時々取り出して、テトリスのアプリを起動してみたりしてるよ。



窓の外は、呆然としてしまうほどに美しい星空だ。

（逃げようと思えば、逃げられそうなんだが……）

カツェは俺を、捕虜だと言っていた。

となると、このまま拠点に連行すると見て間違いないだろう。兵器の材料を運んでいた部下たちと合流するなら、進撃を中断して『兵器庫（アルゼナール）』に集まる可能性も大だ。

よし。毒を食らわば皿までだ。神妙なフリでついていき、敵情（てきじょう）を探ってやろう。

敵に肉薄しておきながら手ブラで逃走したら、校則違反だしな。

という腹を決めた俺は、とりあえず友好的な態度を取っておこうと思い――

ホールのソファーの隣にいたカツェの顔にドロがついていたので、

「おいカツェ、カワイイ顔が台無しだぞ」

と、小学生ぐらいの女の子の世話をしてやるようにハンカチで拭いてやる。

するとカツェは――

「か……かわ、かわいい……？　あ、あたしがかわいい？　そそういうこと言うな！」

アリア並の急速赤面っぷりでいきなり真っ赤になって、べち！
ちっこい手で、ビンタしてきた。
なんでか知らんが、逆効果……っ。出たぞ万国共通、通常時の俺の女の扱いの下手さ。
そんな俺とのコントをやってから部屋に戻り、内鍵を掛けたカツェは……
俺をエドガーに見張らせて、自分はベッドで高イビキ。ジャンヌほど優しい女ではないので、俺は今度こそ床で寝るハメになった。だが、まあいい。寝れるうちに寝ておこう。体力を回復させとかないと敵情視察もできないし、後で逃げるのも覚束なくなるしな。
と、俺もうつらうつらしていたら……数時間後。
どこかどかっ、という軍靴の音で目を覚まされた。足音は……5人。
それで起きたカツェは、急いで制服の襟を正し——扉を開け、
「——万歳！」
「勝利万歳！」
どうやら救援に駆けつけたらしい手下の少女たちと、ビシッとナチス式敬礼で挨拶した。



それからは、キャー！　と、囲まれて大喜びされてるよ。
いきなり普通の女の子っぽくなったな。みんな。
女子っぽいムードがキライな俺は、仏頂面でその一同を眺めるが……
カツェは後輩の面倒見はいいらしく、1人1人に声をかけ、笑顔でハグしてやってる。
子分たちも、カツェが大好きな様子だ。それなりに人徳もあるんだな……カツェは。
ていうか、魔女のタマゴと思われる下上官の皆さん、俺の事をギロギロ睨むのはやめてくださいよ。これ以上魔女に目をつけられたら、たまんないんだから。

翌朝、俺は兵員輸送用らしいトラックに乗せられ——
アルプスの中腹にあるシャモニーから、カツェたちと西側へ下山していった。
それから車両輸送列車を乗り継ぎ、さらに西へ向かう。事故があったからか、飛行船は使わないな。やはり俺のせいでイタリア侵攻は中止し、一旦みんなでどこかの拠点に撤退しているようだ。まあ、それだけでも俺は1つ、敵の出足

を挫く戦果を挙げたって事だな。

そうして、丸々半日は移動した挙げ句――

夕方、俺は目隠しをされてトラックを下ろされた。そして妙な乗り物に後ろ向きで座らされる。バイクみたいな音を上げた、これは……ケッテンクラートか。その後部座席だな。

ケッテンクラートは何台かで車列を作り、とても車では行けない悪路を進む。それから……どうやら艀らしい、揺れる道に入った。

水蒸気のニオイがする。だが、海じゃない。湖の上を渡っているんだな。

そして最後に石畳の道を少し進んでから、全車、停車した。

「よし遠山。降りろ」

カツェが俺の目隠しを取ると――そこは石造りの古城。その車寄せだった。

トラックでも悠々と通れそうなアーチ形の短いトンネルが、館内へ続いている。

トンネルの左右、垂れ幕みたいなナチス・ドイツの長旗の下には……カツェを出迎える少女兵たちがキヲツケの姿勢で数人ずつ並んでる。そしてその奥、館内に――



「……ッ！」

とんでもない物は見慣れたハズの俺が、それでも腰を抜かすような物が見えた。

（――ティーガーI……！）

ナチス・ドイツ軍が世界に誇った、世界で最も有名な重戦車。

それが、格納されていたのだ。

当時の連合軍を震え上がらせた世界最強の主砲・88㎜砲。角張ったそのフォルムは現代的ではないものの、戦車砲・対戦車砲を豆鉄砲のように弾き返したという強靱な装甲。

砲塔番号は、１３２。チュニジア戦線用のカラー、砂色をしている。

それにしても、戦車、だなんて……！

（こ、こんな物を堂々と保有できるワケが……）

本当は一目で実車だと分かっていたが、一縷の望みをかけて近付くと……見上げるほど巨大なそれは、やはり本物だ。ハリボテじゃない。しかも稼働が可能な状態らしいぞ。

「……!?」

そこで気づいたが、周囲には他の戦車もある。イギリスのMk・Ⅷ巡航戦車、旧ソ連のT―34中戦車、アメリカのM4中戦車。二次大戦時代の名戦車がズラリだ。日本の九五式軽戦車まであるぞ。

キツネに化かされたような気持ちで、戦車群を見回していると――

『MUSÉE DE LA GUERRE ECOLE』

Musée……英語だとMuseum……博物館、と書かれた看板が目に止まった。

『戦車に乗れるよ！　主砲で的当てイベントもやるよ！』的なイラストが描かれたパンフレットもだ。

それで、分かった。

ここは――

戦争博物館、なのだ。博物館としての運営も本当にしているのだろう。

つまり博物館を兼ねる形で偽装した、カツェたちの……『兵器庫』……！

なるほど。考えやがったな、テロリストどもめ。ここなら武器をゴロゴロ置いておける。

ヨーロッパではタブー視されている鉤十字旗だって、平然と垂らせるって寸法か。



「おい」

カツェに肩をチョンチョンと突かれたので、振り返ると――

なんか、手のひらを上に向けて差し出してきたな。お年玉ならやらんぞ。

「……何だよカツェ」

「入場料。8ユーロだ」

「取んのかよ……」

「ほらよっ、チケットだ。記念のスタンプも押してやる」

俺はカツアゲ気味に10ユーロ札を取られ、裏面に逆卍印のスタンプをされた券をもらう。

お釣りの2ユーロ硬貨は、返してくれたが……俺は、チケットをもてあます。

「……このスタンプ。逆卍は、ヨーロッパじゃ町中で出したら逮捕されるんだろ？」

「そうさ。つまり、ナチス・ドイツが未だに怖れられてるって証拠だ。百年後、千年後の世にも恐がられるなんて、魔女にとっちゃ名誉な事なんだぜ。ケケケ」

笑ったカツェは、自陣に入ってすっかりリラックスしてる。俺は落ち着かないけど。

ていうか……この城の中。博物館として見ると、けっこう展示が上手いよな。入場者の度肝を抜く位置に目玉のティーガーを配置してるから、入場料を払いたくなるし。奥にはV—1ミサイルがチラ見えしてるし。

……ちょっと、見学してこうかな。金も払ったんだし。あっ、武藤がプラモで作ってたヤークトパンターもあるぞ。アイツが来たら狂喜するだろうなここ。いたらいたで、蘊蓄垂れるのがウザくて途中で殴ると思うけど。

もちろん見学はさせてもらえなかった俺は、代わりに要塞じみた地下——おそらく魔女連隊の司令室と思われる、薄暗くておどろおどろしい広間に連行された。

おーおー。怖いね。いかにも魔女のアジトってカンジだぜ。ホラー系が大嫌いなアリアなら、今ごろホバースカートを全力噴射して逃げ回ってるとこだな。

まず、この司令室……周囲には水晶ドクロの燭台が幾つもあり、蝋燭が灯されている。

壁には、俺ですら知ってる有名な西洋魔術の体系図——生命の樹の絵と、ナチス時代の上級軍人らしい男女の肖像画が2枚、恭しく掲げられていた。



肖像画の男は、どこかで微妙に見覚えがあるんだが……思い出せないな。

絨毯の上、暗がりからギロッと俺に一瞥をくれたのは——黄金色の目をした黒豹。

七色の不思議なシャンデリアで照らされた室内には、黒いオーク材の細長いテーブル。

そのテーブルの左右について起立している、ナチス制服に魔女帽の若い女たち。

帽子を再支給されたカツェを含め、6人。あと1人、奥にタイプの違うのがいるが……

どれもこれも可愛かったり美人だったりなのと、マイクロミニのタイトスカートなのはいただけないな。

そして……全員、デキる感じだ。

さっきまでカツェを取り巻いてた魔女のタマゴたちとは、ムードが違うね。

（襟章もみんな、佐官以上——魔女の幹部会議、ってワケか）

中でも一際目立つのは、お誕生席——一番奥の席から、皆を蒼い目で睥睨している20歳ぐらいの女だ。コイツだけ魔女帽じゃなくて、ステレオタイプなナ

チの軍帽を被ってる。
襟の徽章は――左右共に柏葉3枚、星章無し――少将。将官クラスのお目見えか。
ワンレングスの長い金髪をした、震えるほどの美女だ。真紅の口紅も似合ってる。背もスラッと高くカッコいいが、惜しむらくは、目つきが鋭くて怖いな。サディスティックなのが好きな男なら、泣いて喜ぶタイプかもしれないけど。
――その女が、
「万歳！」
例の敬礼を略式でやると、カツェを含む6人の魔女も「万歳！」とやってから着席した。
そのナチス式敬礼も見飽きてきたな。最初は新鮮だったが。
などとシラケる俺は、次席のカツェの後ろに立たされている。
「さて……客人がいるから、今日は日本語で話しましょ」
首席の少将がそう促すと、
「西方大管区フランス管区所属、魔女連隊――連隊長カツェ＝グラッセ、帰参しました。紫作戦は中断。中途戦果に基づき、連隊内に捕虜を得ました。軍規に基づき、



で独自に処分します」
カツェはハキハキと発言し、俺を戦果扱いしてる。
「ご苦労。極東戦役は魔女連隊の私闘争。報告は不要とされてるけれど、お耳に入れれば総統閣下もお喜びになるでしょう」
気位の高そうな声でそう言った少将は、きろっ。俺の方にその切れ長の目を向けた。
「遠山氏。私はイヴィリタ・イステル。この子たちのお守り――長官を務めている者よ。日本とドイツは友好国、歓迎いたしますわ。日本は東郷平八郎、野口英世、宮沢賢治など優れた人物を数多く輩出している偉大な国。私は尊敬していてよ」
いつの時代の話をしてんだよ。70年前からタイムスリップしてきたみたいな女だな。
「……そこの、油絵。ヒットラーさんのでなくていいのか？」
彼女の背後高くに掲げられている肖像画に、俺がツッコむと……
「歴史の勉強が足りていなくてよ、遠山氏。魔女連隊はヒトラー総統の配下ではあれど、陪臣。始祖と仰ぐのは大魔女、ヒムラー長官直下、戦嵐の魔女イル

メリア・イステルよ。私の曾祖母の、ね。その夫は2代目イ・ウー艦長、ゲルト・イステル」

昔のイ・ウー艦長……その、子孫か。イヴィリタ――この美人さんは。

それで思い出したが、イ・ウーにあった歴代艦長の墓にもナチス・ドイツ軍人の遺影はあった。あの男の曾孫って事か。

あと……話の端々から見えてきたが、イヴィリタ長官は――

おそらく現代のナチス・ドイツ残党、その本部から派遣されてきた目付役だ。

私闘争や捕虜の独自処分を許容し、報告すら不要とするあたり……会社に喩えるなら、魔女連隊から見ると持ち株会社のような本社から来たお飾りの役員。

総統閣下とやらは、本社の会長。カツェは子会社のタコ社長ってとこだ。

ジーサードも言っていたが、小さくて古ぼけていて……そして強い、ナチス・ドイツの継承結社は世界に幾つもある。魔女連隊はその1つだ。

それらが各結社個別に活動してるって話だったが、ナチス同士、グループ会社みたいな弱い繋がりを持ってるのもいるんだな。

（それと……ここの、魔女たち……人種がバラバラだな）

瞳や肌の色もまちまちだし、髪は魔術の影響なのかアニメみたいに色とりどり。



純粋なゲルマン民族っぽいのはイヴィリタ長官ぐらいで、東欧系、北欧系、南米系やトルコ人っぽいのもいる。

ナチス・ドイツというと未だに人種差別主義を貫き、第三帝国を夢見ているイメージがあったが……そうでもなさそうだ。

まあ、今時そんな事言ってたら人材も確保できないだろうからな。カツェがただでさえ人材難っぽいんだから。

実戦部隊のリーダーやってる時点で、たぶんファシズム、いや……あらゆるイデオロギーは、もう時代遅れ。そして世情に合わせて変質していくのが組織ってもんだ。

この伝統芸能みたいな制服は、バラバラな構成員に統一感を持たせ、気分を引き締めるためのファッションに過ぎない。対外的には、ある種のカモフラージュの役割も果たす。そこを見誤ると、米軍みたいに足下を掬われるって事だ。

そんな俺の考えを視線から感じ取ったのか、イヴィリタが魔女連隊について語る。

「――私に魔術の才能は遺伝しなかったけれど、彼女たち戦魔女は中世から戦う事を生き甲斐としてきた、武門の末裔でしてよ。先の戦争ではドイツ中の魔

女がそれまでの因縁を捨て、手を組んだ。魔女連隊はそれを継承した、栄える部隊なの」

……武偵流に言えば、戦闘狂たちの仲良し同盟ってワケか。それもS研系の。

「魔女連隊に――主義主張はなくてよ。ただ純粋に戦いたいだけ。資金があって、戦場があれば、それで十分。香港攻撃も、アメリカの某有力者が中国への釘差しをご希望されてたから……そこの利害が一致した本部から、予算を少しばかり分け与えましたの」

まあ、『真空爆弾』は俺たちが食い止めたにせよ――

お前らは、中国当局に恐怖を与える事はできたよな。

悔しいが、半分成功ってとこだ。俺たちへの攻撃と兼ねて行った、あのテロは。

「戦う事しか能がないナチの亡霊が、戦う理由を探して彷徨って……今じゃテロリストか。まあ、末路としてはさもありなんだ。そうなるしかなかったのかもな、お前らは」

あくまで強硬な態度で臨む俺に、イヴィリタは早くも少し眦を吊り上げる。

「遠山氏。口の利き方には、気をつけた方がよろしくてよ。東洋の将棋では、



取った駒は味方になるというけれど……西洋のチェスをご存知でしょう？」

チェスの駒は――敵の手に堕ちれば、もう甦る事はない。殺されるって事だ。

……向こうがそういうつもりなら、この辺が潮時だな。

敵情も少しは把握できたし、兵器庫の正体も判明した。撤退を視野に入れて行動しよう。

「言いたいことがあるならハッキリ言えよ。殺るつもりか？」

「ホホッ。貴男は、藍幇で歓待を受けても寝返らなかったそうだし――私たちは、客人をおもてなしする交際費は持ち合わせておりませんの。さて、どうしましょ」

「接待はいらないよ。ビールは飲まないんでね」

俺だって、全くの無策でここまで来たワケじゃない。

ヒステリアモードじゃない、普通の頭で考えた策だが……

ここは『ヒステリアモード時のように』、自分がケタ違いに強いフリで話す。

良くも悪くも、もう俺はこういうアンダーグラウンドな世界じゃ有名らしいからな。

要はハッタリでビビらせて、切り抜けてやるさ――

「じゃあ降伏なさる？　掲げる白旗が無いなら、私のガーターをあげてもよろしくてよ」

「そんなもんいるか。逆だ。魔女連隊が降伏してアリアの殻金を返すなら、ここは見逃してやる。言っとくがここの7人ぐらい、俺は素手でも全員ソーセージにしてやれるぞ」

という発言が、いきなり痛恨のミス。

俺の発言の冒頭に眉をツリ上げたイヴィリタは、その後をまるで聞いてない調子で――

「――じゃあ処刑ね。今のは、泣いて悦んで命乞いすべき所でしたのに。お馬鹿さん」

アリア並の短絡的な思考回路で、死刑宣告。

……やっちまった。ハッタリ、大失敗……ッ！

俺は女が相手だと、ミスばっかだ……！　ていうか『お前のパンツなんかいらない』になんでキレるんだよ長官。ニコニコ顔だけど、額に血管浮かべてるし。ちょっと逆卍形の。

ブラフも何もなく俺が青ざめたその時――サッ。カツェが、挙手した。



「お、恐れながら発言します。イヴィリタ様」

「あら。なぁにカツェ」

「遠山は信頼に足る人物です。旧同盟国の人間でもありますし、仲間に入れるべきかと」

語るカツェは、ナナメ後ろから見ても分かるぐらい額に汗をかいている。

ここは軍隊調の集団だからな。上官に物言いするのは命懸けらしい。

「カツェ。背信はお仕置きよ？　お仕置きって分かる？　私に拷問されちゃうのよ？」

「こ、この男は私のエドガーを救ってくれました」

「……何。どういう事。詳しくお話し」

と、長い背もたれのイスにふんぞり返ったイヴィリタに――

カツェはモンブランで遭難した際、俺がカツェに大ガラスを返してやった話をする。

そのストーリーに……途中から前のめりぎみになったイヴィリタ長官は、

「……おお……」

ナナメ上を向いて目を閉じ、つっ……と、切れ長の目から一筋の涙をこぼし

た。

そして赤いハンカチを出して、ビシッとキメたメイクが崩れないよう涙を吸い込ませる。

なんか……感動……したみたいだぞ。

俺がカラスを助けて、返してやったってだけの話なのに。

イヴィリタは、しばらく感じ入るように考えてから……

「……そう。そうでしたの。敵でなければ騎上十字章ものの話ですわ。遣い魔とは魔女にとって第2の命。それを救った遠山氏には、勲章の代わりに恩赦を与えましょう」

ぐすんぐすん、びぃー、とハンカチで鼻までかんでる。

割と……涙もろい女なんだな。イヴィリタ長官。

「では処分を変更。思想教育を施し、テロリストにしましょ。男なのは気に入らないけど、そこはロザンナ。お前が手術しちゃいなさい」

イヴィリタに命じられた、それまで黙って話をこわごわ聞いてた丸メガネの魔女が――

「はい！　勝利万歳！」



いきなり物凄くワクワクした表情になって、三つ編みのお下げを振り上げるぐらい元気よく敬礼した。そして「手術だ手術だ、美人を造るです、ウフフフフ」などと呟いてる。

手術……って。何だ。俺に何をするつもりだよ。怖すぎんぞ。

仮面ライダーの怪人みたいにされんのか。ちょっとやそっとの恐怖には（主にアリアのせいで）慣れっこの俺でも、マジで怖いんだが。

震え上がる俺を嬉しそうに眺めたイヴィリタは、キッ、とたたずまいを正す。

「――ホホホ。世界で一番賢いのはだぁれ？」

その質問に、魔女たち6人も背筋を伸ばし――全員で、

「イヴィリタ様です！」

唱和してる。

「世界で一番美しいのはだぁれ？」

「イヴィリタ様です！」

「以上！　解散ッ！」

な、何だか分からんままに、軍議は終わったみたいだが……

イヴィリタは俺を殺さず、利用するつもりらしいぞ。また面倒な流れになっ

てきたな。

改めて手錠をされ、1階の小部屋に監禁された俺は……ベッドに座って、途方に暮れる。

もうこりゃ、逃げの一手だな。このままじゃ何をされるか知れたもんじゃねーし。

窓は小さいが、頭は通りそうだ。遠山家の秘技『骨克己』――自己脱臼・骨折技で全身バキバキにしちまえば抜けられない事もないだろう。死ぬほど痛いだろうけど。窓の外の鉄格子は、頭突きでなんとかするさ。

などと、末期的な脱出法を検討していると……

――ガチャ。

ノックも無く、部屋に制服姿のカツェがやってきた。

ちょっと緊張したような表情、かつ、恥ずかしそうに赤らめた顔でドアを閉めたが……

なんか誰かに外側から押されて、ちょっとスキ間が出来たな。ドア。

カツェはそれに気づかなかったらしいが、そのスキ間からは……さっきの魔



女たちが、揃って室内の様子をコソコソ窺ってるのが俺には見えた。

状況はよく分からないままだが、

「……さっきは、どうもな」

俺は一応、エドガーの話で命を救ってもらったお礼を言っておく。

「ドイツ魔女は借りを必ず返す。あれは山で……その、あ、温めてもらったお礼だ。でも、もうこれでチャラだぞ。あたしに捕虜に助けられたという不名誉は、もうない」

赤い顔のまま、カツェは、ぽふん。

ベッドに座る俺の隣に、座ってきた。やたら、真っ隣に。

なんかシャンプーと石鹸のニオイがするぞ。カツェの少女っぽい甘いニオイと共に。

「それにあれは、イヴィリタ長官をお助けしたつもりでもある。お前は、殺そうとすると大抵ヒドイ反撃を受ける――『呪いの男』って呼ばれてるからな。眷属の一部じゃ」

……イヤなアダ名が増えたな。まだ『呀』の方がマシだね。

などと顔をしかめつつ、さりげなくカツェから距離を取って座り直すと……

カツェも、こっちにスライドしてきた。
そして胸ポケットから酒入れを出し、
「遠山。お前も一杯やれよ」
カツェは耳まで赤くしてそれを渡してくるが……酒が効いたにしては、早すぎるな。
「酒は毒水だって、ヒトラーが言ってたハズだぞ」
「き、緊張してんだよあたしは。つべこべ言うな」
と、煙草も出した。不良娘だなぁ。
なぜか手が震えてライターが点けられなかったカツェはそれを放り、腹を括ったような顔で――
「お前の魔女化……手術をやめさせる方法があるぜ。イヴィリタ様は、魔女の遣い魔には甘いんだ。エドガーも、お前になら遣い魔の座を譲ってやってもいいって言ってるしな。お前は既に呪いの男なんだから、素質も十分ある」
「話が全く見えないんだが……手術とやらをやめてもらえるなら、ありがたい」
「よし。盟約の契りだ。これを人間の男を相手にするのは、一人の魔女が一生に一度しかできない。イヴィリタ様だって、まだピューマを遣い魔にしてるぐ



らいだからな。動物や鳥を遣い魔にしてるのは、少女の証なんだ」
――むぎゅ。
と、顔面を押しつけるようにして――目を閉じた、カツェが。
いきなり……キ、キスしてきたぞッ……！　なんでだ！
「むぐっ……おいっ……なんだよッ……何するつもりだ！」
ベッドを壁際まで逃げた俺に、四つんばいになったカツェが――ジリジリと、迫り来る。
「分かるだろ」
「分かんねーよッ……！」
「みんな廊下で聞き耳立ててるけど、まあそれは許せ。そういうもんなんだ」
ネクタイを外したカツェは、襟首から順に――きつそうな黒制服のボタンも外していく。
キ、キ、キスだけじゃ済まなさそうだぞ、この流れ……！
「おとなしくしてろよッ、すぐ終わるって話だからよ！」
がばっ！
制服の胸元を全開にしたカツェの、アリアより若干マシぐらいの、小さな――

——真っ赤なレースの下着に包まれた胸が、俺の顔面に押しつけられてきた。
や、やばい。甘い、甘い、いいニオイが……！
事ここに至って、さすがの俺にもこの行為の意味が分かってきたが——こ、こういうのムリヤリにってのが、女から行われる場合もあるとは。だが思い起こしてみると白雪とか理子とかジャンヌにされかけてましたね俺。忘れたい記憶だから意図的に忘れてたけど。
「家訓にもあるんだ。命を助けてくれた相手と、む、結ばれろって……」
俺の頭を胸に抱いたカツェが——今までになく、切ない喋り方をして——

その声と、こういう体つきの子にはギブアップしやすいらしい俺の血流が…

……。

……ドクンッ……！

大きく、体内を暴れた時。

「……？」

カツェが、がば。俺から胸を離した顔で、上着を着直してる。

そして……「？　？　？」と混乱した。

その理由は、俺にも分かった。

――寒い。

室内の気温が、急激に下がっているのだ。

そして……キラ……キラ、キラ……と。

室内に、ダイヤモンドダストが舞い始めた。

振り向けば、窓やその周囲の壁が凍り付いている。

その氷が、パキパキと広がっていく。そこから室内に、冷気が伝わってきているのだ。

この光景は……見た事がある。5月、あの地下倉庫で。技の日本名も後に本人に聞いた。



（『オルレアンの氷花』……！）

ベッドに立ち上がったカツェ共々、窓の外を遠巻きに見ると――

ここまでは押してきたらしい側車付きバイクにヒラリと跨る、

「……ジャンヌ……！」

通信機を付けた銀氷の魔女、ジャンヌの姿があった。

「て……敵襲！　ジャンヌ・ダルクだッ！」

つい日本語で叫んだカツェに、ドアのスキ間から室内を覗いていた魔女たちが騒ぎ出す。

ここの倉庫から盗んだらしいサイドカーをスタートさせたジャンヌは――

遠ざかり――逃げると思いきや、小石を巻き上げてターンした。

そして、ごそっ……

サイドカーに載せていたメーヤの大剣を全力で持ち上げ、こっちに向けて構える。

そして馬上槍のように大剣を構えて、ドルルルル……ッ！　バイクで、突進してくる！

まさに女騎士といった風情のジャンヌは――ゴスンンンンンンッ!!
鉄塊のような大剣から轟くような音を上げつつ、凍結で脆くなっていた壁を思いっきりブチ破ってきた。前輪が室内に入り込むほどに。
室内は窓と石壁の破片で、爆破されたようにメチャクチャになる。
（……あっぶねー……！）
ジャンヌは、勢い余って俺の事も串刺しにしかけた大剣を、ブウンッ、ゴスッ。両手でなんとか回してサイドカーのケツに突き刺し、その重みでズルズルとバックしていく。
「遠山。フォロー・ミーだッ！」
壁には大きな穴が開き、自分で自分を脱臼・骨折させずに済んだ俺は――
ヒステリアモードの素早さで、勇ましく叫んだジャンヌのサイドカーに飛び乗る。
カツェはジャンヌの突撃で壁の破片を頭に喰らったらしく、大股おっぴろげてひっくり返ってる。頭をカラスのヒナがピヨピヨ周回してる感じで、見事に失神してるね。
実は一緒に覗きを楽しんでいたらしいイヴィリタ長官が、自動拳銃C96を振り上



げて室内に駆け込んできたのと同時に……
ジャンヌは射撃線を避けるようにターンし、華麗なレバー捌きでバイクを急加速させていく。石だらけの道を跳ねながら、既に氷の退路を作ってある――湖の、方へ。
魔法のように――というか魔法なんだが、ジャンヌが通るなり後ろで溶けていく氷橋を尻目にバイクが疾走する。これなら、ケッテンクラートも追ってこれないだろう。湖には艀が架かっていたが、あれは俺たちの逃走路とは全く別の方向に伸びたものだしな。
「璃璃粒子の濃度はどうなんだ、ジャンヌ。お前、魔術を使えてたみたいだが……」
「さっきまでは台風の目のような所に入って薄まっていたが、また濃くなってきている。本格的に晴れるのは、明日以降だろう。もう魔術はこれ以上使いたくないところだ」
それは敵もそうなのか、ホウキに乗って空を追ってくるのはいないな。
火の玉を飛ばしてきたり、雷を落とされたりする様子もなさそうだ。

「接近や魔術の大技を気づかれるかとも思ったが、運が良かった。魔女たちには何か別の、もっと集中する事があったらしい。たとえば色恋沙汰とかな」

「……それは後で自己弁護させてもらうよ」

魔術を使いたくないとなると、今は何か兵装を整えているってとこかな？

敵さんは。

だが、どんな武器でも持っておいで。今の俺はヒステリアモード――

――パッ！　バイクのバックミラーの中、遠ざかる城側で閃光が――

「頭を下げるんだジャンヌ！」

――ヒュンッ――

――ドオオオオオンッ……ドォンッ……――！

火の玉のような、マッハ2の砲弾。

雷土のような着弾音と、ほんの一拍遅れての砲声。

続けて、ざっばあああああああ――ッ！

俺たちの左、湖の水面が、どんな噴水よりも高々と水を弾き上げた。上空まで。

――バシンッッ！



空気と水を伝わってきた衝撃に、ジャンヌがハンドルを持って行かれたのを見て――俺は大剣を持ち上げ、即席のバラスト・スタビライザーにしてなんとか転倒を免れさせる。

「8・8cm砲か……ッ！」

銀髪を跳ね上げ、砲音からそれが分かったらしいジャンヌがアクセルを引き直す。

2人でバックミラーを見ると――キュラキュラキュラキュラキュラ……

（あー……『どんな武器でも持っておいで』とかイキがっちゃったけど……）

それは、ちょっとどうかな。さすがの俺でも。いつかやらされるとは思ってたけど。

キュラキュラキュラキュラ……とキャタピラ音を上げて、城の門から、出てきたぞ。

鉄十字の猛虎。走る要塞。重戦車の魔王。

――ティーガーⅠ、が……！

（あれを暖気してたんだな。魔女連隊は……！）

初弾は外れたものの、それはあの年代の戦車で考えれば常識。2弾目は――

――ヒュンッ――

――ドオオオオンッ……ドンッ……！

さっきと逆の、右側に当たった。

またもひっくり返りそうになるバイクだが、サイドカーだったおかげもあり、辛うじて走り続けている。

「左右に当てて、角度調整してきてる。次は当たるかもね」

「単車は小さな目標だ、そうそう当たるものではない」

「榴弾じゃなかったのは不幸中の幸いだね。マト当てに使う徹甲弾しかないみたいだ」

湖を渡りきり、身を隠すべく林に入りつつあったバイクは――急加速する。

次の瞬間、

――ドオオオオンッ……――！

3発目が真後ろの湖畔に着弾し、飛び散った石を後ろに何発ももらって――

破裂音を上げて、バイクの後輪がパンクしてしまった。ホイールもひしゃげてる。

ザザァーッ、と滑る単車からジャンヌが受け身を取りながら転落し、俺も大



剣を抱えてサイドカーを飛び降りる。

ここからは……少し走れば、もう林だ。

い。

地面を擦る土煙を上げてジャンヌの横に静止すると、ポン。

俺の頭に、ジャンヌが俺用のインカムを付けてきた。

「仲間の誘導がある。皆に続けだ」

『そのまま走ってください。距離は約170m』

「早く来てくださいですのー！　ティーガーの次弾装填は間に合わな

この声は……コンステラシオンの、島ちゃん……！　彼女も加勢に来てくれ

たのか。

ともあれ急ぎ、林に駆け込んでいくと……

「悪かったな遠山、無粋な救出作戦で。カツェと仲睦まじくしていた所を、お

邪魔した」

またちょっとトゲのある言い方で、ジャンヌが言ってくる。

「それはそうとよく見つけてくれたね。こんな所……えーっと、どこだろう？

ここ」

俺が話を逸らしつつ訊ねると、

「ルクセンブルクのエコールという地域で、ベルギーとの国境付近だ。お前からの連絡が長く途絶えたので、中空知を呼び寄せて探したのだ。私も初代ジャンヌ・ダルクの部下の子孫に頼んで、LUXGSM社の携帯電話セル情報から場所を割り出させてもらった」

携帯電話という物は……

たとえ通話していなくても、基地局アンテナと自分を電波で接続している。つまり電源が入っている限り、大体どの辺りにいるかの逆探知が可能なのだ。カツェは……日本の携帯を珍しがって、電源を入れっぱなしにしてたのがアダになったな。

とはいえ、その逆探知には高いネットワーク技術と――何より、電話会社の協力が要る。

それを、中空知とジャンヌが成し遂げてくれたんだ。それぞれ、努力して……

……

――敵に囚われていた、俺のために。



コンステラシオンの監査役になった時、俺は……

チームのみんなを、侮っていた。仲間だというのに。

見くびっていた。ポンコツだらけのチームだ、などと思いさえした。

でも……ああ、なぜみんなを信じられなかったんだろう。

こうして助けられて、反省したよ。心の底から。

武偵憲章1条。仲間を信じ、仲間を助けよ――

それを胸の内で復唱しながら、俺はジャンヌと林へ入っていった。

身を隠しながら抜け出た、林の向こう側で俺たちを待っていたのは――

（……こっちにも、戦車……！）

ティーガーから見れば遥かに小さいものの、アイドリングしている本物の戦車だった。

だが――それは味方の物らしく、ジャンヌが駆け寄っていく。

「車だと見つかりそうで、国境からは徒歩で来たのだが……運良く、ヤツらの兵器庫から戦車を盗めてな。見張りは居眠りしていたので、クロロホルムを嗅がせるのも楽だったよ。私はB1戦車がよかったのだが、すぐ稼働できたのは

これだけだった」

などとジャンヌが説明してくれた、それは……

旧・大日本帝國陸軍の――九五式軽戦車。

自動車みたいなサイズの、3人乗り戦車だ。

砲や装甲はティーガーに比べればオモチャみたいな代物だが、こう見えても

マレー作戦では敵装甲車を蹴散らして縦横無尽の活躍をした正真正銘の戦車。

機械的な故障も少なく、悪路にだって強い。前方に広がる荒れ地をティーガー

に追われつつ突破するなら、ただの車より頼もしい事は火を見るより明らかだ。

「お前の救出作戦にはメーヤとワトソンも加わっている。中空知と共に、ベル

ギーで待機しているところだ。カツェたちにはルクセンブルクの政治家にシン

パがいて、この国ではやりたい放題らしいのだが――ベルギーでは、ヤツらは

お尋ね者だ。国境線まで逃げおおせれば、ティーガーも追ってはこられないだ

ろう」

メーヤが――援護してくれてるのか。

なるほど、武運に恵まれてバイクや戦車まで盗めたワケだよ。

「はい早く乗る！　出しますの！」



ぴょこ、と九五式戦車の前部出入口ハッチからリボンつきの頭を出したのは

――やはり、車輌科の島苺だ。兵器庫からここまで来れたという事は、戦車も

乗りこなせちゃうのか。

なりはちっちゃいが、大したもんだ。まるで九五式そのものだよ。島ちゃん。

転輪に足をかけて戦車によじ登った俺とジャンヌは――それぞれ、砲手と機

銃手として車内に入る。

「行けるかい、島ちゃん。全速前進で」

「はいですの！」

九五式では確か、砲手が車長を兼ねるので……砲塔から頭を出しつつの俺が

命じると、操縦席の島ちゃんは――バルバルバルバルバルッ！

九五式に小さいながらも戦車らしい爆音を上げさせ、土を巻き上げて走らせ

る。

オフロードを物ともせず、西――ベルギー国境めざして走り始めたその速度

は、大昔の戦車にしてはかなり出てる。車輌の状態もいいんだろう。あのティ

ーガーより、速いぞ。

月下の荒野を疾走する、その車内で――

「ですのですの！　今、私は大きい！　ですの！　ひゃっはーですの！」

ディーゼルエンジンの音に負けないぐらいの、島ちゃんの笑い声が聞こえてきている。

何やら興奮状態みたいだけど……さすが武藤のライバル。その操縦は、堂に入った物だ。

そのヒラヒラのお洋服に車内のあれこれを引っ掛けないかだけは、ちょっと心配だけど。

『――敵陣営の通信、傍受に成功。繋ぎます』

ベルギー国境で俺たちを待っているらしい、中空知の声がして――

『前進、前進！　撃て撃てーッ！』

インカムからは頭に血が上ったカンジの、イヴィリタ長官の声がした。

少将閣下もご搭乗なさってるんだな、文字通り虎の子のティーガーに。

湖を回り込み、メキメキと林の木々を踏み折ってきたティーガーは、ドオオオンッ！

自慢の88㎜砲をブッ放すが、程よくジグザグに走る九五式がそれを躱す。



月明かりの下――日独、戦車戦か。

枢軸国の戦車的には仲間割れだ。双方の英霊の皆さんには大変申しわけない。

『もっとちゃんと狙いなさいーッ！』

『首、首を絞めないでくださいイヴィリタ様っ！』

カツェの声も聞こえた。彼女も搭乗してるらしい。君は本当に苦労人だね。

月が一瞬陰った中、こっちの位置を確かめるために同軸機銃も撃ってきたので――

「撃たれっぱなしっていうのは、面白くないな」

俺が身を屈めてボヤくと、島ちゃんは……

「レプリカ実包でしたけど、37粍徹甲弾も3つありましたの！　初弾装填済みですの！」

ありがたい事を言ってくれるねえ。

俺は島ちゃんに教えてもらいつつ、砲塔を手回し式の転把でキリキリ旋回させていく。１８０度――後ろを追ってくる、ティーガーⅠの方へ。

逃げながらも砲口を向けてきた九五式の挙動に、ティーガー側は騒がしくなったが――

「目標、ティーガーI。光量不足……いや、月が戻った。距離、８００mぐらいかな？」

砲術・砲弾道学は強襲科（アサルト）の座学でしかやった事がなかったが、そこはヒステリアモード。

俺は肩で砲尾側から角度を微修正して、集中力を高めて――撃つ――！

――ドンッ！　という砲声（ほうせい）と反動に続き、若干（じゃっかん）の放物線を描いた徹甲弾は――

ティーガーの車体に命中したが、カァーンッ。

拍子抜けしてしまうような金属音を上げて、重装甲（そうこう）に弾（はじ）かれてしまった。

わははー、とティーガー側は笑ってるよ。

「……次弾装填する」

まあ、こうなると思ったけど。

というのもこっちは戦車戦より歩兵支援の方がまだ向いていた『軽戦車』。

あっちは戦車と戦うために開発された、ガチガチの『重戦車』だ。

向こうの88㎜砲が一発当たれば、こっちはオシマイ。

対し、こっちの37粍砲はどこに当てても弾かれてしまう。



距離も遠かったと言い訳したいところだが、37粍じゃ10mまで近付いたって無効だろう。

言うなれば、ちびっ子相撲（ずもう）と幕内（まくうち）力士で張り手の打ち合いをしてるようなものなんだ。

いま敵弾が近くにドンッと着弾したら、ピョンガチャンッ。ちょっと跳ねたし。九五式。

「砲撃の精度を上げてきたな。今のは危なかった」

と言う俺に、

「……感じる。向こうは――命中率を上げるような魔術を併用しているのだ。遠山（とおやま）。次は当てられるぞ」

「なんの！　避（よ）けきってみせますの！　国境の川はすぐそこですの！」

ジャンヌと島が、それぞれ返してくる。

２人の意見を総合すると――五分五分、ってとこだな。次撃たれたら。

だが、足はこっちの方が少し速い。ティーガーを次第（しだい）に引き離しつつある。

ベルギーへは遠回りになる車道を踏み越えて、さらに荒野を進み……ルクセンブルクとベルギーの国境となる細い川があるらしい地形も見えてきた。

あと1発、凌げば――逃げ切れるぞ。
などと考えつつ、2kgもない砲弾を再装填し終えた時……また、予想外な事が起きた。
「――!」
博物館の方から――潰された林を大きく跳び越え、サイレンのような怪音を上げて――
「……V……1ッ……!」
V―1――ナチス・ドイツが開発した巡航ミサイルが、飛んできてるぞ!
後方ナナメ上から、こっちへ!
こんな近い、動く対象も精密に爆撃できるなんて――ただのV―1じゃない。
電波誘導装置を積んだ改良品だろう。
あれの弾頭は確か、混合爆薬が0・85トン。
そんなモノの直撃を喰らったら、粉々になるぞ。九五式も。俺たちも。
「ッ……!」
――ドォンッ!



イチかバチか仰角を取り、37粍砲を放った。V―1めがけて。
だがあまりに急だった事もあり、砲弾は――V―1を僅かに掠めただけ――
とはいえ、軌道を少し変えて飛来し……ドオオオオオオオオオオオンッ!!
九五式の右後方に、紅蓮の炎を上げて着弾した。
命中は免れたが、爆発の衝撃や大波のような土をくらった九五式は、ズルズルッ――!
島とジャンヌの悲鳴が車内に響く中、その7トンの車体をスピンさせ……ほぼ180度、反対を向いてしまった。ティーガーの、方へ。
「こんのぉ……ですのっ!」
島は、その場で超信地旋回――してると追いつかれると判断したのか、それをやめて、車体をそのまま後退させ始めた。後ろ向きで走らせて、川まで逃げるつもりだ。
だが、V―1で履帯にダメージを被ったらしい九五式は……遅く、なっている……!
マズいぞ。この動きじゃまず間違いなく当てられる。ティーガーの主砲、88

mm砲を。

逃れられない。敵の今までの主砲再装填の時間から考えて、2発はもらわないだろうが……1発はギリギリ、しかし確実に喰らってしまう。こっちが国境を越える前に。

歯ぎしりする俺の耳に、ティーガーから――

「ジャンヌ・ダルク！　イ・ウーの落ちこぼれ！　お前には地獄の業火がお似合いだ！」

――メガホン越しの、カツェたち魔女連隊（レギメント・ヘクセ）の……合唱する、歌が聞こえてきた。

何だこれは。ひたすら、悪口の歌をがなり立てているが――

と思って、機関銃手のジャンヌを見下ろすと……

ジャンヌは――そのアイスブルーの目を見開き、

「……わ、私は……」

車体前部に付いている九七式重機関銃のグリップを握ったまま……呆然（ぼうぜん）としている。

どうしたんだ。様子がおかしい。



焦る俺（おれ）の耳にインカムから、

『ま、魔女どもの歌を聴いてはいけません！　それは「恐怖の歌」、戦時中にも使われた、敵兵の志気を挫（くじ）き、その次に内乱を起こさせる歌なのです！　魔力を持つ人間は、それを受信してしまう！』

こっちのマイクからそれが聞こえたらしい、メーヤの慌（あわ）てた声がする。

「ジャンヌっ……耳を塞（ふさ）げッ！　ヤツらのターゲットはお前だ！」

叫ぶ俺に、ジャンヌは――

すっかり術に飲まれた感じで、ガタガタと震えている。

「そうなのだ、遠山（とおやま）。私は……私は、策を巡（めぐ）らす女。それは、本当は……よ、弱いから。本当は、お前と共にあることも恥（は）ずかしいほど、弱いのだ……だから私は……私は……」

今やジャンヌは、その目から涙をこぼすほどに呪（のろ）われきっている。

「……！」

魔術に対抗する術なんか、俺は持ち合わせていないが――

次第（しだい）に追いついてきたティーガーは命中率を上げようと、こっちに合わせて減速しつつ……主砲を向け直してきている。距離は、４００m。撃つつもりだ。

必殺の、88㎜砲を。
その半分の口径もない37粍砲を備えた砲塔を、大急ぎで旋回させながら――
「――ジャンヌ！」
俺は、出せる限りの大声で叫ぶ。ヤツらの歌を、掻き消すように。
あの歌が、魔女の勇気を挫くものならば――
いまジャンヌに必要なものは、勇気。それだけだ。
勇気づけるんだ。銀氷の魔女、ジャンヌを。
そうすれば。
そうすれば、乗り切れる。
今ヒステリアモードの俺に閃いた、この方法で――
あの忌々しいティーガーの主砲を、克服できるハズなんだ……！
「ジャンヌ、あんなに言われっぱなしでいいのか！　侮辱されたら、仕返ししてやるのが騎士道なんだろ！」
「……遠山……」
『この世に充ちよ、新たなる感受、神聖なる祈願の印の下に、平和の騎上が寄り集う！』

インカムからは、メーヤの歌――
おそらく魔女の呪いに対抗する歌が、聞こえてくる。
「わ、私は……！」
ジャンヌの瞳に、あの強さが甦ってくる。
よし、あと少しだ。
「――島、停まれ。ティーガーと決闘するッ！」
「そ、そんな……何を言いますか遠山さんっ！　撃ち合っても、また弾かれますのよ!?」
「いいから停まれッ！　ヤツらは俺のジャンヌを侮辱した。俺はそれを、決して許さない。それに――もう逃げ回るのは沢山だッ、ジャンヌもそうだろ！」
ジャンヌの心を敵に奪われかけ、若干ベルセ気味になった俺が――車長として、車内に強引な命令を叫ぶ。
それに気圧された島は生唾を飲み、がこん、がこんっ。後退していた戦車を……
停車、させた。
今や九五式は、迫り来るティーガーと向き合っている。正面対決の構えだ。

「安心していい。砲撃戦は数学の戦い。数学の成績は、東池袋高校で少し上げてるんだ」

「……？」

涙目の島が震えながら、リボンの頭で俺を仰ぎ見てくるが……

よし。ジャマな走行振動もこれで無い。

そのお陰もあって、右往左往していたジャンヌの機関銃口が——ティーガーの砲塔やや上部に定まった。それでいい。

左前方には、V—1が上げた黒煙が立ち上っている。俺の怒りを表すかのように。

正面切って停車した俺たちに、ティーガーも——

『——停車！』

停車、した。距離は200m。戦車同上から見れば、ごく近距離で。

そして、88㎜砲が——

完璧に、狙いを定めてくる。

砲身の向きから、88㎜砲の弾道は読めた。

こっちの車体前面・上部装甲を問答無用でブチ抜き、バラバラに飛び散らせる・つもりだ。

（……散らせるものなら、散らせてみやがれ……！）

俺は——目を、閉じる。

そしてヒステリアモードの聴覚で、インカムのヘッドホンから敵情を探りにかかる。

集中すれば、今の俺には呼吸音や心臓の鼓動音まで分かる。そうする事で、俺の頭にはティーガーの車内が映像のように見えてくる。

そして、発砲のタイミングを精密に予測しようと試みる。コンマゼロゼロ1秒まで。

感じろ。ヤツらの殺気を感じるんだ。仕掛けてくる、その瞬間を。剣道の達人のように。

目をゆっくり開けながら、前方のティーガーに向け直した37粍砲につき——その砲尾の肩あてに、体を押しつけるようにする。

そして、狙う。

ティーガーではない、虚空を。

九五式軽戦車には、独特の砲架構造がある。それがこの、砲手が体で砲口を

上下左右に修正できる『肩当て照準』だ。
感覚的なその機構は、ヒステリアモードと相性がいい。おかげで……やれるぞ……！
俺は下にいるジャンヌの肩を膝で微かに押し、砲だけでなく機関銃も極僅かに修正する。
ジャンヌ。君は昔から、どこか自分に自信のないところがあった。文化祭で変装喫茶をやった時も、この欧州戦線に俺を巻き込んだ時もそうだったね。
君をイ・ウー時代から知る敵はそこにつけ込み、あんな歌で君の心を挫こうとしてきた。
その呪いにかけられ、君はその機銃の引き金を引けるか引けないか、きわどい瀬戸際にあるのかもしれない。
でも、武偵憲章1条――仲間を信じ、仲間を助けよ。
俺は、信じるよ。仲間を疑うのは、もうやめたんだ。
君が俺を信じ、呪いの歌に打ち勝ち……その引き金を引いてくれる事を、俺は信じる。
なぜなら君は、本当は強い子なのだから。それを俺は、あの5月、武偵高の



地下倉庫で痛いほど思い知らされているんだからね。
さあ――イヴィリタの、発声に向けた呼吸音だ――来るぞッ！
「――撃てジャンヌ！」
『――撃て！』
俺とイヴィリタの叫びに続き、ジャンヌの機関銃、ティーガーの砲、九五式の砲が――
――ヒステリアモードが見せる、スーパースローの世界で――
ほぼ同時に、ただし確実にその順番で放たれた。
一列になって空を飛び行く、ジャンヌの複数の機関銃弾。
放物線を描き、スピンしながら迫る、火の玉のような88㎜砲弾。
それらの軌道を完全に見切った俺が放った、37粍徹甲弾。
俺の砲弾が、ジャンヌが空にバラ撒いた銃弾の列に追いついていき――
夜空で次々と接触して、無数の火花を空に描く。
――星座の、ように。
機銃弾との接触により、肩当て照準ですら間に合わなかった最後の微修正を終えた37粍徹甲弾は――

ばきィィィィィんっ！

空中で、88㎜砲弾と激突した。下から、カウンターのアッパーカットを喰らわすように。

時間の流れが、戻り――

――ヒュボッ！

37粍弾に空中でバウンドして逸れた88㎜砲弾が、俺たちの頭上を流星のように駆け――

――ドオオオオオオンッ――！

国境線のギリギリ手前に着弾して、激しい地響きと土煙を上げた。

……やれたぞ！　砲弾による銃弾撃ち――

名付けるなら、砲弾撃ち。

我ながら、まさかの技だったな。

威力に劣る37粍弾で88㎜弾を跳ね返す事はできないが、当てればその軌道を逸らす事はできる。できるんだ。

そしてこれは、機関銃のサポートがあって初めて可能な技。砲弾は銃弾のおよそ倍速で飛来するし、砲口は銃ほど素早く修正できない。だから最後に、先



に撃たせた機関銃弾に砲弾を追いつかせて当てての微修正が欠かせなかった。

今回それをやってくれたのは――

「と、遠山……今の、は……」

アイスブルーの瞳をまん丸に見開いて俺を見上げてくる、美しい機関銃手。

「偉いぞ――ジャンヌ。君は本当に、強い子だった。俺1人だったら、今ごろこの戦車が俺たちの棺桶になっていたところだよ。ありがとう」

わあわあと驚く魔女たちの声が聞こえてくるインカムに苦笑いしつつ、俺はジャンヌを称える。

「や、やればできるものなのですねぇー……」

おっと。セリフを取られちゃったよ。ポカーンとしてる、島ちゃんに。

「簡単な数学だったさ。さて島、戦略的転進といこう。勝利条件は敵車輌の撃破じゃない。ベルギーまで行く事なんだ。あの国宝級のティーガーを壊すなんて、君も賛同できないだろう？」

「ですのですのー！　ティーガーさんとデートできて、一生の思い出になりましたの！　――あらよっと！」

島は九五式を華麗な転輪捌きで超信地旋回させ、改めて国境線の川へ向かう。

ガタガタ揺れる戦車内で、ジャンヌが、そっと……何も、言わず……

「……」

捧げ持った俺の手の甲に、その唇を付けるのが感じられた。

奇跡を起こした神の使いにそうする、初代ジャンヌ・ダルクのように。

幅1mほどの川を……越える。

ようやく追撃を諦めたらしいティーガーは、向こうで停車したままだ。ぎゃあぎゃあとヒステリーを起こしたイヴィリタ長官がうるさいインカムは、外させてもらうとしよう。

そしてベルギー領内、片側一車線の静かな車道の手前で……

無茶な運転もあったので、さすがにラジエーターの辺りからプスプスと煙を上げている九五式に別れを告げる。

――国境にフェンスや検問所は無かったが、国が変わった事は道路標識から分かった。

その車道に、中空知、メーヤ、そしてハンドルを握るワトソンが乗ったワーゲンバスが迎えにきてくれた。



そのワーゲンバスに、俺たちが乗り込むと……

「これで夜通し走って、ベルギーの首都・ブリュッセルまで逃げよう。残念ながら、パリにはパトラ率いるイ・ウー残党主戦派が攻め込んできたらしい。駐パリの師団は総崩れで、北に逃げてしまったんだ。今はブリュッセルがギリギリ、師団の勢力圏内だよ。でも……そこもじきに、敵味方の前線が入り乱れる事になるだろうね」

ワトソンはそう俺に耳打ちしてきて――走らせたバスは、ほどなく高速道に入る。

（俺は魔女連隊のイタリア進撃を遅らせて、拠点を判明させたが……）

戦果も虚しく……

欧州戦線は圧され気味なんだな。全体的には、まだ。

# Go For The NEXT!!!　オペラ座の妖劫（ファントム）

翌朝、ワーゲンバスはブリュッセルに着いた。
ブリュッセルはフランス語圏内だったが、パリよりずっとこぢんまりとした町だった。町並みは3～4階建ての洋館がお互い左右の壁をピッタリくっつけ、それがズラリと並ぶ様式で形作られている。その通りから見上げる空は狭く、少し圧迫感があった。
そんな、西洋の昔話で見たような光景の中……
中空知と島（しま）はブリュッセル中央駅でバスを降り、帰国の途（と）についた。
2人で帰すのはちょっと心配だったが、中空知と島はワトソン引率の下、ブリュッセル武偵高（ぶていこう）にお邪魔（じゃま）して通信科（コネクト）や車輌科（ロジ）をしっかり見学していたらしい。
修学旅行の課題は、もう十分にクリアしたと判断していいだろう。
これでもう……無関係な2人を極東戦役、俺たちの私闘に巻き込まずに済む。
そこは、ホッとしたよ。
そして、ありがとう。中空知。島。何も言わず、危険な作戦に力を貸してくれて。礼を言った俺にも「いえ、#う%に%や#」「チームの仲間を助けるのは当たり前ですの」とそれぞれ笑顔で返してきてくれて……俺たちがチームなんだと、改めて思い知らされたよ。
――ブリュッセルに残ったのは、ジャンヌ、メーヤ、ワトソン、そして俺（おれ）。
師団（ディーン）だけだ。
俺たちは町の中心部にある、リバティー・メイソンの息が掛かったホテルに入り……
男だと思われているワトソンと俺、女子のメーヤとジャンヌという部屋割りで2部屋にチェックインした。
ホテルは……外観はメルヘンチックだったものの、中はしっかり今風のシティホテル。
おかげで、過ごしやすそうだ。いい仮住まいになってくれそうだよ。ここは。
というわけで俺はワトソンによる拳銃弾（けんじゅう）の補給を受けてから、ベッドで爆睡（ばくすい）し……
……目が覚めたら、もう夜だった。うわ。12時間も寝ちゃったよ。カナみたいだな俺。
ツインだったもう1つのベッドでは今、ワトソンがくーくー寝てる。

あーもー。寝顔、カワイイな。
ヒステリアモードが解けてて良かったよ。あの状態だったら、ほっぺにチュウぐらいはしちゃってたかもしれん可愛さだ。困りもんだぜ。
「……」
室内でワトソンが寝てると思うと、落ち着かなかった俺は……
ホテルの1階に併設されていたレストランでメシでも食おうと思って、部屋を出た。
すると、ロビーで……
「遠山」
トイレの方から、ジャンヌが出てきた。
「おうジャンヌ。おはよう……でもないか。そうだ、お前もう晩メシ食べたか？」
「……いや、まだだ」
「パリじゃお前に奢ってもらったしな。何か俺がおごるよ。それでチャラな」
ここに入った時にレストランが安いことを確認していた俺が、俺らしくない太っ腹さで気前のいい事を言うと……ジャンヌは少し戸惑うような顔をしてから、



「それなら、行きたい店がある。ついてこい」
手短にそんな事を言って、俺を先導するようにホテルから出てしまった。
やっべー……藪蛇だったか。
高い店に連れていかれたらどうしよう。俺、言うほどユーロ持ってないんだけど。
パリより北にあるブリュッセルは、寒かったが……街道はそうでもない。建物が並んで長大な壁になってるからだ。この密集建築は、寒さを避けるための知恵だったんだな。
そんな事を考えながら、石畳の夜道をジャンヌについていくと……
日本の道より暗くて汚い路地、繁華街みたいなところに出た。
懐古趣味なのか単に古いのか、ガス燈が未だに使われているような道だ。
繁華街とはいえ人通りは少なく、静かで寂しい道……ネクラの異名を取る俺にとっては、悪くないムードとも言えるな。
もう夜なのでほとんど閉店していたが、そこにはいろんな店があり……
まだ開いていたのは、通りの角にある豪華な劇場だけだ。

看板には、『l'Opéra』――俺(おれ)がガルニエ宮で学んだ唯一読めるフランス語、『オペラ座』とある。

「オペラ座って、ガルニエ宮以外でも名乗っていいもんなんだな」

「歌劇場は全(すべ)て、オペラ座だ」

「ああ、そういえばパリでも教わったなそれ」

俺とジャンヌの、短い会話……

なんか言葉少なだな。今夜のジャンヌ。

ていうか、ホテルを出てから全然喋(しゃべ)ってこないし。また何かに怒ってんのかな。

ジャンヌとはルクセンブルクで信頼度を増したつもりだが、女心と秋の空。

女の感情はネコの瞳(ひとみ)みたいにコロコロ変わるものなのである。例・アリア。

ヘタな発言をして地雷を踏んでもいけないし、女子と話すのは生来ニガテな事もあって……俺は、黙ってジャンヌについていく。

そうして、オペラ座の角を曲がる時――

「……遠山、済まない」

角の向こうに姿を消しながら、なぜかいきなり涙声のジャンヌがそう告げて



くる。

……済まない？

「何がだよ」

と、俺が角の向こうへその姿を追うと――

――いない。

煙のように、ジャンヌが消えた。

「……ジャンヌ？」

道を進みながらキョロキョロと辺りを見回す、俺……

――I gave you my music made your song take wing
歌を与えた翼を与えた そのお返しが裏切りだというのか ――
and now how you've repaid me denied me and betrayed me

ブリュッセルのオペラ座からは『The Phantom of the Opera オペラ座の怪人』のオーケストラと歌が漏れ聞こえてきている。あまり、防音に気を遣ってない感じだな。

そして、その歌が佳境(かきょう)に至った時――

――ドウッ！ ギィンンンンッ！

発砲音とほぼ同時の着弾が、俺の前方僅かの所の石畳を砕いた。

「……ッ！」

今の……耳を劈くような銃声。この石畳の砕け方。ただの銃弾じゃないぞ…

……！

多分……熊や水牛を一撃で屠る.44マグナム弾の、更に2倍のパワーを誇る

――

.454カスール弾、だ。砕けた石畳の脇に光ったその弾頭は、ホローポイント弾。

人間の頭だろうが胴だろうが、当たればグシャグシャに飛び散らす弾丸だぞ。

「……っ……」

額に、汗が滲む。

銃声は――後方、上、近距離からだったシャンヌにここへ連れ込まれた。そこまそこに敵がいるんだ。俺はなぜか、ジャでは分かる。

だが、それ以上の事が分からない。頭が、それ以上の思考を拒んでいる。



そんな中でも、本能があともう一つだけハッキリ分からせてくるのは――

敵は今すぐにでも、俺を撃てるという事だ。今の初弾は足止めに過ぎない。

ヘタな動きはしない方がいい。パニックに陥ったら、弾かれるぞ。

――殺気――……！

空間が歪むような強い殺気が、背後、ナナメ上方向から放たれている。

……いるぞ。それも、今まで対峙した事のないタイプだ。超能力者や怪物に

近いような気もするが、違う。かなめやシャーロックのような剣の達人の殺気

も含んでいるが、それとも違う。言うならば、異質。何重にも異質な存在だ。

この敵は。

「……」

敵の姿を確かめるため、ゆっくり、後ろに向き直って、いき……

俺は生唾を飲み込み、銃声のした方を見上げた。

すると、高さ5mはある古めかしいガス燈の上、柄の部分に――

黒ずくめの男が、片膝を立たせて座っていた。

黒い――髪。顔を――オペラ座で俺がつけた仮面とは逆に、下半分、襟に繋がる黒布で隠している。忍者のように。

真っ黒なブーツは、銀のバックルで幾重にも留められている。
立てば膝下まで伸びるだろう、これも漆黒のロングコート。
X字に2本締めた腰ベルトまで、ご丁寧に黒だ。
そのベルトに提げた、散弾銃。ウィンチェスター・M1887。銃身銃床を切り詰めたモデル。日本じゃ規制されてるレバーアクション物だ。トリガーガードもカットしていて、極めて実戦的な銃に見える。
オープンフィンガーグローブの右手に握られているのは、マットブラックのタウラス・レイジンググブル。8.375インチバレル。あれで、このカスール弾をブッ放したのか。
だが、コイツの危険性は——銃じゃない。
X字に重ねて背負った、黒鞘の日本刀2振り。
あれが、危ない。具体的に何がなのかは不明だが、経験で、直感的にそれが分かる。
「……」
俺と同じぐらいの年齢・俺より少しがっしりした背格好をしたソイツは……
黙って、俺を見下ろしている。



顔は半分隠れているものの……明らかに、東洋人だ。
その黒ずくめの姿の中で、ほぼ唯一ハッキリと色を持つのは——
ヤツの、右眼。
右の瞳だけが——孫のように、深紅に光っている。だが、おそらくレーザーじゃない。
もっと濃くて、暗い光り方だ。そして、凶々しい。
そして、もう1つ。目つきから分かった。こいつの、これは……人を殺した事のある目。
「……眷属の……尖兵か。誰だ」
沈黙の緊張感に耐えかねて、俺が問いかけると——
「誰でもない」
答えた。日本語が通じる。発音も正しい。日本人だな。
よし。俺よ、怖れるな。何でもいいから喋るんだ。そして、喋らせろ。この分からなさすぎる状況を、少しでも把握するために。

「お前……こじらせてるな。中二病ってやつだろ、そのカッコ。理子語で言うところの」

口をつくままに、話を振ると……

「峰理子はここにはいないハズだ」

布にくぐもった声で、そう返してくる。

なるほど。こっちの事は、下調べ済みって事か。

それで確認が取れた。

コイツは――『妖刀』。

眷属の傭兵、妖刀・魔剣の2人の片割れだ。それに違いない。

「バカでかい銃を使いやがって。しかもホローポイント弾か。黙認はできないな。帯銃の免許か許可証を出せ」

武偵として振る舞うポーズで、俺がそう言うと……

「下らない話で、あまり怒らせるな。もう視えてるんだぜ」

「視えてる……？　何がだ」

「多すぎて困るぜ。１００％が65通りもある」

「だから、何が見えてるんだ」

「お前の殺し方だ」

俺の……殺し方……？

眉を寄せる俺の上で、黒ずくめの『妖刕』は――

ブリュッセルの、狭い空を見上げた。

「――いい月だな。お前の最期の月になる。よく見ておけ」

そして銃を黒革のヒップホルスターに収め、俺が危険と目した双刀に――

手を掛けた。

その視線を、再び俺に落としてくる。戦る気だ。

「言葉なんかいくら交わしたって、たかが知れてるぜ。どうせ交わすなら、こいつだろ」

チャキッ、と鯉口を切った妖刕は――

「まずは50%ぐらいで相手してやるぜ。3分だ」

「何が……3分なんだッ」

――何だ……！

「3分後、お前はもう、死んでいる」

――何なんだ、コイツは……！

# あとがき

ヤッホー！　モンブランに登ってきました（ロープウェーで）！　赤松です。

今回は小説15巻・コミック版8巻・緋弾のアリアAA6巻の、一斉発売。

夏の恒例、アリア祭でございます！　お祭り太鼓を叩く私も嬉しいですよー！

さて、今回のあとがきは久々の『緋弾のアリアQ&Aコーナー』から参りましょう。

**Q：『キンジのヒステリアモードには、どんな種類があるんですか？』**

1巻からお馴染みの、ヒステリアモード。実はこれはキンジの造語でして、医学的にはヒステリア・サヴァン・シンドロームと呼ばれる特異体質です。

今回キンジはほぼ通常の『ノルマーレ』しか発症しませんでしたが、作中では確かに、あと幾つかの亜種が確認されています。

まずはカナこと金一が見せた、死にかけると発症する『アゴニザンテ』。女性を自分から奪われそうになると発症する『ベルセ』はノルマーレの1・7倍の効果を得られますが、その血が完全に行き渡ると思考が攻撃一辺倒になる両刃の剣です。

ベルセを経験後に発動する『レガルメンテ』は、動物でいうところの自分の群にいると認識している女性1人が滅ぼされるにつき通常の1・2倍の効果が累乗されていきます。

キャストオフ・テーブルでキンジがなった『ワイズマン』は、どちらかというと後遺症みたいなものですが……戦闘力が無くなる代わり女性に興奮しなくなるという、使い所の難しいものになります。

読者の皆さんは――キンジが今後アゴニザンテやレガルメンテになるほど追い詰められないよう、祈ってやってくださいね。まあそれも、私の胸先三寸で決まるんですけどね！



ここからは、本編のネタバレになりますが……

この巻で登場した謎の男、『妖刀』。彼は、電撃文庫さんより好評発売中の私の別作品『やがて魔剣のアリスベル（既刊3巻）』からクロスオーバーで登場した主人公です。

手ごわい強敵に奇襲を受けたキンジですが――武偵は、やられたらやり返す

もの。この落とし前は、未来のキンジが、来月発売予定の『やがて魔剣のアリスベル　ヒロインズ・アソート』でしっかり付けに行くつもりらしいですよ。
そちらもぜひ、ご期待下さいね！

ではまた、次は――パリの日が短くなる頃に、本屋さんでお会いしましょう。

2013年8月吉日　赤松中学(ちゅうがく)

祝!
アリア
15巻!
■今回は孫ちゃんが表紙でした！
いかがでしたでしょうか。
今回もキンジがモテモテ
ですね。モテ王キンジ。
■カツェ描いててふと思ったのですが、
緋弾のアリアではおかっぱっつん指定が
割りと多いのですが
赤松先生のご趣味でしょうか
いつか聞いてみたいです。
それではまた！